

平成27年度

香川大学 地(知)の拠点 整備事業活動報告

 香川大学



はじめに

地域社会からの課題やニーズに対して、自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育、研究、社会貢献を進める大学に対して、国が重点的に支援する事業が開始し、香川大学では平成25年度に文部科学省「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」に「自治体連携による瀬戸内地域の活性化と地（知）の拠点整備」という事業名で採択を受けました。

本学が取り組むCOC事業は、事業名にもありますようにキーワードはまさに「自治体連携」です。香川大学が県内自治体や企業等と一層緊密な連携をとり、本学の教育研究の成果を活用していただき、地域活性化に寄与していくことを目的としています。

本報告書は、COC事業の3年目（平成27年度）の活動内容をまとめたものです。教育面では、「地域に貢献できる人材」「課題探求・解決力のある人材」「主体的な学びができる人材」—この3つの指針に基づく人材育成を通じて、地域に愛着を持ち、自信を持って社会に出られる人材の育成を目標としています。

研究面では、新産業創出プログラムとして希少糖研究の推進、ものづくり人材創出拠点の形成に取り組むことで、より地域貢献を前提とした研究を推進してまいります。

地域貢献においては、県内に5か所のサテライトオフィスを開設しています。本学の教育研究の成果、あるいは学生の課外活動、そのような成果を発表してだけでなく、地域住民の皆様を生涯学習の場として活用していただいております。

COC事業を推進していくにあたり、地域の皆様の多大なるご協力・ご支援をいただいておりますこと、この場をお借りして御礼申し上げます。本報告書に対するご意見、ご要望等をお寄せいただくと幸甚です。

本学は、「地（知）の拠点」そして「地域に根ざした学生中心の大学」として、これからも地域とともに協働する大学として教育、研究、地域貢献を三本の矢として位置づけ、一塊となって取り組んでまいります。引き続き本事業へのご理解・ご協力をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

国立大学法人 香川大学

学長 長尾省吾

contents 目次

Ⅰ 序文 01

Ⅱ 香川大学COC事業について 03

教 育

瀬戸内地域活性化プロジェクト 09

地域インターンシップ 35

鍛えあげ型人材育成プログラム 41

公募事業（教育フィールドワーク型授業）… 43

研 究

希少糖 50

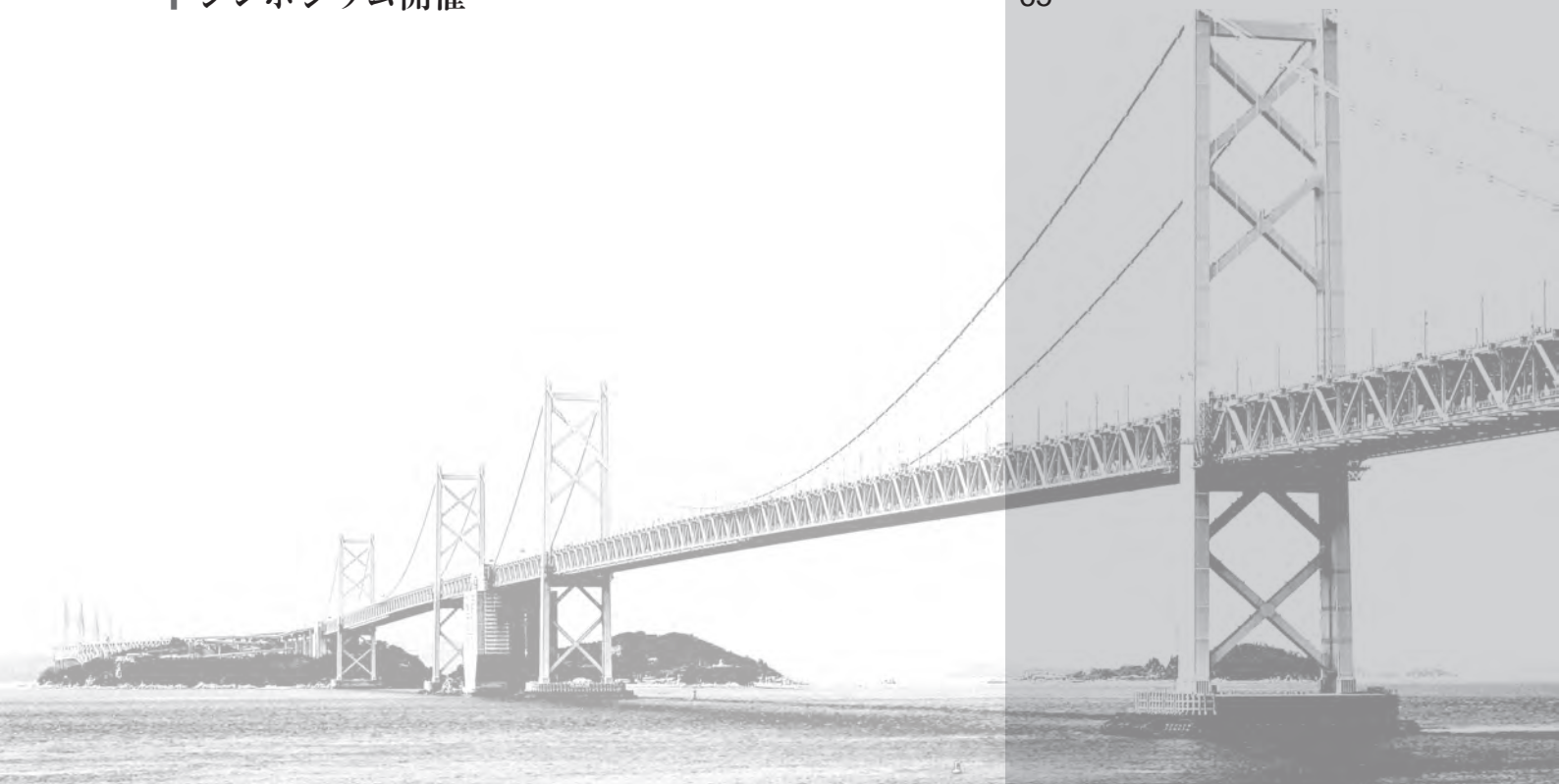
源内塾 58

社会貢献

サテライトオフィス 60

モバイルミュージアム 64

Ⅲ シンポジウム開催 65



香川大学COC事業について

事業名	自治体連携による瀬戸内地域の活性化と地（知）の拠点整備
連携自治体	香川県、高松市、丸亀市、三豊市、東かがわ市、観音寺市、三木町、宇多津町（香川県および5市2町）

1 教育・研究・社会貢献による香川県が抱える課題解決をめざして

国勢調査によれば、香川県の人口減少率は10年来続いており、20歳前後の減少率が非常に高い。コミュニティに目を向けると、高齢化が進み、地域の担い手が不足している状況がある。とりわけ、瀬戸内の離島では急速に高齢化が進み、地域社会を維持していくことが困難な地域もある。

商店街では、再開発地区の周辺で賑わいを取り戻せない地区やシャッター街になっている地区もある。このような現状を打解するべく、香川県内では、定住促進、離島振興、商店街振興、観光振興、コミュニティ活性化に着手することが急務となっている。

他方、香川県には、希少糖、医療IT、オリーブ

や讃岐三畜、アートツーリズムなどの分野で、全国的にも競争可能な地域資源がある。しかしながら、これらも地域活性化に十分に活かされているとはいえない現状もある。地域に蓄積されたこうした資源・技術をさらに磨き、市場のニーズに合わせて活用し、スピード感をもって事業展開していく必要があるのである。

本学COC事業は、県内5市2町ならびに県と連携をしながら、これらの課題に取り組むものである。また本学はこれにより、香川県内の活性化に加え、本学の教育改革—地域貢献を志向する大学への変革—を進めることを目指している。

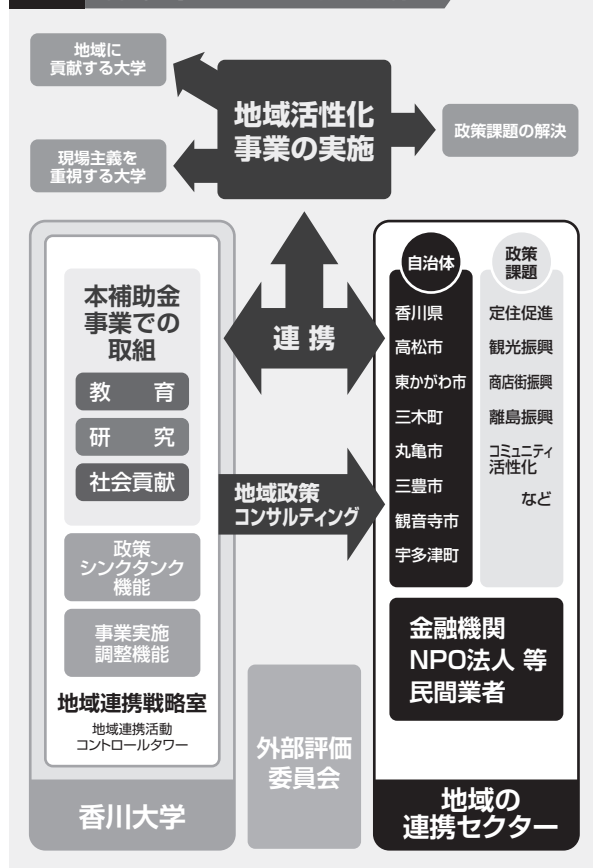
2 本事業の全体像・特色（採択当初の事業計画）

香川大学は、香川県唯一の総合大学としての知の集積地としてのメリットと、これまで培ってきた地域との信頼関係を基礎として、教育・研究・社会貢献の3分野においてCOC事業を推進している【図1】。

各分野の取組概要は次項のとおりであるが分野横断的な特色は、次の2点である。

- プロジェクトの財政負担を大学：自治体＝5：5とし、自治体の財政支援を明確にしている。
- 地域活性を目的とした大学院地域マネジメント研究科の地域公共政策に関するシーズを活かしている。

図1 香川大学のCOC事業推進体制



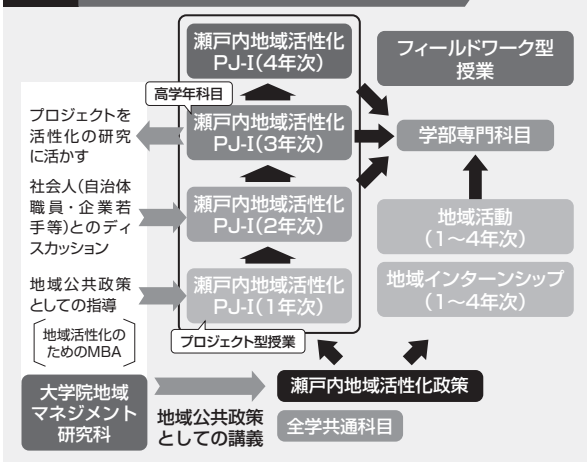
教育分野

教育分野においては、各連携自治体が抱える課題（定住促進、地域活性化、観光振興、街活性化、産業振興等）を解決するプロジェクト型科目を立ち上げることで、地域の課題解決と地域貢献型大学への変革を目指している。具体的には、全学共通科目に平成25年度より**瀬戸内地域活性化プロジェクトⅠ～Ⅳ**（対象：1～4年次生、現在はⅠ～Ⅲを開講）を順次開講している。同科目では、在学生在が4年間の学生生活において継続的に地域が抱える課題に取り組むことで、課題探求・解決力と社会対応力を持った、地域に貢献できる人材を育成することを目指している。

加えて、自治体連携プロジェクトの実施にあたっては地域公共政策の知識が不可欠であることから、これについて学修する**瀬戸内地域活性化政策**（対象：1年次生、全学共通科目）を平成25年度より新たに開講した。また、地域づくりに関わる仕事について低年次で実践的に学修できるよう**地域インターンシップ**（対象：1～2年次生、全学共通科目）を平成26年度より開講した。この2科目は、本事業教育分野の核といえる瀬戸内地域活性化プロジェクトでの学びを補完する科目と位置づけられている。

本事業では、瀬戸内地域活性化プロジェクトをはじめとする上記全学共通科目での学修を各学部での専門的な学びへと接合させるための仕組みづくりにも取り組む予定である。その足がかりとなるのが、各学部において開講されている**フィールドワーク型授業**であることから、本事業では学部専門科目であるフィールドワーク型授業の充実にも取り組んでいる**図2**。

図2 本学COC教育プログラム全体図



研究分野

研究分野においては、地域貢献を前提とした研究として、**希少糖関連事業と医療・福祉関連事業（新産業創出プログラム）、学生・社会人が協働する発展型「ものづくり人材創出拠点の形成」事業**を推進している。なかでも希少糖関連事業は、希少糖が香川大学の研究で生まれたシーズであり、世界に通用する最もホットな分野であることから中心的に展開をしている。

希少糖は自然界に微量にしか存在しない糖の総称であるが種類は多く、100種類以上存在する。このうち、本学を中心とする県内の研究施設や企業などが産学官連携プロジェクトをすすめたことで、D-プシコース、D-アロース、D-タガトースの研究が過去10年間で急速に進んだ。現在は次の段階として、①希少糖の大量生産の確立、②D-プシコースの抗肥満作用機序の解明、③希少糖食品開発研究、④D-プシコースの糖尿病や肥満の患者への臨床応用研究、⑤D-タガトースを用いた抗う蝕製品の開発研究、などが必要となっている。そこで本事業においては、香川県ならびに三木町などの自治体の支援の下、県内の公設試験研究機関と共同してこれらの課題解決を目指している。

医療・福祉関連事業においては、糖尿病や肥満、高血圧症など生活習慣病についてのトータル管理システムについての検討と、これに必要な糖尿病クリティカルパスの充実や電子処方箋の確立、有効な使用方法についての研究をおこなうこととしている。また、自治体とともに児童の健康管理を考えている。

ものづくり事業においては、大学の技術移転とその実用化に至る際の連携のあり方や支援の方法などについて研究をおこなっている。複数のプレイヤーが連携する際の方法、地域に基盤を残すシステムの作り方、特許など知的財産の管理と活用などについても研究をすすめている。本事業ではさらに、地域企業と大学院生を対象にした、高付加価値製品の企画・製品化能力を身につける人材育成も展開することとしている。

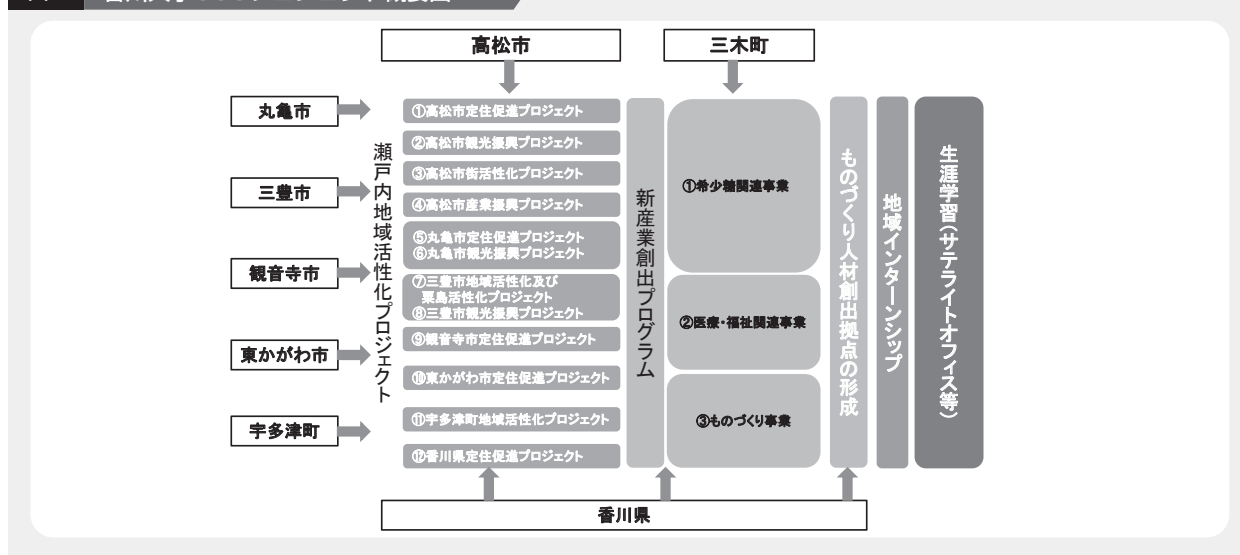
社会貢献分野

香川大学は地域に開かれた大学を目指し、大学憲章においても「[知]の源泉として地域のニーズに応えるとともに、蓄積された研究成果をもとに、文化、産業、医療、生涯学習などの振興に寄与する。」と宣言し、社会貢献を大学機能の一部として重視している。このうち、生涯学習の振興においては長らく生涯学習教育研究センターが拠点であったが、近年の動向として大学博物館における企画展やミュージアム・レクチャーの開催、サテライトオフィスにおける多様な講座・イベントの展開、教育学部「未来からの留学生」や他部局のオープンキャンパスでの一般向け講義や体験型展示の増加など、各部局による取組が活発化している。

しかし、各部局による取組が量・質ともに全体として底上げされている一方で、部局縦割りの弊害により全体の連絡調整、情報発信の一元化に課題がある。地域住民にとっては、いつどこでの部局が地域住民の参加できる講座・イベントを開催しているのか多くの場合に分かりづらく、その改善が求められている。

こうした現状をふまえ本事業の社会貢献分野においては、**生涯学習振興にかかる体制整備、広報機能の強化、各部局の生涯学習機能および事業の充実、生涯学習振興にかかるFD・SDの実施、教職員評価の再検討、学生協力体制の整備、サテライトオフィス機能の充実**の7項目に取り組むこととしている【図3】。

図3 香川大学COCプロジェクト概要図



3 体制

本学はこれまで、文部科学省の大学教育改革推進補助金事業（教育GP、産業GP、就業力GP等）の採択をうけて、積極的な教育改革、地域連携教育事業を実施し、一定の成果を上げてきた。しかしその反面、個々の教員の活動を有機的に結びつける全学的な部門の整備は万全といえる状況ではなかった。また、地域連携型の科目はあるものの、科目間につながりを持たせたカリキュラム編成の整備も十分とはいえなかった。こうした課題をふまえて新設された部門が**地域連携戦略室**（平成25年11月新設）である。

同室は、これらの課題に取り組むほか、COC事

業の推進部局として上記3分野のプロジェクトの調整・実施、自治体との連絡・調整、学内調整、広報（学内外）を担っている。室員は、室長である地域連携担当理事をはじめとする教員7名（専任5、任期付2）から構成されており、事務手続きは地域連携担当の大学本部事務局がおこなっている。

COC事業に関する会議体としては、**地域連携戦略会議**と**地域連携戦略会合**を設置している。前者が部局間の調整・意見交換・審議機関、後者がCOC事業を始めとする地域連携事業の学内最高審議機関である。**評価委員会**は、COC事業開始当初の体

制を見直し、今年度より、内部評価委員会（学内4名、連携自治体4名計8名）・外部評価委員会（県

内外有識者7名）の2委員会を設け、審査・助言機能の充実をはかった。

4 今年度実施計画

教育分野

教育分野の事業は、4つに大別することができる。

第一は瀬戸内地域活性化プロジェクトである。これは、自治体の支援を受けつつ「瀬戸内地域活性化プロジェクトⅠ」（開講2年目）ならびに「瀬戸内地域活性化プロジェクトⅡ」（2年目）に加え、「瀬戸内地域活性化プロジェクトⅢ」を新設し、これら3科目において11の地域プロジェクトを実施する。あわせて、「瀬戸内地域活性化政策」を開講（3年目）することで自治体連携による実践的な教育を行うこととした。

第二はフィールドワーク型授業として、「地域インターンシップ」（2年目）においては受け入れ先と運営体制の充実をすすめる、各学部で開講されているフィールドワーク型授業においては、今年度COC事業で特に支援をする科目を選定し、科目内容の充実を目指すこととした。

第三は、地域志向科目として平成28年度新設開講することが決定しているe-Learning科目（3科目）のコンテンツ制作に取り組むこととした。

最後に第四として、地域貢献のできる人材育成のための講義型および実践型のインターンシップを昨年度同様実施することとした。

研究分野

研究分野の希少糖関連事業、医療・福祉関連事業、ものづくり人材創出拠点形成事業の3事業のうち、まず希少糖関連事業においては、希少糖の研究シーズを膨らませることにより新産業創出につながる取り組みを展開するべく、①希少糖のうちD-ブコースの地元企業等へ十分に供給できるネットワークを作り、②希少糖に関する啓発活動や正確な情報の地域住民や地元企業への提供を促進し、③地元企業等と共同で研究をおこなうこととした。

つぎに、医療・福祉関連事業においては、三木町や香川県の支援を受けて、町民・県民の生活改善を図ることに取り組むこととした。なかでも、児童の

間で進みつつある糖尿や肥満の改善を図り、またこれに関連する事業展開を行なうこととし、具体的には①啓発活動や運動指導の展開を行う、②健康に優しい食品開発を行う、③三木町の健康・福祉施策へ参加協力することを計画した。

最後に、ものづくり人材創出拠点形成事業では、地域再生に向けた「ものづくり人材創出拠点形成（源内COC事業）」を創設し、学生・社会人が協働する発展型の「ものづくり人材創出拠点」を形成することとした。新産業の創設につながる取組として、核となる技術開発支援と、学生・社会人が協働する発展型の「ものづくり人材創出拠点」を形成するための新しい教育プログラムの実施を開始することとした。

社会貢献

生涯学習社会における主役は学習者であり、生涯学習の振興にあたっては漏れなく学習情報を届けることが重要である。特に、本学が取り組むサテライトセミナーについては中規模（複数自治体）エリアでの実施を想定しており、自治体の有する広報機能との連携が欠かせないことから、今年度は、ホームページの改修や自治体との相互乗り入れ、情報発信の工夫、SNS活用等、多面的に検討して、有効な組み合わせを試行することとした。加えて、生涯学習事業への学生協力体制について、学生サークルや課外活動等の成果活用を視野に入れた多様な機会を検討し、一部試行的に実施に移すことを計画した。

全体

評価委員会の開催、FD/SDなど活用した本取組ならびに地域志向教育に関する学内広報、本取組に関する学外向け広報のとしてシンポジウムの実施を計画した。

平成27年度事業活動一覧

教 育	瀬戸内地域活性化プロジェクト
	①香川県定住促進プロジェクト（地域づくりインターンシップ）
	②香川県島活性化プロジェクト
	③高松市定住促進及び街活性化プロジェクト
	④高松市観光振興プロジェクト
	⑤高松市産業振興プロジェクト
	⑥丸亀市観光振興プロジェクト
	⑦丸亀市定住促進プロジェクト
	⑧三豊市地域活性化及び粟島活性化プロジェクト
	⑨三豊市観光振興プロジェクト
	⑩東かがわ市定住促進プロジェクト
	⑪観音寺市定住促進プロジェクト
	⑫宇多津町活性化プロジェクト
	フィールドワーク型授業
	①地域インターンシップの実施
	②フィールドワーク型授業の実施
	e-Learningコンテンツの拡充
	①平成28年度新規開講予定COC関連e-Learning科目（3科目）のコンテンツ制作
	「鍛えあげ型人財育成プログラム」
	①鍛えあげ型人財育成プログラム（正課）の実施
②鍛えあげインターンシップの実施	

序
文

概
要

教
育

研
究

社
会
貢
献

シ
ン
ポ
ジ
ウ
ム
開
催

序 文	希少糖関連事業推進（新産業創出プログラム）	
	①希少糖のうちD-ブシコースの地元企業等へ十分に供給できるネットワークを作る	
	②希少糖に関する啓発活動や正確な情報の地域住民や地元企業への提供を促進する	
	③地元企業等との共同開発を展開する	
概 要	研 究	
	医療・福祉関連事業推進	
	①啓発活動や運動指導の展開を行う	
	②健康に優しい食品開発を行う	
教 育	③三木町の健康・福祉施策へ参加協力する	
	ものづくり人材創出拠点形成	
	研 究	社会貢献事業
		①サテライトオフィスの充実（コンテンツと共に広報面の充実を含む）
②地域課題に向き合うサテライトオフィスを考えるワークショップの開催		
③一流の音楽に触れる機会の少ない地域でのコンサート活動（学生と地域とを結びつける機能を含む）		
社 会 貢 献	④自然史標本資料に接する機会の少ない児童や地域住民を対象としたモバイルミュージアム活動	
	全 体	
	COC事業の運営・評価	
	①各種事業アンケート集計、評価の原資料作成	
シ ン ポ ジ ウ ム 開 催	②COC評価委員会開催（内部評価委員会および外部評価委員会）	
	③FD/SD開催	
	④全国規模のシンポジウム開催	

「①高松市街活性化プロジェクト」

科目担当教員 鈴木 健大 (地域連携戦略室・特命准教授)
 連携自治体 高松市

1. 授業目的

高松兵庫町商店街は、高松中央商店街の北西部に位置し、中央通りを挟んで東西一直線上に伸びる総延長約400mの商店街である。江戸時代に高松藩の武器庫が堀に沿って並んでいたことからその名がつけられたといわれている。高松中央商店街を構成する8商店街の中では最もJR高松駅に近い場所に位置し、朝夕を中心に通勤の人通りが多く見られる一方、店主の高齢化、後継者問題、顧客の高齢化・郊外店への流出等の課題を抱えている。現在、同商店街振興組合に加盟している店舗数は83、空き店舗は1となっている。

プロジェクトを開始するに際し、商店街振興組合と準備の相談を重ねる中で、特に若い世代の商店街離れを杞憂されていたことから、プロジェクトのテーマを「商店街に行こう」と設定した。

2. 実施概要

(1) プロジェクトの進め方

- ・一年間を「現状理解(調査)及び課題の整理」「課題解決に向けた活動計画」「実践」「振り返り」のPDCAサイクルの流れで行い、「振り返り」を次年度プロジェクトに生かしていく。
- ・「計画」段階では、主観的な感覚・気づきを感じ、チーム協働でアイデアを生み、プロトタイプをつくって体で考える「デザイン思考」の要素を組み入れる。
- ・「実践」段階では、「モノ」ではなく、「人と人のつながり」でまちを元気にしていく「コミュニティデザイン」を基本に組み立てていく。

(2) 参加学生

17人(経済学部1年生)

(3) 実施内容

①ヒアリング調査

「店舗ヒアリング」は、6月中旬から7月下旬にかけて、6班に分かれて12店舗を訪ね、店の歴史、商品(メニュー)構成、顧客の特徴、商店街の良さや課題等についてヒアリングを行った。

②通行者調査

「通行者調査」は、兵庫町商店街を通行する人数のボリュームや年齢層について概況を把握するために行った。商店街東西の2地点において、学生の授業の空き時間や放課後を活用し、平日7:30-19:30までの7コマ(各60分)で、通行者数及びそのおおよその年齢層について測定を行った。

③商店街の「魅力と課題」の整理

フィールドワークを通じて商店街の「魅力と課題」を整理し、「商店街に行こう」といったテーマもふまえて、大学生以下を主なターゲットに兵庫町商店街をPRする取組の全体方針を設定した。

大学生が自分たちで実行できるアイデアを練り、商店街と意見交換を行って実施内容を決定した。

④ハイティーンを対象にした商店街紹介冊子「わたしたちとひょこりまっぷ」

商店街に大学生・高校生に来てもらおうと、その世代に関心が高い商店街の「食」に視点を当てた広報誌を作成した。学生が実際に食べて美味しいと思ったり、同世代に勧めたいと思ったりしたメニューがある店舗を取材した。広告代理店からは、広報誌の作成にあたって作業の基本事項について講義を受けた。雰囲気に近い雑誌を探し、具体的なイメージをつくって、レイアウトデザインのイメージスケッチを行った。

⑤大学生視点による情報発信

兵庫町商店街のゆるキャラ「ひよこたん」を切り口に、大学生視点でSNSを活用した情報発信と「ひよこたん」を活用した商品開発に取り組んだ。SNSを活用した情報発信としては、「ひよこたん応援隊」と名付けたTwitterとFacebookを平成27年10月末から開始した。学生が商店街を取材に訪ね、週1、2回ほど個店の紹介やイベントに関する情報などを発信した。

「ひよこたん」を活用した商品開発としては、老舗菓子店に「ひよこたん」の焼き印が入ったカステラを製作してもらい、12月の商店街イベント時に24個限定で販売し、商店街のPRにつなげた。

⑥商店街における空き店舗を活用した若い世代のコミュニティ形成の試み「ひよこたん島」

商店街で大学生以下の世代を見かけることがほとんどないことから、地域の子どもたちに商店街に親しんでもらおうと、そこに大学生ができることを掛け合わせて、放課後に地域の子どもたちが商店街で大学生と宿題ができる場づくりを計画していくこととなった。会場である空き店舗を活用したシェアスペースは、広さが約30㎡と大勢の子どもたちが集まることは難しいことから、今回広報の範囲は主に商店街内とその周辺に留めた。プロジェクトのネーミングは「ひよこたん島」に決まり、折り紙や画用紙でスペースの飾りつけを行い、11月から試みを開始した。

「ひよこたん島」は計4回開催した。宿題やお絵描き、折り紙等を行い、12月23日(祝)は商店街クリスマスイベントに合わせて松ぼっくりツリーづくりなどのワークショップを実施した。



「ひよこたん島」外観(左)と宿題教室(右)の様子

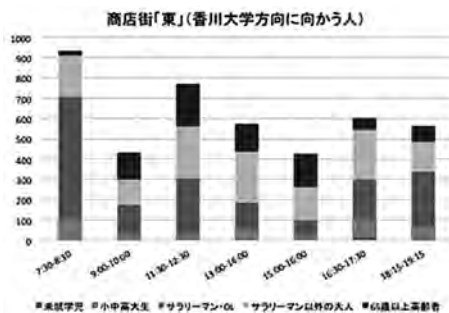
3. 得られた成果

①ヒアリング調査

学生たちは、商店街に老舗の店が多いことや若年層世代の来街が少ないことなどが分かり、顧客の高齢化・売り上げの減少・後継者不足・宣伝方法等、店舗共通の課題があることも分かった。

②通行者調査

通行者の年齢層については、目視のため正確性には欠けるが、通行者を「未就学児」「小中高大学生」「通勤者」「通勤者以外」「65歳以上」に5分類してその数を測定した。兵庫町商店街は中央通りを挟み東西に分かれており、西側では、主に通勤者が朝に集中して通るが、東側では朝夕のほか昼食時にもピークが現れる。東西とも大学生以下の世代の通行は少なく、最も少ない時間帯だとその時間帯における全通行者数の6%ほどであった。



兵庫町商店街（東側）における一日の通行者調査の結果（平日）

③商店街の「魅力と課題」の整理

学生たちが商店街を訪ねる中で、彼らが感じとった商店街の「魅力」と「課題」について整理した。「魅力」については、「駅に近く、通勤で通る人が多い」「昼休みにサラリーマンが多く訪れる」「歴史のある店が多く常連客が多い」「店主同士が仲良く協力的で商店街を愛している」「ゆるキャラ『ひよこたん』がいる」「無料駐輪場がある」「シャッター数が他の商店街より少ない」等、「課題」については、「閉店時間が早い」「通り抜ける人が多い」「商店街やお店の情報が少ない」「若い人が少ない」等といった点が挙げられた。

さらに、大学生自身が普段商店街を利用しない理由についても整理を行った。「どんな店や商品があるのかわかりにくい」「値段が高いイメージ」「若者向けの店がなさそう」「お店に入ると何も買わずに出がたい」等が挙げられた。

④ハイティーンを対象にした商店街紹介冊子「わたしたちとひよっこりまっぷ」

マップは、学生のお勧めと掲載希望のあった計



食歩歩きマップ「わたしたちとひよっこりまっぷ」

14店舗を紹介し、商店街や大学窓口等に設置した。

大学生視点による取材、構成となり、ハイティーンにとって親しみやすい紙面となった。商店街がこれまでできなかった大学生へのPRにつながった。

⑤大学生視点による情報発信

Twitterでは主に大学生を中心に130のフォロワーが生まれ、大学生に対して商店街のPRができた。しかし、Facebookの「いいね」数は16にとどまった。

商店街ゆるキャラ「ひよこたん」の焼き印が入ったカステラを冬の商店街イベント時で販売し、販売個数は24個と少なかったものの注目を集め、商店街のPRにつながった。



Facebookトップページ（左）とカステラ販売の様子（右）

⑥商店街における空き店舗を活用した若い世代のコミュニティ形成の試み「ひよこたん島」

子どもたちは宿題だけでなく、大学生たちと話しながら折り紙をしたり、絵を描いたりして楽しそうな様子が見られた。お互い気心が知れてくるにつれ、小学生が大学生を連れて商店街を案内する場面も見られた。保護者からは、「仕事を持つ親として、こんな場所を待ち望んでいた」「ぜひ回数を増やして続けていってほしい」といった声が寄せられた。

今年度の成果の一点目は、一年といった長期間にわたって、まちなかに学生が通い続けたことであろう。商店街の方々も一年間を通じて学生たちと接したことは初めてのことだったと思う。大学生たちは通うことでまちの大人たちと話し、まちのことも知り、さらには自身が商店街の顧客になることにもつながっていった。成果の二点目は、少なからず大学生以下の世代に商店街がアプローチできたことである。これまで兵庫町商店街では若い世代へのアプローチが必ずしも十分ではなかったが、SNSやマップを通じて、また「ひよこたん島」における大学生と近隣の子どもたちとの交流を通じて、商店街を知ってもらう機会が新たに生まれたことである。

4. 今後の課題

一年間の授業を終えて、平成28年1月末に学生、商店街、高松市とで年間活動報告・意見交換を行った。商店街からは「ひよこたん島」や「情報発信」に対して次年度継続の要望が示されたほか、「商店街振興組合では思いつかないことをいくつも提案してもらった」「買い物をしなくてもお店を見に来たり、挨拶に来たりしてほしい」といった感想が学生に寄せられた。

継続的に学生が履修し、商店街で実施が難しい情報発信や今年度継続要望が高かった「ひよこたん島」を次年度以降も多くの個店と連携しながら継続することが求められる。

「②高松市観光振興プロジェクト」

科目担当教員 西成 典久 (経済学部・准教授)

連携自治体 高松市

1. 授業目的

瀬戸内国際芸術祭2016を1つの目標とし、屋島の夕夜景を活用する屋島にしかできない取り組みを学生の視点から企画し、実際に運営を行う。屋島最大の観光資源である夕夜景が活用されていない実態に着目し、伝統工芸・讃岐提灯を活用した屋島活性化プロジェクトとして取り組む。

2. 実施概要

高松の代表的な観光地である屋島を舞台として、課題解決に向けた取組を行った。屋島の問題点として、現状は源平合戦の地というイメージが強く、若年層に屋島の魅力が届いていない、という点が挙げられる。学生目線からいえば、屋島の夕夜景が最大の資源であるにも関わらず、ほとんど活用されていない、という問題も浮かび上がってきた。

そこで、新たな切り口として高松の伝統工芸である「讃岐提灯」に着目し、「提灯」と「屋島の風景」を連携させることで、屋島の新しい魅力づくりに貢献する活動を進めてきた。今年度は、屋島天空ミュージックと連携した提灯飾り（夏）と一夜かぎりのちょうちんカフェ（冬）を実施した。

4-5月

- ・屋島を応援する学生チームの結成
- ・屋島活性化団体への活動支援と取材（インプット）

6-7月

- ・屋島活性化団体との活性化策協議検討
- ・学生の活性化策アイデア発表会（アウトプット）

8-10月

- ・イベント（実証実験）

屋島山上で行われる音楽イベント「天空ミュージック」の開催に合わせて、てづくりの讃岐提灯で会場から駐車場までの道しるべを作った。

1月

- ・「一夜限りのちょうちんカフェ」の企画（社会実験）
屋島の夜景の美しさを地域住民に知ってもらった

め、1日限定で屋島山上において飲食店を営む店主の方に協力いただき、夜のカフェ営業を実施した。

3. 得られた成果

- ・屋島山上での現地視察や屋島山上観光協会へのヒアリング、高松市政策課および観光交流課との意見交換会を通じて、学生による問題点把握、課題解決策を考案し、レポートを作成した。

* 屋島の問題点

- ・交通の便が悪い
- ・閉まっている店が多い
- ・魅力発信がうまくできていない
- ・灯りが少ない
- ・お金が落ちない



* 解決に向けたアクション

屋島×〇〇
↑
香川の伝統工芸の讃岐提灯



2015.09.12 朝日新聞の記事より転載

* 屋島天空ミュージック(9/12)

- ・街角に音楽を@香川と連携
- ・111個の折提灯を作成
- ・会場から駐車場への道を道しるべ



- ・高松の伝統工芸「讃岐提灯」に着目し、一子相伝で伝承している三好提灯店にて「折提灯」の技法を習い、大学にて簡単な「折提灯」が作成できるようになった。
- ・その「折提灯」を用いて、屋島天空ミュージックと連携した提灯飾り（夏）を実施し、来場者等合わせて約1,000名近い方々に屋島山上での提灯飾りを楽しんでもらった。Facebookで報告したところ、1記事平均約3,200の方に見ていただいた。
- ・また、評価の高かった「折提灯」を用いて屋島の夜景を活用する取り組みを考え、夜景が見える唯一の店舗であるれいがん茶屋にて一夜かぎりのちょうちんカフェ（冬）を実施した。社会実験が目的のため、開催は1日のみとし、来客約30名にアンケート調査を実施した。提灯を用いたカフェ内装については9割、総合満足度については全て

※「一夜かぎりのちょうちんカフェ」(2016/01/25)

- ・屋島の夜景 × 讃岐提灯 × 高松でしかできない魅力づくり
- ・屋島の夜景と提灯をコラボさせる社会実験



※「一夜かぎりのちょうちんカフェ」(2016/01/25)

- ・市役所の方、大学関係者など約30名を招待
- ・屋島山上のガイド
- ・ちょうちんを飾り、軽食を提供
- ・ちょうちんの間



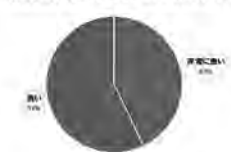
※「一夜かぎりのちょうちんカフェ」成果

・アンケート結果

0.カフェの雰囲気、内装はいかがでしたか？



0.総合的に今回のイベントはいかがでしたか？



来場者からの自由記述コメント

- ・屋島からの夜景の素晴らしさを知れた、瀬戸内国際芸術祭へ続けてほしい。
 - ・屋島の夜景と提灯カフェ、すごくマッチしていいアイデアだと思います。
 - ・提灯をひとりひとり持って歩くのは「参加している感」があっても良かったです。
- …などなど、継続に向けた前向きなコメントをいただきました！

※「一夜かぎりのちょうちんカフェ」成果

・四国新聞、読売新聞、に掲載



・地元のニュース番組で放映



※活動成果

- ・屋島観光の問題点に対して屋島の夕夜景に可能性を感じてもらうことができた
- ・屋島山上の方々に対して学生が関わることで、前向きな気持ちへと変化した



の方に「良い」「とても良い」と回答いただいた。イベントについては地元マスコミ（四国新聞、読売新聞、KSB）に大きく採りあげてもらった。Facebookで報告したところ、1記事平均約3,300の方に見ていただいた。

4. 今後の課題

- ・学生の自主的な取り組みに昇華させるため、うまくレールを引いていく必要がある。
- ・単発の取り組みで終わらず、継続的な取り組みにつなげていく必要がある。
- ・こうした活動を応援してもらえ地域側の雰囲気づくり、活動への理解をしてもらう必要がある。

5. 参加した学生のコメント

【参加した学生のコメント】

- ・屋島山上の活性化を考えるうえで、ただ単に自分たちのしたいことを提案するのでは地域の方々の意見が反映されず、ただの自己満足で終わってしまうことに気づいた。
- ・良い活動を行うためには、メンバーと意識を共有し、モチベーションを高めていく必要があると感じた。
- ・自分たちが動くことで多くの方々につながる事ができた。
- ・屋島地区や香川に対して愛着がわいた。

「③高松市産業振興プロジェクト」

科目担当教員 古川 尚幸（経済学部・教授）

連携自治体 高松市

1. 授業目的

高松市には昭和31年に策定された「伝統的ものづくり振興条例」がある。そこで定めた伝統産業ならびに伝統工芸品に着目し、高松市に在住する学生の理解を深めるとともに、産業としての伝統工芸品についての振興方策を打ち出すことを目的とした。しかしながら、学生にとって普段身近にない伝統工芸品について、振興方策をひねり出すには無理があり、まずは関係者から基礎知識（歴史や製法、職人、用途、流通等）を得た後に、学生目線で検討することとした。具体的には、高松盆栽や香川漆器、庵治石などを取り上げることとした。高松盆栽については、Bonsai☆Girls Projectによる認知度の向上ならびに情報発信を行った。香川漆器については、香川大学直島地域活性化プロジェクトが運営するカフェにおいて、全国からの来店客へ香川漆器を使った料理や飲み物の提供をした。来店客へのアンケート調査等を実施することで、香川漆器の認知度の向上とその情報発信、香川漆器との親和性の高い新たなメニューの開発などを目指した。

2. 実施概要

実施の中心は、高松盆栽と香川漆器、庵治石であった。これらに共通するイメージとしては高級感が強く、学生や一般の人とは縁遠いところである。外国からは注目を集めているものの、今ひとつ国内の注目度は低いという、そのような課題を持っている。学生が関わることの意義は、伝統工芸品をもっと身近に感じられるような工夫ができないか、ということであろう。そのような前提で取組を始めた。以上3つの題材を正確に理解するために、産地の現状を学びに現場へ赴き、直接生産者から話を聞いた。

【高松盆栽】

高松盆栽の産地として知られる高松市鬼無町に出向き、盆栽作家から高松盆栽の現状と課題について説明を受けた。その後、学生はそれぞれ継続的に盆栽教室に参加し、技術を学んだ。



ここで学んだ技術を活かして、高松市内外の商店街等で開催されるイベントに積極的に参加し、盆栽ワークショップを開催するなどその普及を図った。この活動は高松市内のコミュニティセンターにも認知され、学生たちは生涯学習講座の講師として招かれた。このように、学生たちは子どもから高齢者まで様々な世代を対象として、盆栽ワークショップを企画・運営した。

【香川漆器】

香川漆器の製作所（高松市松島町）に出向き、漆器作家からその現状と課題について説明を受けた。こちらはにわか勉強で扱える（製作できる）ものではないので、雰囲気を教わった後に、どのような活



用の方法があるのかを学生とともに考えた。

結論としては、実際に使ってもらうことで身近に感じてもらうということになった。目的でも書いたように、香大生が直島で運営しているカフェにおいて、香川漆器を使った料理や飲み物の提供をすることにした。県外を中心としたカフェ来店客の香川漆器の認知度はとても低かったのだが、今回のアンケート調査を実施することでPR効果があったと感じている。

【庵治石】

庵治石の加工場（高松市庵治町）に出向き、石材業者から庵治石の現状と課題について説明を受けた。庵治石についても他と同様に学生と活用方法について勉強会を行ったが、具体的な取り組みに結び付けるまでには至らなかった。



3. 得られた成果

学生には遠い存在であった高松市の伝統工芸品で

あったが、生産現場に出向き、生産者や加工者から直接話を聞くことで、現状と課題の理解にはつながった。何よりも、直接触れる機会が与えられたことは大きかった。経験の少ない学生が、これらの伝統工芸品を産業振興の視点からアイデアを絞り出すことはとても困難であった。庵治石が頓挫したのも気楽にアイデアが出せるものではない、荘厳な存在があったからに違いない。このような難しい課題ではあったが、高松盆栽と香川漆器については、具体的な取組に移行でき、学生なりにチャレンジすることができた。

【高松盆栽】

高松盆栽の成果は、Bonsai☆Girls Projectの実施である。このプロジェクトは、盆栽の魅力を広く発信するために、現在流行の「盆栽女子」を結成したのである。最初は遊び心もあってスタートしたが、主体的な活動へ発展する中で、女子学生も徐々に盆栽の魅力の虜となったのである。各種イベントでの「盆栽ワークショップ開催」ならびに「SNSを活用した情報発信」はたびたびメディアに取り上げられることとなり、多くの高松市民がこれらの活動を目にしたことだろう。



盆栽ワークショップを開催するたびに、学生は技術の向上を目指すようになった。学生の言葉を借りると、最初は「行かねばならない」盆栽教室が、「もっと学びたい」盆栽教室へと変容を遂げたという。知識や技術の向上が、余裕を持ったワークショップの運営になることを実感したのである。このような学生の変容は実はとても大きな成果ではなかったかと考える。

この学生の成長ぶりに目をつけた市内コミュニティセンターから、生涯学習講座への依頼を受けた。「イベント」から「地域に根ざした学びの場」へと、ひとつ階段を昇ったような思いであった。子どもから高齢者まで、多種多様な盆栽ワークショップの形ができてきた。

これら盆栽ワークショップは今年度23回開催し、延べ209名の参加者を得ることができた。活動の認知度も高まり、数字以上の成果があったと考えている。



つぎにSNSを活用した情報発信では、Bonsai☆Girls ProjectとしてFacebookを開設し、活動告知や活動報告はもちろん、高松盆栽の紹介を積極的に行った。ちなみにBonsai☆Girls ProjectのFacebookページには、約1280いいね！を得ることができた。

【香川漆器】

香川漆器の成果は、「消費者へのPR活動」と「消費者アンケート実施」をあげることができる。

消費者へのPR活動では、現代アートで有名な直島にある、香大生が運営するカフェ「和cafe ぐう」において、香川漆器を利用することにより、来店客へのPRを行った。この取組は、提供する料理や飲み物へも影響を与え、香川漆器に相応しいメニューや食事の盛りつけなどの工夫ももたらした。

つぎに消費者アンケート実施では、187名の来客からアンケートへの協力が得られた。（残念ながら外国人客や時間的ゆとりのない客からは断られたこともあった。）その結果から、香川漆器についての認知度は約25%と低く、漆器のイメージとして「高級感」や「日本の伝統文化」という敷居の高さを感じさせる回答が多かった。一方で、漆器を実際に使用してみると「軽い」（使い勝手がよい）や「おしゃれ」といったポジティブなイメージへと変化したことも明らかとなった。なお、詳細については、別途「調査報告書」を作成しているので、そちらを参照されたい。

4. 今後の課題

高松市産業振興プロジェクトでは、高松盆栽、香川漆器、庵治石をテーマに、産業としての現状把握や、普及に向けた具体的な取組を行った。しかしながら、十分な振興方策が練られたかということ、必ずしもそうではない。

高松盆栽では、盆栽ワークショップの開催やSNSを活用した情報発信は、学生の取組によって大きく評価できるものの、産地への理解や産地での取組については工夫が必要であった。次年度は、産地との関係構築について取組を充実させたい。

香川漆器では、PR活動やアンケート調査の実施にとどまり、つぎへのステップとなる具体的なプランを生み出すには至らなかった。価格的なものもあり、イメージアップには取り組めるが、その先にどうつないでいくのかは高いハードルである。

庵治石では、生産者へのヒアリングにとどまり、振興方策を考えたり、具体的な取組へと進展させたりすることができなかった。本プロジェクトの課題としては難しいと感じた。本プロジェクトの実現可能性に見合った課題設定にしていく必要を今回感じた。絞り込んだ取組とするよう再度計画したい。

「④香川県島活性化プロジェクト」(豊島)

科目担当教員 原 直行(経済学部・教授)
 連携自治体 香川県

1. 授業目的

本年度が、香川大学瀬戸内地域活性化プロジェクト豊島チームの活動初年度となる。近年、イノシシが四国地方の内陸から瀬戸内海沿岸・島嶼部へと生息域を拡大している。人や物、特に農作物への被害が県内で多く見られるようになり、土庄町豊島も例外ではない。平成26年度土庄町鳥獣被害防止計画によれば、「イノシシによる被害は、年間を通して発生しており、農作物への被害がますます増加傾向にある。被害の特徴は、野菜類、イモ類、水稻等の収穫時期や成長に合わせて広範囲にわたっている。被害地区は、年を追うごとに拡大してきており、町内全域で生息が確認されている」とあり、今後もイノシシの生息数が増加するとともに、被害も増加するという予測がなされている。

土庄町豊島甲生地区も例に漏れず、イノシシによる被害が多く見られるようになった。そのため、2015年3月に豊島出身で東京都よりUターンしてきたF氏を中心に「豊島甲生イノシシ協議会」が結成されることとなった。「獣害に強い集落づくり」をテーマとして取り組んだ。

2. 実施概要

- ①活動範囲の設定
- ②隠れ家となる草むら・荒地(もとは耕作放棄地)の整備・草刈り
- ③防護柵を設置、人と動物の住む場所の分けを実施していくことを確認した。活動の中心は、イノシシの隠れ家になる草むら(もとは耕作放棄地)の整備・草刈りである。

香川大学としては、学生がこの草むら・荒地の整備・草刈りを手伝うことが活動内容の主となった。こうして2015年5月、豊島でも被害の大きい甲生地区にて、同地区の住民と共同してイノシシ対策に向けた作業を始めることになった。

実施日	内容
6月21日(日)	草むら耕作放棄地の整備草刈り多くの学生が刈払機の使用は初めてであり、地域住民から取扱いについて指導を受けた。
6月28日(日)	
7月12日(日)	
7月13日(月)	
9月30日(水)	草むら耕作放棄地の整備草刈りヨシやガマ類を刈れるようになるなど学生の刈払機使用技術向上がみられる。
10月18日(日)	草むら耕作放棄地の整備草刈り



活動範囲の設定の様子



イノシシに掘り返されたジャガイモ畑



耕作放棄地の整備・草刈りの様子



指導を受ける学生たち



刈払機の取扱いを教えていただいた



3. 得られた成果

(1) 甲生地区において地域の結束がみられた

「獣害対策」という共通の問題を抱えており、平成25年8月の四国財務局の報告「地域住民の団結により鳥獣被害を軽減」中の「さぬき市豊田地区の獣害対策成功事例」を見ても、獣害対策という共通の問題があるからこそ結束できた、ということが明らかとなっている。甲生地区も例外でなく、草刈作業に参加・協力してくださる方もいれば、作業日に昼食を用意してくださる女性部の方々もいた。このように、獣害対策に向けて、地域住民の結束がみられたためである。「獣害に強い集落づくり」は前進した。

(2) コミュニティ内で多くのコミュニケーションが生まれた

草刈り作業の間、「ここは終わったから、次はこっちだな!」、「いったん休憩しようよ」などと、作業に関する意思の疎通が活発になされていた。また、甲生地区婦人部の昼食の準備中でも活発にコ

ミュニケーションが交わされていた。そこに学生が加わることで、「こういうことがやってみたい」といったように、希望を語る地域住民も出てきたためである。

(3) コミュニケーションを通して学生たちが対話力を身に着けた

当初は堅さがみられた1年生メンバー達であったが、作業を重ねるうち、少しずつだが地域住民らと会話がスムーズにできるようになっていった。数えてみたところ、大学に入学したばかりの6月の作業の頃と比べると、10月には2倍近くの数の会話が生まれていた。作業中でもわからないことがあれば質問を盛んにするようになり、言葉遣いからコミュニケーションの基本を学んでいると感じられたためである。

(4) 活動を通して学生が考える力を身に着けた

本プロジェクトでは参加する1年生に事前学習として勉強会への出席、瀬戸内海地域の自然保護に関する講演会への出席を義務付けた。そこで産廃事件など豊島の歴史、また近年の問題に関することを学んだ。事前に勉強し、そこから実践に踏み切るというプロセスを通して、時系列でものを考えるきっかけが生まれた。

また本プロジェクトに参加した1年生に課したレポートによれば、「今後はイノシシ対策を行っていくのは困難になるかもしれない」、「今後は新たに観光産業を興してみてもどうか」などと、各々がこれからの展望について考えることができていた。現実的かどうかはともかく、これからどうすればよいか、ということを経験的ではなく時系列に沿って考えることが出来るまでに成長した。

4. 今後の課題

本取り組みは平成27年11月をもって活動を休止することになった。甲生地区住民側から今後活動を休止したいという申し入れがあったためである。理由は、①中山間地域直接支払制度による助成金で地区内を張り巡らす鉄柵を購入しようと考えていたが、当初の目論見よりも助成額が少なく、鉄柵が購入できないこと、②他の市町と比べて土庄町の獣害対策は充実していないこと、③高齢化が進み、鉄柵購入の目途が立たない中での草刈作業は肉体的にも精神的にもきついこと、というものである。

香川大学としては、取り組み初年度で「獣害に強い集落づくり」が前進したことが確認できていたし、学生の対話力、考える力も身につけてきたところであったため、非常に残念であるが、住民の申し入れを受け入れざるをえなかった。

「⑤香川県島活性化プロジェクト（男木島）」

科目担当教員 村山 卓（地域マネジメント研究科・教授）

連携自治体 香川県

1. 授業目的

男木島は、高松港から北沖約7.5km、女木島から北に約1kmに位置する、面積は1.1km²、人口約180人の島である。映画の撮影舞台となり、日本の灯台50選にも選定されている男木島灯台のほか、島ネコを見に来る観光客が増加している。瀬戸内国際芸術祭を期に移住者が増えてきており、平成26年4月には休校となっていた高松市立男木小中学校が再開するなど、活気を帯びている島である。そのような島の状況を踏まえ、学生らが地域課題を認識し、その解決につながるような対応策を企画・実践することにより、地域に貢献する活動を行うとともに学生の課題解決能力の向上を図る。

2. 実施概要

① 県職員による座学（5/8（金））

男木島でのフィールドワークを開始する前に、離島振興を担当する県職員に座学の講義を行っていただいた。離島の現状と、離島振興政策について、座学により事前に学ぶことにより、これ以降の活動の意義について再確認することができたものと思われる。

② 第1回フィールドワーク（島内散策、5/17（日））

座学を踏まえたミーティングを行った後で、初回フィールドワークを開催した。男木島では、男木地区コミュニティ協議会の木場健一会長から、会長が島で課題と感じている内容を中心に男木島の概要について説明いただいた。また、ONBA FACTORYの大島よしふみ代表から、男木島の芸術作品や瀬戸内国際芸術祭と移住者との関係などについてご説明いただいた。その後、2つのグループに分かれ、島内の課題発見に向けて、男木島灯台、豊玉姫神社等の島内の観光施設を散策した。



初回フィールドワーク

③ 第2～4回フィールドワーク（地域貢献活動と課題の抽出、6/7（日）、7/5（日）、7/19（日））

5月以降、週1回のペースで男木島での地域課題をまとめるためのミーティングを行ったが、男木島の現状を十分に理解できていないことが認識され、再度、聞き取り調査が必要であることが分かった。ミーティングにおいて「島の方々」「移住者の方々」「観光客」の3種類のインタビュー

シートを作成した上で、インタビュー調査を行った。

インタビュー調査を行う傍ら、島の課題を体感するため、男木島で行われた海岸一斉清掃作業や当時建設中であった男木島図書館の開設に向けた補助作業などの地域貢献活動も併せて行った。



海岸清掃(左)とインタビュー(右)

④ 第5～6回フィールドワーク（課題の抽出と対応策の検討、10/1（木・大学記念日）、11/3（祝））

これまでのフィールドワークにおける学生自身の経験と、7月に行ったインタビュー結果から、①島内の観光スポットが分かりにくい、②インターネットの情報が不足している、③観光客増により外貨獲得の機会があるのに実際の島内での消費が少ない、の3つの課題を設定し、これらに対する対応策として、①民家への立ち入りの警告や灯台までの道案内などの「案内サインの作成」、②動画作成や現在のページの多言語化など男木地区協議会が管理する「ホームページの改訂」、③現在あるお土産の魅力を観光客に伝える「おみやげBOOKの作成」の3つの対応策を考え、これらの企画を11月3日に説明し、活動内容についての了解をいただいた。

⑤ 案内サインの作成（看板班6名、11/21（土）、12/13（日）、1/11（祝）、2/21（日））

⑥ ホームページの改訂（ホームページ班7名、11/29（日）、12/5（土）、1/11（祝））

⑦ おみやげBOOKの作成（お土産班6名、11/28（土）、2/21（日））

⑤～⑦の実施概要については、3. に詳述。

⑧ 活動報告会の実施（2/21（日））

島内での1年間の活動について、島民の方々向けに報告を行った。島内には様々な課題があるが、島民の目線では気づかない課題に対する実践活動であったことを評価していただいた。

3. 得られた成果

① 家への立ち入りを警告する瓦製の案内サイン（30枚）

男木島は道が狭く迷路ようになっており迷いやすいが、一方で、これが島民に道を教えてもらうきっかけになるなど、島の魅力ともなっている。しかし、このために誤って民家に立ち入ってしまう観光客も多く、プライベート空間への侵入

は島民のストレスにつながりかねない。このため、民家への立ち入りを警告する案内サインとして作成することとした。材料は、男木島で古民家の再利用などを行う際に廃棄されるため大量に存在する「瓦」を用いた。海外からの観光客も増えてきていることから、案内サインは英語を併記するほか、視覚的に分かりやすいデザインとした。予め学内でクリアファイルを削ってステンシル風の型紙を作成し、現地にてアクリル絵の具で印影する形で30枚作成した。作成した看板は、2/21の活動報告会終了後に、希望する島の方々に配布した。



作業風景（左）と完成した案内サイン（右）

② 男木島灯台までの道のりを案内する立て看板（4本）

観光客に対して行ったインタビューの中で、「灯台までの道のりが遠く、途中で案内もなかったことから不安になり、行くのを諦めてしまった」という回答があり、この対策として、灯台までの距離を示す案内板を作成することとした。材料は、廃材の使う舟板を用い、防腐加工を施した上で作成した。



作業風景（左）と灯台への案内板（右）

③ 男木地区コミュニティ協議会公式ホームページ（英語版）データ

男木島は、瀬戸内国際芸術祭や「ネコ島」としての知名度から観光客が増えており、特に海外からの観光客も非常に増えている。一方で、男木地区コミュニティ協議会が運営するホームページは、内容が非常に充実しているが日本語のページしかない状況である。こうしたことから、「ogijima.info」のページの多言語化を行うニーズがあるものと考え、まずは英語から翻訳作業を行った。ホームページのページごとに担当を決めて翻訳を行った上で、香川大学で英語を教える非常勤講師に確認し、さらにネイティブチェックも行ったものを作成した。このデータは、当該ホームページを管理する男木地区コミュニティ協議会に提供した。

④ 男木島紹介動画（日本語・英語）

ネコを目当てに男木島に来る観光客にそれ以外の島のスポットを紹介するため、また、男木島への来島を検討する観光客の方々に島のイメージを持っていただくため、動画を撮影、編集することとした。11月から撮影を開始したことから「秋冬バージョン」とならざるを得なかったが、夕日や水仙郷など、この時期ならではの風景を撮影す

ることができた。このデータも、男木地区コミュニティ協議会に提供した。



編集作業風景（左）と作成した動画（右）

⑤ 男木島のお土産を紹介する「おみやげBOOK」（10冊）

男木島は、灯台や水仙郷、芸術作品、島ネコなど観光資源が豊富だが、7月に行ったインタビューのうち観光客への調査により、観光客の男木島での消費額が非常に少ないことが分かった。男木島で生活する島民にとっては、観光客向けのお土産の販売、飲食の提供は外貨獲得のチャンスであり、島暮らしのための財源になるものである。このため、観光客の島内での消費を促すため、島内のカフェや休憩所などでゆっくり見ることができるよう、お土産を紹介する冊子を作成した。お土産が増えた際に差し替えができるようアルバムを用い、取材した内容を手書きで伝える内容とした。



作業風景（左）とおみやげBOOK（右）

4. 今後の課題

男木島で本当に求められる地域課題への対応としては、イノシシ対策や増え続けるネコの総数管理であると思われるが、本プロジェクトでは、学生の地域愛着を醸成する目的から、学生自身による課題発見、対応策の検討を重視し、時間を費やすこととした。一方で地域にとっては、地域活性化のキーパーソンともいわれる「よそ者」であり、「若者」でもある大学生の視点で、地域では考えてこなかった課題と、これに対する対応を実践することができた。

また、今年度は昨年度から引き続き参加している2年生がリーダーシップを発揮して行動したことや、参加者が18名と多かったことなどから、結果として幅広い活動を行うことができた。

活動終了後、男木島は瀬戸内国際芸術祭2016の会場となっているが、島内では「ここから民家」の瓦が評価されている、と聞いている。実際に、島内随所でこの案内サインを見かけることができ、一つの地域貢献ができたものと考えている。

今後の課題としては、実践の時期が挙げられる。課題発見や対応策の検討に時間を費やしたことから、対応策の実践時期が11月から年度終盤までかかってしまった。次年度は、夏休みを有効に活用し、なるべく早めに実践を終え、十分に活動の振り返りを行うことで学生自身の達成感や地域愛着の醸成につなげていきたいと考えている。

「⑥香川県島活性化プロジェクト（アイランドホッピング）」

科目担当教員 山田 香織（地域連携戦略室・特命講師）
 連携自治体 香川県

1. 授業目的

瀬戸内地域活性化プロジェクトは、自治体と連携し、フィールドワークを取り入れたプロジェクト型の授業を実施することで、以下に挙げる事項の達成を目指す授業である。

- ① 地域の課題解決に参画し、実際に地域に貢献できる。
- ② 地域の課題解決に参画することにより、課題探求・解決力が身につく。
- ③ 地域の課題解決に参画することにより、能動的な学修をもたらす主体的な学びができる。

このうち、香川県との連携事業のひとつで、島活性化プロジェクトのひとつとして実施した本プロジェクトは、香川県からの委託内容である「離島等における地域活動」（人口減少や高齢化の進展など、離島等が抱える課題について理解を深める一方で、地域行事に企画参加するなど、地域住民との交流を図りながら各島（地域）の持つ魅力を収集し、地域の要望を考慮しながら地域資源を活かした課題解決に取り組む）に則って展開した。具体的には、香川県下の離島を結ぶ航路開設の可能性をフィールドワークを通じて検討することとした。

2. 実施概要

ガイダンス、グループ分け終了後の4月末より1月末まで、以下のとおり授業をおこなった。



【前期：4月下旬～7月下旬】

受講生全員が新入学生であったので、基礎知識の獲得に時間を割いた。四国運輸局、香川県地域活力推進課、香川県港湾課担当者にお越しいただき、航路、離島振興施策、港湾整備について講義をしていただいたほか、グループで香川県内の航路（不定期航路・海上タクシー含む）についてリサーチし、全体での情報共有をおこなった。その後これらの学修をもとに話し合いを重ね、後期は、フィールドワークを基に瀬戸大橋以西の県内離島と該当地域の航路について考えていくこととなった。また、学修を重ねるなかで定期航路新設は容易ではないことを理解した。そこで、定期航路のない離島どうしを結ぶ不定期航路にかんする検証、不定期航路を提案する際の根拠となりうる離島の魅力（地域資源）の発掘をおこなうこととした。

【後期：10月上旬～1月末】

後期は、フィールドワーク（離島訪問と不定期航路の確認）と事前事後のミーティングを重ねた。フィールドワークは11月、12月に隔週で実施することとし、フィールドワークの計画は原則、学生に検討してもらった。

悪天候でチャーター船での移動が厳しいと判断した1回を除き、西讃地区を中心に計6回のフィールドワーク計8か所の県内離島を訪問した。また、航路開設の可能性の検討をプロジェクトの目的に掲げていたことから、定期航路の利用以外に海上タクシーの利用も試みた。

隔週実施したミーティングでは、10月はフィールドワークの計画の共有に力点をおき、11月以降はフィールドワークのふりかえりに重点を置いた。

学期末に実施したまとめの報告会では、各学生から以下の点が指摘された。

（不定期航路の設定について）

- ・新設航路開設の難しさ
- ・1日でまわることのできる島の数の限界

（地域資源と考えた事項）

- ・瀬戸大橋を下から望む景色
- ・景色

- ・その島の特産品を用いた料理
(提案・課題)
- ・島の特産品を食べられるような場所
- ・航路開設ではなく、人が離島を訪れるイベント等の企画・実施
- ・島民の方の考えを聞くことの重要性
- ・観光案内の充実（スマホの利用、アプリ作成、名所旧跡ではなく景観の観点で）



3. 得られた成果

本プロジェクトにおいては、入学間もない学生に、①大学の所在する地域である香川県、とりわけ、その特徴のひとつともいうことのできる離島に関して理解を深めてもらうこと、②調査分析力ならびに③コミュニケーション力を涵養することを目指してきた。4月下旬から1月末までの正味7か月にわたり、学生と対話をしながら上述プログラムを展開するなかで、これら3点を達成することができた点は成果といえる。

今回は実現に至らなかったが、学生たちが、離島の資源として景観（地元の人が見どころとして挙げる名所旧跡・寺社ではなく）や食（たった1尾のイ



リコのでんぷらであっても）を挙げたことや、専門的な学びと結びつけた地域活性化に関する提案（アプリ開発等）は興味深いものであった。

4. 今後の課題

学生たちの気づきでもあったが、新規航路の開設は決して容易ではない。学修を重ねるなかでこのことに気付けたことはひとつの学びの成果であるわけだが、継続的な学修を展開していくには問題や対象地の設定に工夫が必要である。特定の島に焦点を絞り、対象地域について理解を深めたうえで、定期航路の課題や航路の存在しない離島間の航路の必要性について検討するのが現実的であるだろう。次年度は、特定の島を対象を絞り、プロジェクトを展開していく予定である。

「⑦丸亀市観光振興プロジェクト」

科目担当教員 西成 典久 (経済学部・准教授)
 連携自治体 丸亀市

1. 授業目的

瀬戸内国際芸術祭2016を1つの目標とし、丸亀だからこぞできる丸亀らしい取り組みを学生とともに考え、「うちわ作り体験」+「カフェ」というアイデアが出てきた。全国シェア9割を誇り、国の伝統工芸にも指定される「丸亀うちわ」、この「うちわ」と「大学生」の連携で丸亀にしかない丸亀独自の魅力づくりに取り組む。具体的な目標は以下の通りである。

- ・30分程度の体験で、お土産で持って帰れる「うちわ作り」プログラムの開発
- ・「うちわ作り」とともに期間限定の「カフェ」併設を検討
- ・「うちわ作り」のプログラム開発は伝統工芸士の方にご協力いただくことを検討
- ・観光客が丸亀城まで行くと「うちわ作り」の割引券をもらえるような工夫
- ・瀬戸芸では島だけでなく、丸亀城をふくめた「まちなか」を周遊してもらう

2. 実施概要

今年度は、現地調査ということで、丸亀市政策課からお話しをお伺いし、まちなかで活動する方々へのインタビュー調査を通じて、丸亀を取り巻く現状を把握した。そのうえで、丸亀の魅力を発信するための冊子づくりをグループワークで実施した。

その後、丸亀うちわミュージアムと連携し、実際に学生がうちわを作成する講習会を受け、うちわづくりの基礎を学んだ。

そのうえで、丸亀うちわ工房の「夢風」さんに講師役を依頼し、うちわの活用方法を学生目線で考案し、実際に試作品をつくるまで実施した。こ

「丸亀うちわでまちの魅力向上プロジェクト」
(仮称)

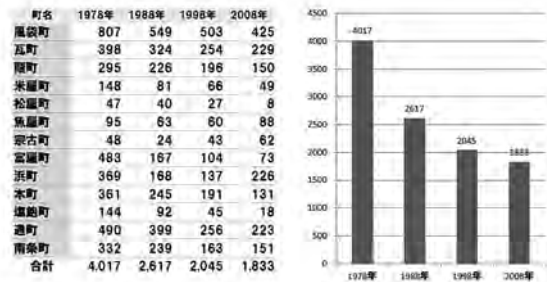
伝統工芸品 丸亀うちわ
 ×
 学生
 ×
 まちなかの交流拠点づくり



瀬戸内国際芸術祭2016を1つの目標とし、丸亀だからこぞできる丸亀らしい取り組みを学生とともに考案していく。全国シェア9割を誇り、国の伝統工芸にも指定される「丸亀うちわ」、この「うちわ」と「大学生」の連携で丸亀にしかない丸亀独自の魅力づくりに貢献したいと考えている。

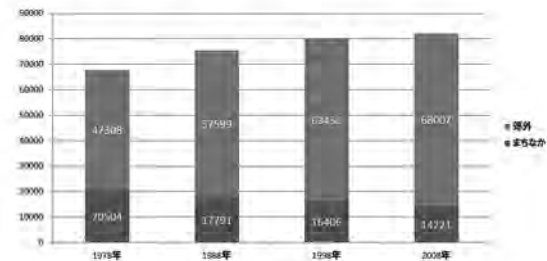


● 丸亀市「まちなか」の現状



丸亀駅から丸亀城までの旧幡下町エリアにおける人口推移

● 丸亀市の「まちなか」と「郊外」の現状



「まちなか」人口と「郊外」人口の推移

こうした一連の活動を受けて、11月に開催された商店街での空き店舗マルシェに竹づくり工房「夢香」として出店し、商店街に遊びに来た子供たちやそのご家族に竹材を活かした体験型のリースづくりを楽しんでいただいた。

今年はいつもと少し変わったクリスマス飾りを作りませんか？
ツリーに飾るもよし！
部屋に飾るもよし！
ぜひ私たち「夢香」と一緒に作りましょう！

学生が作ったうちわも展示します！
1つ200円です
夢風のうちわワークショップもあるよ！

11/22-23

竹の輪で
クリスマス飾り
を作ろう！

丸亀駅前商店街
「シャッターをかける会」主催 空き店舗マルシェ 2015

丸亀 夢香

丸亀市 丸亀大学 丸亀観光振興プロジェクト



3. 得られた成果

- 丸亀うちわミュージアムと香川大学の授業としての連携はこれまでに例がなく、学生の新鮮な捉え方などを通じて、うちわの伝統工芸士の方々にも前向きな気持ちになっていただいた。
- 竹づくり工房「夢風」と連携し、伝統工芸品である丸亀うちわの活用方法について学生目線で考案し、試作品を作成した。
- 11月に開催された商店街での空き店舗マルシェに竹づくり工房「夢香」として出店し、商店街に遊びに来た子供たちやそのご家族に竹材を活かした体験型のリースづくりを楽しんでいただいた。

4. 今後の課題

- 学生達に情報発信のための冊子を作成してもらったが、その活用方法についても検討していく必要がある。
- 現場で求められていることをもう少し把握しながら進める必要がある。

5. 学生のコメント

- 自分からは関わることのなかった分野に触れることができ、本当に良かった。観光リーフレット作成、うちわづくり、ワークショップの運営など、これから何かをしたいと思ったときに実現させる力を身につけることができたと思う。
- この経験を通じて、私自身不慣れなことや役に立てることに気づくことができた時間となりました。ワークショップやマルシェなど、商店街を含めて周りの方々の協力や助け合いがないとうまくいかないのだなと実感した。

「⑧丸亀市定住促進プロジェクト」

科目担当教員 鈴木 健大 (地域連携戦略室・特命准教授)
 連携自治体 丸亀市

1. 授業目的

丸亀通町商店街は、JR丸亀駅南口と丸亀城との間に位置する直線状約300mの商店街である。丸亀駅南口には通町商店街を含めて6商店街（5振興組合）が集まる。付近一帯は、金比羅参りの海の玄関口に位置し、江戸時代には「全てのものが揃う」ほどの盛況ぶりであったという（「丸亀繁盛記」津坂木長）。しかしながら、都市の郊外化が進み、駅前の再開発が進捗しなかったこと等から、通町商店街においても店舗のシャッター化が進み、平成25年度は、78店舗中、空き店舗は33店であった。平成26年3月、商店街の活性化・空き店舗解消を目的に、商店街振興組合・地域内外の有志で「シャッターをあける会」が立ち上がった。

商店街振興組合とプロジェクトの相談を重ね、商店街に多くの人が集まる持続的なまちづくりを目指し、プロジェクトのテーマを「これからの商店街」と設定し、「空き店舗」や「空き地」を活用した地域コミュニティの形成を目指すこととした。

2. 実施概要

(1) プロジェクトの進め方

- ・一年間を「現状理解（調査）及び課題の整理」「課題解決に向けた活動計画」「実践」「振り返り」のPDCAサイクルの流れで行い、「振り返り」を次年度のプロジェクトに生かしていく。
- ・「計画」段階では、主観的な感覚・気づきを感じ、チーム協働でアイデアを生み、プロトタイプをつくって体で考える「デザイン思考」の要素を組み入れる。
- ・「実践」段階では、「モノ」ではなく、「人と人のつながり」でまちを元気にしていく「コミュニティデザイン」を基本に組み立てていく。

(2) 参加学生

9人（経済学部及び法学部1年生）

(3) 実施内容

①ヒアリング調査

「店舗ヒアリング」は、6月中旬から7月下旬にかけて、3班に分かれて10店舗を訪ね、店の歴史、商品（メニュー）構成、顧客の特徴、商店街の良さや課題等についてヒアリングを行った。

②通行者調査

「通行者調査」は、通町商店街を通行する人数のボリュームや年齢層について概況を把握するために行った。商店街南北の2地点において、学生の授業の空き時間や放課後を活用し、平日7:35-20:10までの6コマ（各45分）で、通行者数及びそのおおよその年齢層について測定を行った。

③商店街の「魅力と課題」の整理

フィールドワークを通じて商店街の「魅力と課題」を整理し、「これからの商店街」といったテ-

マもふまえて、商店街を地域のコミュニティ形成の場として試みる計画の全体方針を設定した。大学生が自分たちで実行できるアイデアを練り、商店街と意見交換を行って実施内容を決定した。

④地域連携による商店街内空き地の美化・地域管理「まるまるガーデン」の試み

「まるまるガーデン」のフィールドとなった商店街内の空き地は、広さ約80㎡、1980年代後半に現在の所有者に代わり、それから30年近く土地利用がない、いわゆる「塩漬け」の土地である。不法投棄も多く、雑草・雑木が生い茂り、商店街に面した鉄塀には落書きがされている状態であった。

7月、商店街及び「シャッターをあける会」有志により、空き地の雑草・雑木除去、ゴミの除去、整地を行った。空き地の土は小石混じりで痩せていることから、プランター（30個）にほうれん草、春菊、人参、ハーブ類を育てることとした。9月末、商店街内デイケアサービスに通う高齢者、職員、商店街の方々と共に雑草取りと種まきを行った。水遣りは12月初旬まで商店街と学生とで行った。



商店街内空き地の雑草取り（左）とプランター栽培の様子（右）

⑤商店街における若い世代のコミュニティ形成「かめ子屋」の試み

商店街で若い世代を見かけるのは、朝夕の高校生たちの通行くらいであること、若い世代に商店街や地域に愛着を持ってもらおうと、大学生と地域の子どもたちとが商店街で交流できる場づくりを試みた。会場は紳士服店2階であり、平日はランチ営業をしている。折り紙や画用紙でスペースの飾りつけを行い、11月から休日に試みを開始した。宿題教室3回のほか、商店街イベントに合わせてゆるキャラのお絵描き1回、講師の方を招いてのクリスマスリースづくり教室1回の計5回を試みた。



宿題教室（左）とクリスマスリースづくり教室の様子（右）

⑥都会の商店街との連携による大学生の視点を通じた商店街活性化に向けた交流プログラムの試み
 モトスミ・オズ通り商店街（神奈川県川崎中原区）と通町商店街が連携し、両商店街のまちづくりに関わる大学生を通じて若い世代の視点を取り込みなが

ら、商店街活性化について共に学ぶ試みを行った。
平成27年10月2日(土)・3日(日)は、香川大学生3人がモトスミ・オズ通り商店街を訪ねた。一日目は、慶應義塾大学日吉キャンパス校舎において「地方もの知り学教室」として、香川県や丸亀市、香川大学について、また、丸亀通町商店街での取組について地元の子どもたちを対象に紹介し、丸亀うちわの絵付け体験を行った。また、オズ通り商店街でヒアリングを行った。二日目は、「オズフェスタ」において、うどん、骨付き鳥、丸亀うちわを販売して、香川県・丸亀市のPRを行った。

平成27年11月28日(土)・29日(日)は、慶應義塾大学生4人(学部2年生)が丸亀通町商店街を訪ねた。一日目は、丸亀市内フィールドワークを行い、丸亀通町商店街振興組合・香川大学生と活性化について考え意見交換会を行った。二日目は、「かめ子屋」に参加した。



オズ商店街でのヒアリング(左)と通町商店街での意見交換(右)

⑦商店街「バルフェスティバル」運営補助参加

平成27年8月22日(土)及び11月23日(月・祝)、「シャッターをあける会」が中心となり、丸亀市の姉妹都市スペインのサンセバスティアン市にちなんで「バルフェスティバル」を開催した。第1回目では、主に設営、片づけ、販売面における運営補助として参加した。第2回目では、商店街内のお茶店の茶葉で淹れたお茶や市内NPO法人SAJA「たんぼぼ」(就労継続支援B型事業所)でつくられているクッキー販売の補助を行った。

3. 得られた成果

①ヒアリング調査

学生たちは、商店街にこだわりがある店が多いことや歴史のある店があることが分かり、顧客の高齢化・後継者不足・閉店時間が早い等、店舗共通の課題があることも分かった。

②通行者調査

最も通行者数のピークが現れたのは、朝7:35-8:20のコマであり、高校生と通勤者が占めていた。しかし、それ以外の時間帯では、通行者数は45分間あたり一方向おおむね「サラリーマン以外の大人」「高齢者」を中心として50~100人程度であった。

③商店街の「魅力と課題」の整理

学生たちが商店街を訪ねる中で、彼らを感じとった商店街の「魅力」と「課題」について整理した。「魅力」については、「人が親切」「アーケードがある」「イベントが豊富」「のどかでのんびりほっとする」といった点が挙げられた。さらに、大学生自身が普段商店街を利用しない理由についても整理を行った。「(大学生が)必要とするものが販売されていない」「値段が高いイメージ」「近隣に低価格で品数が多い店舗がある」「店に入ると商品を買わなければならないように感じる」等が挙げられた。

④地域連携による商店街内空き地の美化・地域管理「まるまるガーデン」の試み

30年放置され、ゴミの不法投棄が続いていた荒れ

地が整備された。近隣の店主からは、「毎日ガーデンを見るのが楽しみ」といった感想が寄せられた。ベンチが置かれ、休憩所にもなった。しかし、ほうれん草や人参、春菊は生育が見られたが、ハーブ類はなかなか育たなかった。世話や土地の陽当たりが十分でなかったことが原因として考えられる。

⑤商店街における若い世代のコミュニティ形成「かめ子屋」の試み

初回は子どもの参加が1人しかなかったため、周知方法等改め、5回目では26人の子どもたちが参加し、大学生を含めると会場に入りきれないほどとなった。

「かめ子屋」に来場した保護者に対してアンケート調査を行ったところ、継続の参加については、全員が希望した。感想として、「子どもが楽しみにしているの、また通わせたい」「いろいろな人に出会ってほしいと思い、連れてきました。とても良かったですと思いました」「初めて参加させていたのですが、とてもいい取組だと思います。ぜひ長く続けてほしいです。この活動が地域の活性化のきっかけになると思います」といった声が寄せられた。

⑥都会の商店街との連携による大学生の視点を通じた商店街活性化に向けた交流プログラムの試み

成果の一つ目としては、参加学生が実際に肌感覚で環境が異なる商店街を体感し、先方の状況や取組を学ぶことができたこと、二つ目としては、大学生自身がフィールドとしている商店街と比較できたことで、その商店街のことがより一層明確に把握でき、考察しやすくなったことである。このことは学生だけでなく、商店街にとっても同様であろう。商店街は彼らの視点を通じて先方の商店街だけでなく、改めて自身の商店街を見つめ直す機会にもつながった。

全体として、今年度の成果の一点目は、一年といた長期間にわたって、まちなかに学生が通い続けたことである。大学生たちは通うことでまちの大人たちと話し、まちのことを知り、さらには自身が商店街の顧客になることにもつながっていった。二点目は、小さいながらもまちなかのコミュニティ形成について、「例」を示すことができたことである。三点目は、大学生にとっても商店街にとってもプロジェクトを通じた学びの機会を創ることができたことである。

4. 今後の課題

一年間の授業を終えて、平成28年1月末に学生、商店街、丸亀市とで年間活動報告・意見交換を行った。商店街からは「商店街に刺激を与えてもらった」「この出会いに感謝したい。学生たちの取組を商店街ももっと広報する必要がある」「どんな形でもいいので関わり続けてもらいたい。若い世代がまちに居るだけでいい。プレーヤーが増えることにつながる」「続けてもらって、試行錯誤しながら商店街の役割を見つけていけたら」といった感想や期待が寄せられた。また、丸亀市からは「学生が来てくれるのがうれしい。中心市街地は公共施設の老朽化、コミュニティの担い手の高齢化などの課題がある。地方の空洞化が進む中で何が「豊か」か、社会の価値観を皆で変えていくことが重要ではないか」といった感想や意見が寄せられた。

継続的に学生が履修して、「かめ子屋」をはじめとして、まちなかに人々が集まる試みを次年度以降も多くの個店と連携しながら継続することが求められる。

「⑨三豊市観光振興プロジェクト」

科目担当教員 原 直行 (経済学部・教授)
 連携自治体 三豊市

1. 授業目的

本年度のCOC事業では、地域資源を活用した地域活性化策について実践活動を行った。三豊市は海側ではシーカヤックや、荘内半島でサイクリングコースが作られているが、山側ではそのような活動がない。そのため、本事業では、山側でエコツアーを開発することで地域活性化することを目的とし、学生6人でプロジェクトチームを結成して活動した。

エコツアーとは「地域の特色ある自然・文化・暮らしへの理解を深め、地域の環境保全や産業振興につながる旅行や交流活動」(NPO法人日本エコツーリズムセンターより)のことである。エコツアーの実施により、自然資源の保全に対する旅行者の関心の増加や、資源がある地域とツアー参加者の交流による社会的・経済的利益の増加が期待される。経済的な利益が地域にもたらされると、それが資源の管理費にも充てることができ、資源の保全とツアー実施の好循環が生まれる。

エコツアーの実施場所を三豊市の山側エリアである財田町に決め、何回も現地の下見を重ねて企画を練り直し、最終的に「歩いてみかん農園に行き、みかん狩りを自分たちで行い、そのみかんで『みかんジャム』を作る」というツアーを企画した。このツアーで地域の人と参加者の交流、地域産業の継続と発展をねらいとして実施した。

2. 実施概要

(1) 「三豊の『おいしい』とふれあおう！」ツアーの実施

学生らが地域の方々の意見を聞きながら、実際に財田町のまちあるきをし、地域資源を発掘し、地元の方に地域の新たな魅力について気づいていただくようなツアーづくりを行う。みかんの収穫体験を行い、収穫後、道の駅たからだの里内の「ふるさと伝承館」に歩いて戻り、調理場でみかんジャムづくりを開始した。参加者を3グループに分け調理作業に

入った。

(2) さいたまマップの作成

ツアーの実施にむけた準備と同時進行で、マップの作成も行った。たからだの里スタッフとの話し合いで施設の情報発信が不十分であるということがわかり、各施設の利用案内を示せるからと、ツアー実施後も財田町に形として残り、それが利用されることで活動の継続性も示せるからである。

3. 得られた成果

(1) 「三豊の『おいしい』とふれあおう！」ツアーの実施

① 財田町の人々の活力になった

自分たちの地域のために活動してくれているのは有難いと、多くの地域の人が積極的に協力してくれた。ツアー当日も、集合場所や調理中に地域の人が参加者とスタッフの様子を見に来てくれた。また、若い人が自分たちの地域のために活動してくれるのが嬉しい、今後も一緒に活動がしたいと申し出てきてくれた人もいた。この活動以外にも地域活性化のために三豊市で活動している大学生がいて、彼らにとって今後新しく財田町で活動がしやすい環境になった。そのため財田町で今後も新しい活動ができる。



みかん農園での収穫体験の様子



完成したみかんジャム

② 新しい人とのつながりができた

今回のツアーの存在を、財田町の住民が口コミやFacebookで広めてくれた。そこで今まで繋がりのなかった三豊市や財田町の住民同士が知り合うことにより、財田町の住民と参加者・スタッフとのつながりもできた。これはその場限りの交流ではなく、Facebookでの交流が始まったため、今後も続いていく可能性がある。

③ みかん農家の収入になった

また、みかん農家にとっては今回のツアーで1人300円のみかん代の収益があった。スタッフも一緒にみかん狩りをしたため、参加者とスタッフを含め18人分の5400円の収益となった。出荷だけではなく、このような体験での収益もあげられるということを示せた。みかん農家の佐古さんによれば、みかん農家の経営は「儲けが少ない」とのことなので、少しでも農家の収入になれば良い。

(2) さいたマップの作成

マップはA4両面カラー印刷で、表面は財田町の地図とバスの時刻表を、裏面にはたからだの里とア



さいたマップ

ンファームの利用案内、その周辺にある「鮎返りの滝」や塔重山公園の紹介、財田町の偉人である大久保謙之丞の紹介を書いた。

また、三豊市は市営バスがあり、JR讃岐財田駅からたからだの里間もバスが通っている。バスの発車時刻は物産館から少し歩いた先にあるバス停にしか表示されていないため、たからだの里の施設内でもバスの時刻表があれば便利だと思った。

マップ利用者として、たからだの里の利用者、アンファームに来た客を想定した。散歩して緑多い財田町の豊かな自然も感じてほしかったため、物産館から歩いて「鮎返りの滝」と塔重山公園に何分かかるかも示した。これは実際に歩いて時間を計った。マップはたからだの里とアンファームに置き、客が自由に持って帰れるようにした。

4. 今後の課題

三豊市で行ったみかん狩りのツアーでは、参加者と財田町の住民とのつながりができたことが最大の成果であった。その場限りのものではなく、SNSを通じた交流から、また実際の交流につながっていくことが望まれる。また、財田町の住民同士がツアー実施に向けた準備を通して「大学生の活動を応援しよう」と多大な協力をしてくれた。そのため、お互いに情報交換し、今までつながりのなかった人同士がツアー企画を通して知り合うなど、地域の人同士のつながりもできた。このネットワークは今後の地域の活性化策に取り組むために活かされていくだろう。

さらに、財田町で散策している最中に話しかけてきた地域の住民、ツアー企画で相談に乗ってくれた人々の話から、財田町に住む多くの人が財田町を好きなことが伝わってきた。同時に、高齢化が進む地域の将来を懸念し、地域の住民が自ら新たに何か活動しようとする意気込みも感じられた。その新たな活動のためには、若い人の視点もほしいと言われた。そのため、このような大学生との交流をもっと増やしていければ良いだろう。

「⑩三豊市地域活性化プロジェクト」

科目担当教員 古川 尚幸 (経済学部・教授)

連携自治体 三豊市

1. 授業目的

三豊市は平成の大合併（平成18年1月）において、旧7町（三野町、詫間町、高瀬町、豊中町、仁尾町、山本町、財田町）が合併して誕生した新しい地方自治体である。この三豊市の地域活性化を、地域住民やまちづくり推進隊、三豊市役所と連携して取り組む。そのフィールドとしては、粟島と道の駅たからだの里を中心としつつも、調査対象は旧7町全てとする。地域活性化といっても、まずは学生たち自らが三豊市を知り、三豊市民とふれ合い、自然や産業を感じることから始めなければならない。学生教育の観点からすれば、この事業に参画した学生が、これらの活動を通じて地域活性化に貢献できる人材となるようなプログラムを企画した。



2. 実施概要

三豊市の地域活性化に取り組むにあたり、三豊市役所を訪問し、担当者から三豊市の現状と課題について話をうかがった。

このなかで、三豊市は旧7町が合併して一定の期間を経るものの、未だに旧7町それぞれの意識が強く、三豊市としての住民意識が醸成されていないことが明らかとなった。

そこで市民の三豊市への帰属意識の醸成をはかるために、食を通じた地域交流の機会創出の可能性を探るべく、旧7町のまちづくり推進隊を訪ね、各推進隊の活動や課題についてヒアリングを行った。

まちづくり推進隊豊中では、不動産の滝コミュニティセンターを活動拠点として、地域の伝統料理である「肉もっそ」の販売を中心に活動を行っており、「肉もっそ」のルーツである「物相」の歴史につい



て調査中であり、大学生にも調査に協力してほしいとの要望があった。

まちづくり推進隊高瀬では、住民の発案により数多くの取り組みを展開しており、大学生には、地元の特産品である高瀬茶について、そのさらなる普及について考えてほしいとの提案があった。

そのほか、5つのまちづくり推進隊についても、ヒアリングを行い、それぞれの活動の現状と課題を聞き取ることができた。



この活動を通して、三豊市では旧7町に設置されたまちづくり推進隊（地元民）が鍵を握っていることが改めて確認できた。その方々の協力を得つつ、学生目線で三豊市の課題を認識したり、その解決につながる発想を出し合ったり、結果的に地域活性化に少しでも近づけるよう交流の場をつくる必要性への認識に繋がった。

【粟島地域活性化プロジェクト】

瀬戸内国際芸術祭が開催される島のひとつである粟島は、漂流郵便局など日本国内はもとより、最近では海外でも知られるようになった島である。



粟島のシンボルである粟島海洋記念館の展示品は未整理のものが多く、目録もない状態であった。そこで昨年度より、これらの展示品の整理ならびに目録づくりを継続的に行ってきた。ここで作成した目録については、いまのところ活用方法を検討中であるが、今後、粟島海洋記念館の在り方を考える際に、必ずや役立つであろうと期待している。

粟島では、粟島海洋記念館の展示品の整理ならびに目録づくりのほかに、地域住民がオープンを目指しているカフェやゲストハウスの整備にも協力した。

【食を通じた地域交流】

三豊市の住民意識の醸成をはかるために、食を通じた交流手法である「共奏キッチン」を取り入れ、

三豊市財田町にある道の駅たからだの里において、交流会を開催した。

共奏キッチンとは、通常の料理教室などとは異なり、偶然同じグループになった初対面の人たちが語り合いながら食べたいメニューを決め、その食材を近所のスーパー等で調達して料理するイベントである。交流が目的のイベントではあるが、ツールとして「みんなの好みを尊重した意思決定、地元食材を意識した買い出し、協力・役割分担して調理、そして一緒に食事」という一連の流れが設定されている。そのプロセスでいろいろな話が交わされる。知らない人同士でも目的は一緒なので容易に仲良くなれる、知っている人同士であってもお互いに新しい発見がある、とても有効な手法である。ここでできた関係性が、次の行動に結びつくことがあれば、まちづくりにとっても有効なワークショップといえる。地産地消の意識が高まれば、地域の産業を残す力となるかも知れない。偶然、見つけた手法であったが、「(株)たからだの里」の理解もあり、実施に漕ぎ着けることができた。

3. 得られた成果

【粟島地域活性化プロジェクト】

上述の通り、粟島での活動は、おもに「粟島海洋記念館の展示品の整理ならびに目録づくり」と、「地元住民によるカフェならびにゲストハウスの整備」であった。粟島海洋記念館の展示品の整理ならびに目録づくりについては、昨年度より引き続きの取り組みである。一部展示品について未着手のものもあるが、ほぼ整理と目録づくりは完了した。カフェならびにゲストハウスの整備については、学生もその手伝いに入り、多少なりとも貢献できた。

また、プロジェクト学生全員によるフィールドワークを2度実施することができ、島の生活の入口を理解することができた。島故の魅力の発見も学生による個人差はあるものの、一定の成果が学生のレポートから垣間見られた。

【食を通じた地域交流】

道の駅たからだの里において、三豊市民の交流の場の創出のために、共奏キッチンを開催した。そもそものねらいが旧7町の、ともすればばらばらの意識を三豊市へと近づけることにあったので、町外からの参加者が一定数いたことは評価できる。正直なところ、にわかには三豊市への愛着を育むところまではいっていないが、交流の方法の提供という点において一歩を踏み出すことができた。

参加者の中には家族での参加もあり、ひとつの可能性が見えてきた。まちづくりや地域活性化といえば、経済活動が中心となりがちであるが、家庭教育の視点も組み込めることがわかった。親子の触れ合いの機会

創出という視点ではなく、親子を越えた市民の交流である。親子の組み合わせを変えると何が起こるであろうか、学生や若者がそこに入るとどのような意識の醸成が図れるであろうか、とても興味深い。

このように共奏キッチンは実施するたびに新しい顔を見せるところに特徴がある。きっかけとしての共奏キッチンはイベントでしかないが、実施の向こうに何を見通し、描いていくかが重要である。

【派生プロジェクト—まちづくりワークショップ—】

そもそも計画していたプロジェクトではなかったが、三豊市地域活性化プロジェクトが縁となって実現した「まちづくり若者&地域交流研修」の開催にも関わることができた。主催はまちづくり推進隊高瀬であったが、香川大学の学生も随所に活躍の場を与えてくれた。地元の高校生（高瀬高校と香川西高校）の参加、地元のまちづくりに思いのある大人、そこによそ者である香大生が入ったところに意義があった。香大生は高校生の先輩として、グループ内でのファシリテーター的役割を果たし、雰囲気づくりにも貢献できた。若者が住みたくするようなまちづくりについて、若者を中心とした活発な意見交換ができて、今後につなげていけそうな成果となった。

4. 今後の課題

三豊市地域活性化プロジェクトでは、文字通り地域活性化のために、粟島へ入ることで課題を見つけ取り組む活動を行い、道の駅の集客性と広域性を利用した地域交流イベントを行った。これらがストレートに地域活性化につながったかといえば、十分であったとは言い切れない。どこに課題が残ったのであろうか。

【粟島地域活性化プロジェクト】

粟島では島民との交流や関係構築が思いのほか進まなかった。まちづくり推進隊仲間の方々の援助もいただいたが、それをうまく生かすことができなかった。島民不在の地域活性化はあり得ないことは自明のことである。前年度以前の取組を省察して活動に臨んだつもりだが、その壁は厚かったというのが実感である。今後の粟島での活動は見直しをかけざるを得ず、継続するにしても島民との直接的な協働というよりは、資料目録の作成等間接的な関わり方になるであろう。

また、粟島海洋記念館の展示品の整理ならびに目録づくりはほぼ完成したのだが、その活用方法については具体的な方策は立てられなかった。せっかくの取組の成果が意思疎通のまずさから生かせなかったのは反省材料である。カフェならびにゲストハウス整備についても同様である。

【食を通じた地域交流】

今年度は、道の駅たからだの里で共奏キッチンで1回開催するにとどまり、イベントとなってしまった。上述の通り、手法としての共奏キッチンには大きな可能性があるため、前もってまちづくり推進隊等への積極的な働きかけをすることが必要であった。

その他、連携相手として、まちづくり推進隊のみならず、三豊100年観光会議や地元NPOとも協力して、まちづくりワークショップなどを開催することで、三豊市の一体感を醸成する取り組みを行っていききたい。そのためにも、三豊に出向く回数を増やし、関係性を深めていきたい。



「⑪観音寺市定住促進プロジェクト」

科目担当教員 鈴木 健大 (地域連携戦略室・特命准教授)
 連携自治体 観音寺市

1. 授業目的

観音寺市豊浜町は、かつては香川県三豊郡豊浜町に属していたが、平成17年10月に豊浜町、大野原町、観音寺市が合併し、現在の観音寺市となった。

平成27年4月1日現在の住民基本台帳によると、観音寺市の人口は62,329人、そのうち豊浜地区(和田浜、姫浜、和田、箕浦)は7,922人である。対前年比で見ると、人口減少率が-1.20%となっており、市内3地区(観音寺、大野原、豊浜)の中で最も大きい。

JR豊浜駅は、豊浜町姫浜にあるJR四国管内予讃線の駅であり、平成22年10月から無人駅となった。かつては一部の特急列車が停車したというが、現在はほぼ1時間に1本、上り下りの各駅停車の電車がそれぞれ停車するのみである。駅舎内のKIOSKは約10年前に撤退し、入居していたスペース(約8㎡)はシャッターが下りたままとされている。構内には約200本のつつじが植えられ、毎年5月の連休に「豊浜駅つつじ祭り」が開催されている。

少子高齢化・人口減少の時代・地域において、公共施設のあり方が地域課題の一つとして取り上げられ、今年度は「JR豊浜駅舎の地域利活用」をプロジェクトのテーマとすることとなった。



JR豊浜駅外観(左)と駅舎内旧KIOSK入居スペース(右)

2. 実施概要

(1) プロジェクトの進め方

- ・一年間を「現状理解(調査)及び課題の整理」「課題解決に向けた活動計画」「実践」「振り返り」のPDCAサイクルの流れで行い、「振り返り」を次年度のプロジェクトに生かしていく。
- ・「計画」段階では、主観的な感覚・気づきを感じ、チーム協働でアイデアを生み、プロトタイプをつくって体で考える「デザイン思考」の要素を組み入れる。
- ・「実践」段階では、「モノ」ではなく、「人と人のつながり」でまちを元気にしていく「コミュニティデザイン」を基本に組み立てていく。

(2) 参加学生

6人(経済学部、法学部、教育学部1年生)

(3) 実施内容

①JR豊浜駅利用実態調査

平日の朝・夕の時間帯について2日間に分けて行い、乗降客数と概ねの年代層について調べた。また、併せて駅の利用実態について観察調査を行った。

②先行事例調査

無人駅舎を地域で利活用しているJR屋島駅とJR大歩危駅を訪ね、経緯やその利活用内容、運営方法等についてヒアリングを行った。また、アドバイスも受けた。

・JR屋島駅

JR屋島駅は、平成20年、JR四国から駅舎の維持管理について地元へ投げかけがあり、元屋島中学校の同級生たちが観光案内を始めたのが始まりである。「元気YASHIMAを創ろう会」「JR屋島駅盛り上げ隊」、JRのOB、周辺自治会が連携し、観光案内、レンタサイクル、駅舎内ギャラリー、駅前広場でのイベント、乗車券類の販売、待合室やホームの清掃等を行っている。

・JR大歩危駅

JR大歩危駅は、平成19年、当時駅が多くのごみで汚れていたため「一日一個ごみを拾う会」が発足し、平成22年に無人駅となったのをきっかけに、地域の話し合いの場「キッチン会議」が立ち上がったのが始まりである。地元住民、JR四国、三好市役所職員、市観光協会等から構成されるJR大歩危駅活性化協議会により、花一輪運動(徳島県の全無人駅に広がる)、駅舎やトイレの改修、年数回の大歩危駅前清掃活動、100本の桜の植樹、妖怪まつりやウォーキングイベント等を行っている。



JR屋島駅舎内ギャラリー(左)とJR大歩危駅舎内待合スペース(右)

③無人駅舎における地域コミュニティ形成の試み「ひめかふえ」

駅舎の利用実態や先行事例調査をふまえ、地元自治会や活動団体、市役所と意見交換を行い、地域の子どもたちを対象にしたワークショップを通じたコミュニティづくりと地域の高齢者が外出するきっかけとなり、また、散歩途中で立ち寄ることができるような立ち寄り場を試みることとなった。

このコミュニティ形成の場は、JR豊浜駅の所在地「姫浜」にちなんで、「ひめかふえ」と名付けられた。

子どもたちを対象にしたワークショップは、平成27年11月から平成28年1月にかけて7回実施した。

宿題(勉強)は常にできるようにし、低学年の子どもたち向けに折り紙、葉づくり、紙芝居や絵本の読み聞かせ、クリスマスツリー飾りづくり等、毎回異なるプログラムを試みた。12月末の第6回目では、クリスマス会としてゲームを行った。参加したのは、小学校低学年以下の子どもたちが半数以上であったが、高校受験を控えた中学3年生1名が継続して通った。開催時間がちょうど高校生たちの帰宅時間にあたるため、駅利用で通りがかった高校生も



地域の方々とのミーティング（左）と駅舎内大掃除（右）



「ひめかふえ」第2回目の様子

何人が利用した。中でも高校3年生女子2名は通い続け、大学の推薦入試、一般入試を受験するにあたり、大学生たちと試験対策、受験相談、面接練習等を行った。

また、11月と12月には地元活動団体「クローバーの会」「つつじの会」が中心となって、高齢者の立ち寄り場としてのカフェを実施した。駅利用の乗降客や高校生たちにも声かけし、交流と団らんを試みた。

3. 得られた成果

①JR豊浜駅利用実態調査

朝8時過ぎの時間帯では、通学・通勤のための電車利用のピークは過ぎ、高松方面上りの電車に学生と通勤者の利用がわずかに見られた程度であった。電車一本あたり10人以下の乗降客数であった。夕方時間帯については、高松方面上り電車への乗車、松山方面下り電車からの降車については、ほとんどが高校生であった。

なお、駅舎の状況、利用実態については、無人駅で人の目が届かないことがあるためか、掲示の時刻表が損傷されている、ホームのベンチに缶コーヒーがこぼされたままになっている、駅前に自転車がかたがたに停められているなどといった状況が確認された。



損傷した時刻表（左）と飲料がこぼされた駅のベンチ（右）

②先行事例調査

・JR屋島駅

JR屋島駅では、清掃業務をJRから受託し、切符売上の一部を収入としていた。助成金を活用して、駅舎内に観光案内スペースを設置したり、観光案内パンフレットを作成したりしていた。駅舎内の生け花や座布団は、地域の方々を作っており、駅の利用者に「行ってらっしゃい」「おかえりなさい」と声かけをしている。こうした取組により、駅舎にホームレスがいなくなったという。駅に行くと「誰がいる」「楽しい」といった気持ちになり、駅や地域の人々が

明るくなったのが「誇り」であるとのことである。

・JR大歩危駅

JR大歩危駅では、協議会で会費を集めるといったことは特になく、必要なものを持ち寄って運営しているとのことであった。駅舎の待合室を改修した際には、県、市からの助成に加え、協議会会員も費用を出したという。こういった活動を続けていると「人間関係がよくなる」、とのことである。「全部やってよかった」「やり切ることが大事」といったアドバイスを受けた。

③無人駅舎における地域コミュニティ形成の試み「ひめかふえ」

毎回10人ほどの子どもたちの参加があった。参加した子どもたちのほとんどは、一度来ると継続して通った。一方、新しい子どもたちがなかなか増えなかった。スペースの広さを考慮すると、今回の参加人数が限度とも考えられる。

来場した保護者の内、4名に対してアンケート調査を行った。感想として、「子ども同士のふれあいができた」「(勉強に)集中できてよかった」といった声が寄せられた。一方、「電車利用者の通行が気になるので、つい立てでもあれば」「2歳くらいの子も参加できるものを」といった要望も寄せられた。

参加した子どもたちからは、「今からでも間に合うと分かったから、勉強したいと思った(高2女子)」「親身になって話を聞いてくれて嬉しかった(高3女子)」「大学のこともたくさん聞けたし、面接練習ができてよかったです(高3女子)」「漢字(の勉強)がおもしろい(小2)」といった感想が聞かれた。

大学生たちからは、「『ひめかふえ』を運営する中で、地域の方や子どもたちの笑顔が見られた」「多くの人と出会って、つながることができた」「人が来そうな企画を考えるのが大変だった」「仲間とは協力できたと思うが、地域の人とはあまり協力ができなかったかもしれない。私たちの企画には手を貸してくださったが、私たちが地域の人の企画に貢献できたかは自信がない」といった振り返りがあった。



高齢者の立ち寄り場カフェ（左）とクリスマス会の回（右）

4. 今後の課題

一年間の授業を終えて、平成28年1月末に学生、地域の方々、観音寺市とで年間活動報告・意見交換を行った。地域の方々から課題として、「お茶や飲料の費用負担」「周知方法」「スペースの広さ」「水道がないこと」等が挙げられた。そのほか、「大学生がいるだけでうれしい」「駅は地域のシンボル、無理せず、楽しく続けてほしい」といった感想も寄せられた。また、5月の「つつじ祭り」でカフェを開く提案も挙げられたため、早速次年度に生かしていきたい。

観音寺市からも次年度の継続について期待が寄せられ、これまでなかった子どもたちや地域、大学生との交流の場をつくる試みができたと考えている。次年度もこの地域と連携した試みを継続し、JR豊浜駅の地域におけるあり方について考察を深めていきたい。

「⑫東かがわ市定住促進プロジェクト」

科目担当教員 原 直行（経済学部・教授）
 連携自治体 東かがわ市

1. 授業目的

東かがわ市での域学連携事業も3年目を迎える。1年目に相生地区と笠屋邸、2年目に丹生地区、そして本年度3年目に三本松地区と五名地区とそれぞれ連携事業を開始した。紆余曲折あり決して単調な歩みではないが、どの地区でも何とか順調に事業展開されていると言えるだろう。

単調な歩みではないことこそ地域づくり・まちづくり活動の意義があると思っている。話し合いを重ね、共同作業を通して時間をかけ少しずつ住民同士、住民と自治体、住民と大学とが連携して活動を積み重ねていくことこそ地域づくり・まちづくりなのである。結果も大事だが、そのプロセスも非常に重要である。

東かがわ市まち・ひと・しごと創生総合戦略に「地域コミュニティ協議会を中心として、地域の課題を地域で解決するためのまちづくりを推進します」という文言があるが、このことは試行錯誤しながら様々な協働によって初めて実現する。

2. 実施概要

(相生地区)

- ①平成25年度に作成した「相生ふるさとMAP」を活用したまち歩き
- ②相生ふるさと村まつりへの積極的な支援
- ③コミュニティビジネスの支援
- ④親子で英語教室事業への支援

(丹生地区)

- ①絹島・丸亀ジオサイト見学ツアー
- ②マップ作成
- ③アンケート調査
- ④丹生コミュニティセンターふれあい祭りへの参加

(三本松地区)

- ①三本松コミュニティーセンターオープニングイベントへ参加
- ②三本松未来会議
- ③フィールドワーク
- ④がりべんの復活
- ⑤親子で学ぼうドローン教室

(五名地区)

- ①ふるさと祭りの参加
- ②やまびこコンサートの参加
- ③いのしし祭りの参加
- ④森の駅計画の支援

⑤五名ええとこ感謝祭の運営

3. 得られた成果

本年度は協議会活動への積極的な支援を行ってきたが、コミュニティビジネスの実践の場において、住民の積極的な参加が見られたため、それを紹介したい。相生ふるさと協議会で昨年度から始まったコミュニティビジネスでは、休耕田を商品作物の畑に転用し、自主財源の創出に取り組んでいる。夏季には雑草の除去のため、炎天下での作業が必要になるが、その活動には毎回20～30名の参加があり、また相生婦人会を中心に女性の姿が多く見られた。



ミシマサイコの草抜きの様子

また夏季休業中の地元小学生30名ほどが、地域活動への参加としてやってきたこともある。地域の課題解決のために始まった活動に、住民が自分たちの町の出来事だという自覚を持って取り組むようになっていく。次に挙げられるのが、住民の地域への愛着心が増し、伝統行事や風俗を後世につなげたいという気持ちが強まっていることである。平成25年度より継続されている資源調査やワークショップのなかでも、自らの住む地域について知りたい、資源発掘は必要であるとの声は常にある。しかし、住民だけではどうしても全てに手が回らない現実がある。大学ではこうした必要性に対して、今後も学生と住民によるワークショップの開催や、意見交換の機会を設け、活動を続けていく必要がある。学生が7月25日に行われた山王宮の夏祭りでは住民からの誘いを受けて勇壮な「だんじり」に参加した。このお祭りは、神輿の担ぎ手が少なくなり今では継承の危機にあるという。こうした伝統行事の価値を理解し、大学が地域資源を伝承するための担い手になっていくことが望まれるようになっていく。

丹生地区では、活動2年目を迎えた。丹生地区は、人口規模においても東かがわ市内で最も大き



ツアー中の丸亀の砂州での海水浴の様子

い。またさぬき市も隣接しており、ベットタウン的な要素がある地区でもある。旧丹生小学校出身ではない人も多く、そのため旧小学校区単位で活動している協議会活動への参加意識が低いことが想定できた。そこで丹生地区では、まずは、丹生の地域資源を知ってもらう試みとしてジオサイトツアーを計画、実行した。成果として、自由研究に活用する児童が数多くみられた。地域の価値を再認識し、それが地域の誇りの醸成につながっていくのではないかと考えられる。地域資源として地域で認識されていなかったものを、価値化し調査、研究することにより広く共有化できるような取り組みも今後も継続して行っていきたい。また人口規模の大きい地区では、それだけで協議会運営が難しい。後半は、マップづくりを通じて協議会の一体感をつくる取り組みも行った。これらの活動は現在も継続中である。



ドローンの操作指導の様子

三本松地区、五名地区は、今年度が活動初年度であった。三本松地区は、目前に迫っている小学校廃校問題などがあり、協議会を中心に地域コミュニティを強化させようとする動きが活発になりつつある。三本松コミュニティセンターが開所したこともあり、できることから取り組みを始めて、その都度、課題を抽出する体制をとった。「親子で学ぼうドローン教室」に参加した若い親世代が協議会に参加するなど、若い世代が地域活動に興味をもち参加できる体制づくりを行い、持続可能な組織づくりが構築できたと考える。また地域のことを考える三本松未来会議を複数回開催することができた。開催する毎に地域のまとまりが出てきたように感じられる。今年度の三本松の活動はスピード感があり、来年度以降も、このスピード感を継続していければよいと考えている。

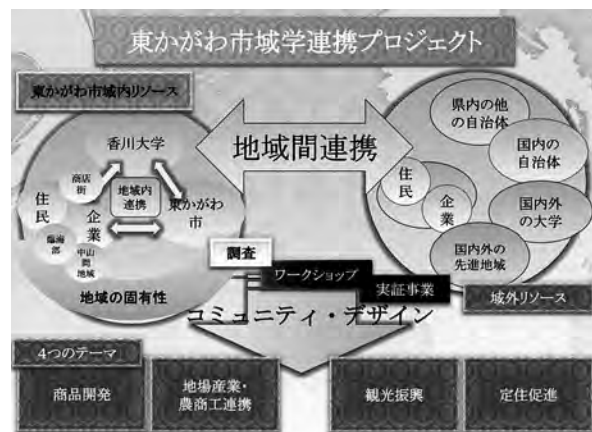


五名ええとご感謝祭での集合写真

五名地区は、先進的にこれまでも取り組んでいる地区であり、大学側も学ばせてもらう姿勢で取り組んだ。大学が取り組んだ「五名ええとご感謝祭」の時でも様々な知恵を拝借することができた。また「五名ええとご感謝祭」では、五名のいいところをふんだんに紹介したしおりなどは、五名の人たちに非常に喜ばれた。五名地区の課題は、コミュニティビジネスをはじめとして現在取り組んでいる様々な活動の継続だと考えている。来年度以降、この点の分析を進め、支援できるような取り組みを行いたいと考えている。

4. 今後の課題

域学連携事業も来年度で4年目に入る。来年度は新たに福栄地区、小海地区が加わる予定である。活動地区の増加により、ますます特定の地区に傾倒しない東かがわ市全域を視野に入れた取り組みが必要になる。さらに、これまで地域内での活動が中心であったが、今後は、情報発信を積極的に行い国内外に活動を広めていきたい。また、地域活動は、成果の定量化がしづらい活動であり、目標設定が困難になる場合もある。しかしながら、今後、事業を進めていく上で、評価基準に基づく評価が必要となってくる。まずはKPIなどの定量的な指標づくりを行い、活動について、目標設定、集計分析、施策実行、効果検証の一連のプロセスがさらに高度化するようしていきたい。



「⑬宇多津町地域活性化プロジェクト」

科目担当教員 原 直行 (経済学部・教授)
 連携自治体 宇多津町

1. 授業目的

本年度が宇多津町と香川大学との地域連携事業の2年目にあたる。宇多津町は香川県内で唯一、今後人口増加が予想されている地域である。しかしながら、その内訳を見てみると開発が進んだ新都市と呼ばれる地域は人口が増え続けているのに対して古街地区は人口減少・少子高齢化が見られる。古街地区はそういった問題を抱えつつも古い街並みを残し、昔ながらの町家が立ち並ぶ、人の生活に根付いた土地である。古街エリアの中心地に、平成26年4月1日「古街の家」と呼ばれる宿泊施設がオープンした。空き家になっていた築146年の家と築84年の洋館の2棟が取り壊され、駐車場にという話が持ち上がったところ、町が購入し、徳島県祖谷などで古民家再生を手がけたことでも知られるアメリカ出身の東洋文化研究者であるアレックス・カー氏が監修し、再生された。古街の家の宿泊客は、基本的に古い街並みや古街の家の趣に興味がある方が多く、「近隣住民が挨拶してくれて気持ちよかった」「住民の日常がそこにあるのが素敵」「観光地として観光客のための町になっていないのが良い」などの感想があり、概ね高い満足度を維持している。宿泊客は、古街の家の利用を通して、古街の家だけでなく古街エリア一帯に目を向け始めている。これを受けて宇多津町は古街の家を中心とした観光まちづくりに取り組んでいる。そして、これらに取り組むにあたり、香川大学も地域連携事業として活動を行う。

2. 実施概要

香川大学域学連携事業は宇多津町では平成25年度より取り組んでおり、平成26年は一時中断したものの、平成27年に再開し、2年目になる。宇多津町は「古街の家」を拠点とした観光まちづくりに取り組んでいる。香川大学も地域連携事業として、本年度は以下の活動を行った。



学生によるプレゼンの様子



- ①地元の有志を中心とした町家ガイド勉強会
- ②まち歩きツアープログラムの作成と実施
- ③観光マップの企画・作成
- ④「うたづの町家とおひなさんイベント」への参加
- ⑤Facebookページでの情報発信

3. 得られた成果

今年度は、宇多津町が古街地区の活性化へ大きく前進した年であるといえる。今まで古街地区のまちづくりに携わってきたのは宇多津町まちづくり課およびおひなさん実行委員会の中心メンバーを含む数人であった。しかし、今年度よりまち歩きの作成に向けた町家ガイド勉強会を開始したことにより、古街地区のまちづくりに携わる方が古街地区の住民のみならず新都市の住民にまで拡大した。これは、かねてよりの課題であった2地区間の相互理解・交流を図る足がかりとなることが期待できる。さらに、古街地区の魅力を観光客に伝えるだけでなく、宇多津町民自身が自分たちの住む地域についてよく知り、説明できることで、地域に「愛着」や「誇り」

を持つようになることも期待できる。当初、町家ガイド勉強会はまち歩きツアーの企画・実施に必要な、歴史や文化の学びのみだった。しかし、勉強会メンバーの希望により食や芸術など扱う内容も拡大していった。回を重ねるごとに住民の主体性や積極性が高くなるのが見て取れるようになった。

また、今回うたづの町家とおひなさんイベントの新たな取り組みとして、地域の習慣の掘り起しがある。お休み処である「いっそく庵～サルモコシカケ～」では、宇多津の特産である塩と古代米を使用したおむすびとこんにゃくの提供を行った。



「うたづの町家とおひなさん」イベントで使用する町家の見学。
内装も一緒に検討。



空き家になっていた町家を掃除する様子

これは昔宇多津で行われていた、庚申の日にこんにゃくを食す習慣を現代風にアレンジし、再現したものである。



垂れ幕作成の様子、申のデザインは地域住民が考案

庚申伝説やこの習慣を知る者は少なくなってしまうが、こうして無くなりつつある習慣を掘り起こすことでまた後世に残すことができる。学生が習慣の掘り起しを行い、庚申伝説のエピソードを添えてこんにゃくを提供する過程でも、地域住民と共に郷照寺へ聞き取り調査を行ったり、地元の豆腐店を招いて出汁の取り方の講習を開いたりした。庚申伝説と習慣の掘り起しを形にする過程でも地域住民同士の交流や新たな学びが大いに盛り込まれた。

4. 今後の課題

- ①まち歩きツアープログラムの作成と実施
 - ・これまでの活動経験を活かし、まち歩きツアーの内容の充実を図る。
 - ・自転車（レンタサイクル）に乗って周辺を巡るサイクリングコースを作成する。
 - ・作成したサイクリングコースを使ったモデルツアーを企画・実施する。
- ②観光マップの企画・作成
 - ・本年度に引き続き、県内の主要観光地の調査を行う。
 - ・観光マップは平成28年度内に発行予定。

本年度行った取り組みは全て長期スパンで地域の将来を考えることのできる活動であり、そのような活動を開始した、宇多津町古街のまちづくりにとって意味のある年となった。特に、まちづくり勉強会を開始したことにより、将来宇多津町古街地区の観光まちづくりを担う人材を育成することができる。今まで、観光客を対象としたまち歩きツアーを行うことのできるガイドは地域住民の中で1人しかいなかったが、今年よりガイド人数は3人に増加した。今後、活動を継続していく中で地域住民の地域に対する「誇り」や「愛着」を生み出していきたい。

地域インターンシップ・訪問型

科目担当教員 山田 香織 (地域連携戦略室・特命講師)

1. 授業目的

本科目は、地域での起業や地域づくりについて低年次の時期に体験・実践を通じて学修する科目である。「インターンシップ」というと、3年次生、2年次生が自身の就職を意識し、企業・官庁等で就業体験や課題解決型の実践に取り組む形態が一般的である。これに対して本科目は地域づくりの現場を実体験することに主眼をおいている。本科目の到達目標は以下のとおりである（本科目の到達目標：シラバスより）。

- ① 地域の課題解決に参画し、実際に地域に貢献できる。
- ② 地域の課題解決に参画することにより、課題探求・解決力が身につく。
- ③ 地域の課題解決に参画することにより、能動的な学習をもたらす主体的な学びができる。

2. 実施概要

本科目は、授業（事前学修・事後学修）・実践・自学自習の3部から構成されており、受講生は事前学修で自身の希望する受け入れ先・課題を選定し、実践をおこなう。実践にあたっては、当初、夏季休暇中に1週間程度泊まり込みでおこなうことを想定していたが、受け入れ先の要望に応じて、定期的に訪問をして課題に取り組むスタイルや学内でミーティングを重ね課題に対する提案をまとめ受け入れ先担当者様と意見交換を重ねるスタイルも盛り込んだ。

今年度の受け入れ先は8か所であった（場所、課題等は次頁参照）。このうち、新たな取り組みとして特筆すべきは、国土交通省が推進する道の駅インターンシップ推進事業との連携である。香川県内でインターンシップ生受け入れを表明していた道の駅のうち、課題解決型の取り組みを提案していた道の駅と事前調整をおこない、計4つの道の駅に学生を受け入れていただいた。

滞在型インターンシップについては後述するの

で、以下では、道の駅でのインターンシップを含む5つの訪問型の実践について述べていく。

地域インターンシップ（訪問型）は継続1件、新規4件で実施した。前者の受け入れ先は三豊市栗島の栗島サイレントプロジェクト、後者はいずれも道の駅である。学生に与えられた課題は、新規企画の提案・実施、商品開発、情報発信、事業展開のための下準備の補助で、活動形態は、現場での活動に終始するものもあれば、課題解決策の提案のためにリサーチやデータ収集、試作や受け入れ先様との打ち合わせ・意見交換に多くの時間を割いたものがあった。



※紙幅の関係上、各プログラムについて詳述できないので、詳細は『平成27年度香川大学地域インターンシップ成果報告書』を参照いただきたい。



3. 得られた成果

受講生は、日常において関わることのない現場で、地域が抱える課題に（短期間とはいえ）向き合い、そのプロセスで受け入れ先担当者様や地域の方々、行政の方とコミュニケーションをとるなかで、本科目の受講を通じて修得することを期待する力を養うことができた。学生に実施した振り返りアンケートの回答にその結果があらわれている。

一方、受け入れ先様の立場に視点を転じてみても、学生を受け入れていただくことは少なからず負担であったことは想像するが、学生受け入れにあたっての課題の洗い出しや普段あまり接点がないであろう大学生との協働作業は、現場に多少の建設的な刺激となったと想像する。

学生が頂いた課題に対しても、一定程度の応答ができたと評価している。なかでも、道の駅たからの里さいたでの活動については、思いがけない展開がみられた。当初頂いた課題は、同施設に関する若者向け情報発信であった。インターンシップ生は、SNSページ立ち上げと、立ち上げ当初2か月分の記事投稿、そのための取材をおこなったわけだが、この活動のプロセスで、集めたい情報を収集するのに乗り越えなければならない「壁」があることに気づいた。そして、その障壁を乗り越えるための方策として、学生から、同施設の資源（施設、農産品、農家さん）を活かしたイベント実施の提案がなされ、それを彼らと道の駅の共催で実施したのである。これは、受講生が冒頭で挙げた到達目標②の力を涵養した良い例といえる。

4. 今後の課題

教育面と運営面に分けてあげていく。

まず、教育面だが、活動終了後の学びを全体共有する機会の確保が挙げられる。授業計画では、活動後にレポート提出に加えて、全体報告会を実施することとしていたが、今年度は前者の実施にとどまってしまった。活動毎に、受け入れ先様・学生・担当教員で振り返りの意見交換の場は設けたが、全体での成果の共有の場の提供には至らなかったため、次年度は設けることとしたい。その際、受け入れ先担当者的の方々にもご出席いただけるような工夫したいとも考えている。

つぎに運営面だが、受け入れ先担当者様と担当教員の役割分担を上げることができる。今年度は、教員が受け入れ先担当者に連絡を取り、日程調整や課題設定をおこなっていた。その結果、受け入れ先様と学生が直接コミュニケーションをとる機会が少なく、学生が能動的に課題に取り組む環境を十分に整備することができなかった。反面、教員は調整に追われ、手いっぱいとなってしまった。今後、受け入れ先が増えていくことも十分想定できるので、基本的な調整は担当教員と受け入れ先様のあいだで前年度中に終え、インターンシップ開始後は、原則、受け入れ先様と学生のあいだで活動を進め、担当教員は状況を随時把握しつつ、学期途中などに学生・受け入れ先様双方と意見交換をおこない、必要に応じて体制の改善に努めるかたちとすることが望ましいだろう。

【地域インターンシップ受け入れ先・課題等】

実施形態	受け入れ先／実施場所	自治体名	参加人数	取り組み課題
訪問	粟島サイレントプロジェクト	三豊市	2人	ピザ窯づくりの作業
訪問	道の駅うたづ海ほたる臨海公園	宇多津町	3名	アロハフェスティバル追加イベントの企画運営（商工会青年部の方々と）
訪問	道の駅たからの里さいた	三豊市	2名	若い世代への情報発信（SNSの立ち上げ、運営）、新規イベントの企画・運営
訪問	道の駅ふれあいパークみの	三豊市	3名	三豊市の食材を用いたオリジナル商品開発のための提案
訪問	道の駅小豆島ふるさと村	小豆島町	9名	モビリティ（電動二人乗り自動車）活用のためのマップづくり
滞在	男木島	高松市	6名 (3)	島のおばちゃんの作業手伝い、図書館整備のお手伝い、ヒアリング、最終提言
滞在	豊島	土庄町	4名 (3)	産廃事件の学習（視察・ヒアリング）、島キッチンでのお手伝い、草刈作業、最終提言
滞在	直島	直島町	6名 (3)	アートと環境の島に関する学習（ヒアリング・視察）、観光協会でのお手伝い、移住者へのヒアリング、最終提言

※参加人数()内の数字：他大学生参加

地域づくりインターンシップ・滞在型 直島

科目担当教員 山田 香織 (地域連携戦略室・特命講師)

1. 授業目的

本科目は、地域での起業や地域づくりについて低年次の時期に体験・実践を通じて学修する科目である。「インターンシップ」というと、3年次生、2年次生が自身の就職を意識し、企業・官庁等で就業体験や課題解決型の実践に取り組む形態が一般的である。これに対して本科目は低年次生が、地域づくりの現場を実体験することに主眼をおいている。

香川県との連携事業として実施した3つの滞在型プログラムのひとつである直島でのインターンシップは、香川県内における若者の移住定住促進ならびに地域の活性化を課題に掲げ、島内視察やヒアリング、就業体験をおこなうことで、直島における移住定住をとりまく環境と現状(課題も含めて)を多角的に理解することを目指した。

2. 実施概要

【実施期間とスケジュール】

平成27年年8月20日(木)～8月24日(月)

- 1日目：県担当者レクチャー、移住交流センター視察、県下地場産業の視察・体験(うどん、盆栽)
- 2日目：福武財団担当者レクチャー、島内地域活性化事例の視察、ヒアリング①(町長、町役場担当者)、振り返り



3日目：新産業の現場体験、外国人観光客に対するアンケート調査、振り返り、ヒアリング準備

4日目：ヒアリング②～④(地元住民、移住者・地域おこし協力隊、観光協会スタッフ)、アンケート調査、プレゼン準備

5日目：プレゼンテーション

【参加者】

計6名

香川大学生3名：教育1年2名、農1年1名

他大学生3名：立教大2年、愛媛大3年、慶應義塾大3年修了生

香川大学生は「地域インターンシップ」受講生であり、他大学生は、大学ならびに香川県のHPやSNSでの広報を見て参加申し込みをした意欲のある学生だった。

【協力機関・団体】

直島町内でのプログラムづくりや日程調整にあたっては直島町観光協会様にご協力・ご尽力いただいた。このほか、以下の機関・団体様にレクチャーやヒアリングをお引き受けいただいた(敬称略)。

NPO法人直島町観光協会、直島町、福武財団、直島町地域おこし協力隊、ういらぶ なおしま、香川県、花澤明春園、さぬき麺業

3. 得られた成果

本プログラムは、参加学生、学生を受け入れてくださった地域にとって、刺激の多い内容となった。参加学生は、異なる立場の方にヒアリングをすることで多角的に直島という島、島での暮らしを理解し、得られた情報をふまえ、最終日には地域の方をもうならせるプレゼンテーションに結実させていた。外国人観光客向けアンケート作業では、語学力の必要性を痛感し、学習意欲を高めていた。

学年・専門・大学が異なる同世代が集中的に実践的な学修を行なう本プログラムは、普段の大学生活では得られない知的な刺激を提供する意義のあるものである。学生間のチームワークの醸成も図ることができる。

若い世代の「直島ファン」を増やすことができたことも成果である。



4. 今後の課題

プログラムならびに地域の受け入れ・協力体制については申し分ないが、運営体制について2点改善すべき点がある。1つ目が、過密スケジュールの解

消である。中身の濃い内容であったと評価できる反面、参加学生が立ち止まって、得た情報や経験を整理・思考をする時間、各自の関心を掘り下げるためのリサーチの時間を確保できなかった。実施時期は暑さの厳しい時期であり、疲労がしやすい状況でもあることから、一部自由度をもったスケジュール構成にすることが望ましいだろう。

2つ目は、学生間のリテラシーの差である。他大学生は2、3年生であるのに対して、香川大学生は1年生であるため、ヒアリング、レクチャーでの態度、得られた情報をもとにした思考分析、プレゼンスキル等に差があり、香川大生が他大生に頼り切りの状況が生まれていた。今後は、本学学生に対する事前学修を充実させ、本学の学生がより能動的にこのプログラムに参加できる環境を整備していくことが必要であると考えます。

※本プログラム最終日のプレゼンテーションで学生がおこなった提案については、『平成27年度香川大学地域インターンシップ成果報告書』を参照いただきたい。

地域づくりインターンシップ・滞在型 男木島

科目担当教員 村山 卓 (地域マネジメント研究科・教授)

1. 授業目的

男木島インターンシップは、香川県の10代後半から20代前半までの人口減少が著しい中、大学生に就労先の候補の一つとして香川県を選択してもらえよう、香川大学生（以下「香大生」）と県外大学生（以下「県外生」）とがともに滞在し島内で就労活動等を行う中で、若者の視点からの魅力や課題を見つけ、男木島の活性化につなげるための提言をまとめるものである。

2. 実施概要

(1) 活動概要

【実施期間】平成27年8月7日（金）～11日（火）

このほか、香大生は事前フィールドワークを行った。

【参加学生】

- ・香大生（3名）：法学部1年男女、工学部1年男子
- ・県外生（3名）：法政大学経営学部3年男子、大阪経済大学経済学部3年女子、京都女子大学法学部3年女子

(2) プログラム

① 第1日目 オリエンテーション等

9時40分にJR高松駅にて集合した後、高松港近くの会議室で、オリエンテーションを行った。担当教員からの本事業に係る概要に続き、香川県地域活力推進課の職員の方から移住促進政策を説明いただいた。その後、参加者同士の敷居をなくすため、香大生と県外生とがペアになり、互いに似顔絵を描きインタビューした内容を全員に発表する「似顔絵他己紹介」を行った。高松駅近くのうどん屋で懇親を兼ねた昼食の後、12時発のめおん号で男木島に渡った。島では、ONBA FACTORYの大島よしふみ代表から男木島の概要を説明いただいた後、豊玉姫神社や男木島灯台など島内のフィールドワークを行った。



似顔絵他己紹介

② 第2日目 島民との交流・ART展示補助

男木島では、夏期に“ビアガーデン”と称して観光客向けに郷土料理のおもてなしを行っている。男木島漁協にて郷土料理を作るお手伝いをしながら、男木島漁協のおばあちゃんから島の歴史や生活の話がうかがった。また、ART SETOUCHIの展示の手伝いをするため、NPO法人 瀬戸内こえびネットワークの方に展示作品を案内いただいた。その後、漁協の手伝いと島



島民との交流

内の展示作品の受付の2班に分かれてそれぞれの就労体験を行った。昼食を挟み、活動を交代し、両方の活動を体験できるようにした。

③ 第3日目 男木島図書館開設に向けた補助作業

NPO法人 男木島図書館の福井理事長の指導のもと、島の図書館建築に向けた空き家改修作業を行った。作業の中で、自身がUターン移住した経緯や男木小中学校復活に向けた活動などを伺った。

④ 第4日目 休憩所設置支援等

男木島は太陽を遮る建物が少なく、坂も多いため、観光客から「休憩場所が少ない」という意見が寄せられる。このため、アート展示の近くの空き家の休憩所としての活用に向けて、部屋の片づけを行った。



活動報告会に向けた検討

夕刻以降は、翌日の活動報告会に向けて、2つのチームに分かれて「島の課題と対応策の提案」について、深夜までかかって熱心に議論を行った。

⑤ 第5日目 活動報告会

午前中は発表に向けた練習を行った。13時から活動報告会では、5日間の活動報告とともに、島の活性化に向け、「体験できる行事の開催」「情報発信力の強化」「島内ツアーの商品化」「島内で販売する土産や飲食メニューの共有」などを提案した。

3. 得られた成果

全員が、しっかりと5日間のインターンシップを成し遂げ、他大学生同士の交流を深めることができた。

インターンシップを終えた後、県外生3人全員が、再度男木島に訪れたいとの意向を持ち、実際にこのうち1名はSNSでの再来訪記事があり、ほかの1名とは、後日めおん号で遭遇するなど、既に彼らの中で特別な場所に位置付けられていることを実感した。なお、この1名は、現在香川県内で就職活動中である。

4. 今後の課題

香大生全員が1年生であることや、単位取得が大きな目的であることなどから、地元としてのリーダーシップを発揮する等の効果は十分には得られなかった。インターンシップ実施前に、さらにしっかりと意識付けを行っておくべきであるように感じた。

運営面では、男木コミュニティ協議会の木場健一会長をはじめ、ONBA FACTORY代表の大島よしふみ様、宿泊した民宿の方などに温かく支えていただいたことから、特段の支障なく実施させていただくことができた。お世話になった方々に心から感謝したい。

教育

地域づくりインターンシップ・滞在型 豊島

科目担当教員 鈴木 健大 (地域連携戦略室・特命准教授)

1. 授業目的

本科目は、地域での起業や地域づくりについて低年次の時期に体験・実践を通じて学修する科目である。地域づくりの現場を実体験することに主眼をおいている。本科目の到達目標は以下のとおり定めている。

- ①地域の課題解決に参画し、実際に地域に貢献できる。
- ②地域の課題解決に参画することにより、課題探求・解決力が身につく。
- ③地域の課題解決に参画することにより、能動的な学習をもたらす主体的な学びができる。

特に夏期の合宿型の本インターンシップでは、香川大学生と県外大学生とが、ともに地域における就労体験を通じてお互いの価値観を共有しながら地域における仕事や暮らしを理解し、将来地方で仕事をする事や生活することについて深く考察する機会を創出しながら、上記目標の獲得を目指している。

2. 実施概要

実施期間：平成27年8月24日（月）～28日（金）

参加学生：4人

香川大学生1人

県外学生3人（慶應義塾大学1人、早稲田大学1人、中央大学1人）

活動概要：

豊島が置かれている現状について就労体験やヒアリングを通じて理解し、豊島の課題の一つ「若い世代の定住」といった課題に対して参加学生が共に考え提案するプログラムとして実施した。

豊島（土庄町）の現状と施策、島における環境問題、観光政策、島で生活する方々、特に自治会、Uターン者からのヒアリングのほか、就労体験も組み入れて多方面から島で暮らす現状について把握ができるような組み立てを行った。また、最終日には島の方々を迎えて、学生から「若い世代の定住促進策」について2班からプレゼンテーションを行い、意見交換を行った。

日程：

8月24日（月）

- ・オリエンテーション「香川県の施策概要」「香川県の離島と離島振興施策」「土庄町の概要」
- ・豊島観光協会ヒアリング

8月25日（火）

- ・豊島農民福音学校ヒアリング
- ・香川県直島環境センター豊島分室・産業廃棄物問題ヒアリング

8月26日（水）

- ・「島キッチン」就労体験及びヒアリング

8月27日（木）

- ・甲生集落就労体験（神社境内の枝払い）
 - ・豊島唐櫃棚田保存会及び豊島美術館ヒアリング
- 8月28日（金）
- ・大学生による成果発表・施策提案及び意見交換



甲生集落での枝払い作業（左）と意見交換会（右）

3. 得られた成果

一点目は、日常の学生生活では体験することができない、“島で暮らす”ということを経験することができたことである。二点目は、島における就労体験を通じて、地域における仕事を体感する機会になったことである。三点目は、香川大学生と県外大学生とが寝食を共にしながら議論し合い、考える時間を共有できたことである。

以下は、プログラム終了後の参加大学生のアンケートの中からの抜粋である。

- ・島の暮らしの中では人とのつながりをより強く感じ、さらに島をよりよくしようという一つの方向性に向かって活動されている姿が印象的でした。そのような人と人とのつながりやあたたかさを感じられることも大きな魅力の一つであると感じました。
- ・都会で育ち、都会の大学に通うと、周りの学生のほとんどが都会で働くので、それが当たり前だと私は考えがちでした。豊島で5日間滞在して、島の暮らしを少し感じただけでも「実際に豊島で暮らしたら、どんな生活になるのかな」と色々想像してみて、初めて島暮らしに対して、リアリティを持って考える機会になりました。
- ・ぼんやりとしていた自分の進路について見つめ直す良い機会となりました。そして何より、自分が東京よりも、ゆったりと豊かな自然の中での生活を望んでいるのだということを再確認することができました。

4. 今後の課題

今回のインターンシップは、自治体、関係機関、島民の方々といった大勢の方々の協力をいただいて実現できたものである。次年度は瀬戸内国際芸術祭が開催されることもあり、豊島における今後の実施の可能性について検討する必要がある。

「鍛えあげ型人財育成プログラム」の正課授業実施 「鍛えあげインターンシップ」の実施

科目担当教員 杉本 洋一（キャリア支援センター副センター長）

1. 目的

鍛えあげ型人財育成プログラムは、「正課科目による知識教育」「正課外講座によるスキル教育」「鍛えあげインターンシップ」という3つのセクションにより構成しており、学生が、大学や学外のフィールド（地域や企業等）における学習経験を通じて、「気づきを通じた成長」がはかれるよう設計している。そして、本プログラムは、履修者（受講者）である学生を、「自ら考え行動する”ことのできる人材、すなわち、地域で輝く“人財”に脱皮させることを目的としている。

2. 到達目標

本プログラムでは、地域で輝く“人財”の具体的なイメージを、「タフで課題解決能力のある人財」に置いており、具備すべき能力要件を独自に6つ設定している。すなわち、①自己理解・他者理解、②視野・見識、③主体的能動的意識、④課題の発見・形成、⑤他者と協働した課題解決力、⑥グローバル化社会に対応した自己表現力である。これらの能力要件について、本学学生に対する社会からの期待水準を想定し、学生ごとの過不足に照らして、充足させていくことが到達目標である。このため、学生は、自分のニーズに基づいて能力要件の強化に資する学習機会を選定・利用できるようにしている。

3. 授業及びインターンシップの詳細

1. 正課授業

全学共通教育科目の主題B「地域と生活」において基礎講座Ⅰと基礎講座Ⅱを、高学年向け教養科目において実践講座Ⅰを実施した。

(1) 地域貢献人財育成 基礎講座Ⅰ

【実施期間・回数】前期に定時開講し、所定の15コマに加えて10回の補講演習を行った。

【履修者数】13名（法学部：2名、経済学部：3名、工学部：6名、農学部：2名）



【授業内容】「タフで課題解決能力のある人財」に必要と考える、①自己理解・他者理解、②視野・見識、③主体的能動的意識、④課題の発見・形成、⑤他者と協働した課題解決力、⑥グローバル化社会に対応した自己表現力、のうち、特に③④⑤の強化をはかるため、クリティカル・シンキングの講義・演習を実施した。

(2) 地域貢献人財育成 基礎講座Ⅱ

【実施期間・回数】後期に定時開講し、所定の15コマに加えて6回の補講演習を行った。

【履修者数】3名（工学部：3名）

【授業内容】上記①～⑥のうち、①自己理解・他者理解の強化をはかるため、性格心理学のMBTI（Myers-Briggs Type Indicator）の講義・演習を実施した。



(3) 地域貢献人財育成 実践講座Ⅰ

【実施期間・回数】前期に定時開講し、所定の15コマを行った。

【履修者数】10名（工学部：1名、農学部：9名）

【授業内容】上記①～⑥のうち、②視野・見識、





③主体的能動的意識、⑥グローバル化社会に対応した自己表現力、の強化をはかるため、企業人の招聘講師とともに講義・演習を実施した。

2. 鍛えあげインターンシップ

同インターンシップの実施前に、研修効果を高めるための「事前交流会」(7/1、参加者：企業等17組織20名、学生：13名)と「鍛えあげ講座」(7/12、受講者：11名)を実施した。同インターンシッ



事前交流会



鍛えあげ講座の演習場面



インターンシップ先の現場

プは、香川県を中心とする18組織が受入先となり合計44名(経済学部：21名、法学部：11名、工学部：6名、農学部：6名)の学生が参加して、夏季休業中に実施した。実施後は、改善点を話し合う「担当者交流会」(11/10、参加者：企業等11組織12名)を実施した。

4. 授業評価の結果

1-(1) 地域貢献人財育成 基礎講座Ⅰ

学生による授業評価(5:非常にそうである、4:おおむねそうである、3:どちらともいえない、2:あまりそうでない、1:全くそうでない)の結果をみると、「この授業の到達目標を達成できましたか」については、3.67であった。これは、授業で扱った課題が人口動態等の難易度の高いテーマであったため学生が自己評価を厳しくしたことも一因にあると思われる。

1-(2) 地域貢献人財育成 基礎講座Ⅱ

学生による授業評価の結果をみると、「この授業の到達目標を達成できましたか」については、5.00であった。

1-(3) 地域貢献人財育成 実践講座Ⅰ

学生による授業評価の結果をみると、「この授業の到達目標を達成できましたか」については、3.83であった。

5. 授業及びインターンシップで得られた成果及び今後の課題

1. 正課授業

1-(1) 地域貢献人財育成 基礎講座Ⅰ

学生の修得状況をみると、他者協働しながらクリティカル・シンキングによる問題解決手順を踏むことが一通りできる状態になった。

1-(2) 地域貢献人財育成 基礎講座Ⅱ

授業ではMBTIの理論の講義のあと、それを踏まえた自己分析の演習を繰り返して行ったため、自己理解と、それを通じた他者理解が非常に深まった。

1-(3) 地域貢献人財育成 実践講座Ⅰ

授業を通じて、地元産業のグローバルな活動実態を理解し、地元への関心・貢献意欲が喚起されるとともに、英語による自己紹介や地元PRの表現力が向上した。

2. 鍛えあげインターンシップ

参加学生には報告書の提出を義務づけているが、全員について、働くことについての内省や気づきがあったことが読み取れた。また、受入先の組織からは、次年度も受入継続したい旨の意見を頂いた。なお、平成27年度受審の大学機関別認証評価において、鍛えあげインターンシップは、優れた点の1つに取り上げられ、「継続的に実施され、一皮むける経験を学生に提供している」と評価された。

教育フィールドワーク型授業

教育

オリーブ学

科目担当教員 小川 雅廣（農学部・教授） 別府 賢治（農学部・教授）

フィールドワーク実施状況（概要）

	日 時	参加者数	訪 問 先
第1回	平成27年11月12日（土）	23名	小豆オリーブ研究所
第2回	平成27年11月20日（金）	70名	香川大学農学部敷地内
参加者合計（延べ人数）		93名	

1. 授業の目的

「オリーブ」の特性、生産や活用について、歴史的な経緯を踏まえつつ、最新の動向を把握して、地域特産物としての位置づけを正しく理解するとともに、現状の様々な課題を認識し、今後の展開を考える。

2. 授業の到達目標

- ① 地域特産である「オリーブ」の歴史・産業、生産と活用法、機能性を説明できる。
- ② 地域特産である「オリーブ」の現状の課題を考察できる。

3. 授業及びフィールドワークの取組内容

本授業では、講義を14回、フィールドワークを2回（1回は小豆島、もう1回は農学部キャンパス内）行った。講義としては、オリーブの歴史的背景、栽培方法、活用方法、健康機能性、関連産業など幅広い内容を、13名の講師（香川県職員3名、高松市職員1名、医学部教員1名、農学部退職教員1名、農学部教員7名）によるオムニバス方式で体系的に学ばせた。オリーブ関連産業の振興に携わっている香川県職員3名からは、オイル・果実製品の製造法、オリーブの副産物を活用した特産品（オリーブ牛・オリーブハマチ）の開発の経緯や製造方法、オリーブ関連製品の販売戦略や現状の課題などについて解説していただいた。また、野菜ソムリエの資格を持つ高松市職員からは、オリーブを活用した料理方法について解説していただいた。フィールドワーク1回目は、11月12日（土）にオリーブ果実の主産地である小豆島の香川県農業試験場小豆オリーブ研究所においてオリーブ果実の収穫作業と搾油実習を行った。当日は23名の学生が参加した。まず、研究所職員から、オリーブの収穫作業について、収穫可能な成熟段階、採り方、病害虫被害果の除去等について説明を受けた後、実際に果実の収穫、選別を行った。また、搾油について、果実の洗浄法や搾油機の原理と操作等について説明を受けた後、自ら収穫した果実から手もみ操作によってオイルを取り出し、遠心分離機でオリーブオイルを分離した。

フィールドワーク2回目は、小豆島でのフィールドワークに参加できなかった学生のために1回目と同内容のフィールドワークを農学部キャンパス内で行った。11月20日（金）の平日に、農学部敷地内に植えているオリーブを使って実施した（添付写真）。70名の学生が参加した。授業の最終回には、香川大学オリーブ検定試験を実施した。

4. 学生アンケートの結果

アンケートの結果によると、学生は、フィールド実習の実施時期や時間帯、訪問先と指導者、準備学習、学習内容等におおむね満足と回答があった。

5. 授業及びフィールドワークで得られた成果及び今後の課題

本授業では、70名の学生がオリーブ果実の収穫作業と搾油体験を行った。ほとんどの学生にとっては、オリーブ果実を手で触ったのは初めての体験であった。昨年度は、履修者の人数制限を設けたため、オリーブ果実の収穫作業及び搾油実習を体験した学生はわずか25名であったが、今年度は70名もの学生が体験できた。このようにより多くの学生にオリーブに関する実体験を持たせることができたことは大きな成果である。また、オリーブに関する様々な分野の専門家から学んだことで、学生はオリーブの歴史、栽培、活用、機能性、産業等に関する多様な専門知識を身につけた。これらの経験を通じて、オリーブ関連産業やオリーブを通じた地域の連携に関心を持った学生が増えたと思われる。今後履修した学生がオリーブに関連産業に関わる職についたか追跡して調査する必要がある。



研究所職員によるオリーブの栽培・果実収穫の説明



農学部教室でのオイル搾油作業

教育

個別演習

科目担当教員 古川 尚幸（経済学部・教授）

フィールドワーク実施状況（概要）

	日 時	参加者数	訪 問 先
第1回	5月30日（土）	27名	坂出市王越町
第2回	12月12日（土）	19名	坂出市王越町
第3回	1月24日（日）	19名	坂出市王越町
参加者合計（延べ人数）		65名	

1. 授業の目的

坂出市王越地区において、地域住民や地元団体と協力し、地域資源調査を行う。また、その成果を活用して、地域活性化の方策を検討することを目的とする。

2. 授業の到達目標

坂出市王越地区において、地域住民や地元団体と協力し、地域資源調査を行うことで、学生の地域に対する理解を深め、地域で活動することの意味を理解する。また地域住民との交流を通じて、学生たちが成長することを目標とする。

3. 授業及びフィールドワークの取組内容

坂出市王越地区に出向き、各グループに分かれて、地域資源調査を行った。



地域資源調査により、得られた結果をもとに、王越婦人会など地域住民からも地域資源についてヒアリングを行い、王越地区の地域活性化の在り方について、意見交換を行った。



4. フィールドワーク訪問先の関係者からの評価

坂出市王越地区の住民からは、学生たちの活動に対して一定の評価を得ることができた。引き続き、次年度以降も学生たちの活動を継続するよう、要望を受けている。

5. 授業及びフィールドワークで得られた成果及び今後の課題

坂出市王越地区での地域資源調査を通じて、学生の地域資源に対する理解が深まっただけでなく、王越婦人会や自然界倶楽部など地域住民との関係性の構築が進みつつある。ただ、王越自治会などとの関係性構築が進んでいないので、次年度はこの点を改善しつつ、王越婦人会と共同して集会所を活用した休憩所の運営を検討していきたい。

演習 自治体行政と法制度

科目担当教員 三野 靖 (法学部・教授)

フィールドワーク実施状況 (概要)

	日 時	参加者数	訪 問 先
第1回	2015.7.5 (日)	2	土庄町豊島 廃棄物不法投棄現場・香川県処理施設等見学
第2回	2016.2.22 (月)	8	徳島県上勝町視察 ゼロ・エミッション、彩事業等
第3回	2016.2.26 (金)	9	香川県廃棄物対策課
参加者合計 (延べ人数)		19	

1. 授業の目的

産業廃棄物に関する法制度の仕組みと課題について学習するとともに、産業廃棄物の現状等について調べる。法制度は、廃棄物処理法の改正経緯、法制度の課題、香川県の産業廃棄物に関する条例・要綱等を調べる。産業廃棄物の現状等は、国や香川県の環境白書や廃棄物処理計画等を調べる。フィールドワークは、豊島の不法投棄現場、直島の間処理施設等の視察を行う。また、香川県廃棄物対策課と学習会を実施し、政策提言を検討する。

2. 授業の到達目標

自らの生活や社会活動から排出されている廃棄物がどのような法制度のもと処理されているか学ぶとともに、その課題について実際に起きた事件とそのことがもたらす地域及び住民への影響の大きさと処理方策について学ぶことによって、自治体における環境行政のあり方と循環型社会への転換について考える。

3. 授業及びフィールドワークの取組内容

産業廃棄物に関する法制度の仕組みと課題について学習するとともに、県内外の産業廃棄物の現状等について調べた。特に、豊島産業廃棄物不法投棄事件を題材に、香川県における産業廃棄物行政に焦点を当てて学習した。法制度については、廃棄物処理法の改正経緯、法制度の課題、香川県の産業廃棄物に関する条例・要綱等を調べた。産業廃棄物の現状等については、国や香川県の環境白書や廃棄物処理計画等を調べた。

フィールドワークは、豊島の産業廃棄物不法投棄現場及び心の資料館の視察、住民との意見交換、徳島県上勝町のゼロ・エミッション、彩事業の視察を行った。

以上の学習を踏まえて、香川県廃棄物対策課とのディスカッションを開催し、産業廃棄物行政に関する施策提言を実施した。

4. 学生アンケートの結果

アンケート項目の5段階評価の平均値は、4.7である。

5. フィールドワーク訪問先の関係者から評価

豊島では、継続的に豊島事件について学習することの意義を評価された。上勝町では、環境問題について関心を持ち、現場で学ぶことの意義を評価された。香川県とのディスカッションでは、産業廃棄物に関する県の法制度について、理論的に緻密に研究していることの意義を評価された。

6. 授業及びフィールドワークで得られた成果及び今後の課題

自らの生活や社会活動から排出されている廃棄物がどのような法制度のもと処理されているか学ぶとともに、その課題について実際に起きた事件とそのことがもたらした地域住民への影響の大きさについて学ぶことによって、環境行政のあり方を考えることができた。また、香川大学で学ぶ学生として、不法投棄事件にとどまらず瀬戸内の島が抱える様々な問題について学び、現場や住民の視点から物事をみる目を養うことができた。そして、法制度、現場での学習を通じて環境への認識を深めるとともに、特に自治体職員を目指す学生にとっては、地方行政のあり方について深い問題意識を持つことができた。



香川県廃棄物対策課とのディスカッション



上勝町のフィールドワーク

実践型地域活性化演習

科目担当教員 村山 卓（地域マネジメント研究科・教授）
鈴木 健大（地域連携戦略室・特命准教授）

フィールドワーク実施状況（概要）

	日 時	参加者数	訪 問 先
第1回	8月23日（日）	1	丸亀駅、丸亀港等
第2回	10月1日（木）	3	高松兵庫町商店街
第3回	10月13日（火）	3	丸亀通町商店街
第4回	10月18日（日）	1	丸亀通町商店街
第5回	10月21日（水）	1	サンポート高松
第6回	12月19日（土）	2	丸亀通町商店街
第7回	12月24日（木）	1	丸亀商工会議所
第8回	1月16日（土）	3	高松兵庫町商店街
第9回	1月17日（日）	2	高松兵庫町商店街
第10回	1月19日（火）	1	高松兵庫町商店街
第11回	1月24日（日）	2	丸亀通町商店街
第12回	1月28日（木）	1	丸亀商工会議所
第13回	2月13日（土）	1	高松兵庫町商店街
第14回	2月27日（土）	1	丸亀通町商店街
第15回	3月1日（火）	2	高松兵庫町商店街
第16回	3月7日（月）	1	高松兵庫町商店街
第17回	3月9日（水）	1	高松兵庫町商店街
参加者合計（延べ人数）		27	

1. 授業目的

授業では、地方都市における商店街の現状をフィールドワークや地元の人々との対話の中から把握し、さらにスマートフォンのBLE（Bluetooth Low Energy）技術を用いて商店街について広くPRし、地方都市における商店街の活性化策について、特にデジタルメディアを利活用した情報発信の視点から課題解決を考察する機会を創出することを目的とする。

2. 授業の到達目標

- ①地方都市における商店街の現状をフィールドワークやヒアリングを通じて把握する。
- ②スマートフォンといったデバイスを活用した情報発信のあり方を考察し、実践する。
- ③スマートフォンの最新技術に触れ、アプリケー

ションができあがるまでの一連の流れを理解する。

3. 授業及びフィールドワークの取組内容

(1) 実施概要

まちアプリ「ひよこかめ」は、スマートフォンの機能を地域活性化に役立てようと考え、香川県高松市の「高松兵庫町商店街」と香川県丸亀市の「丸亀通町商店街」により多くの方々に来街してもらい、まちの魅力を知ってもらおうと、平成27年度香川大学大学院地域マネジメント研究科「実践型地域活性化演習」履修生たちが地域や自治体と連携して制作した。アプリやシステム開発には、株式会社夢現舎の協力を得た。

ビーコン（発信器）によるブルートゥースという近距離通信方法を活用し、商店街やまちなかにビーコン（発信器）を複数設置し、「ひよこかめ」アプ

りをスマートフォンにダウンロードして電波エリア内に入ると、商店街やまちの情報をそれぞれスマートフォン画面で取得することができる。一つのアプリで両商店街に対応している。

「高松兵庫町商店街」では、商店街を歩くと、商店街内に設置したビーコンからの電波を次々にキャッチして、お店の歴史などの紹介、おすすめ商品・メニューなどを得ることができる。また、近隣のおすすめ観光スポットも紹介している。

「丸亀通町商店街」では、商店街のほか、「丸亀城」「丸亀港」「丸亀駅」にもビーコンを設置した。ビーコンからの電波をキャッチして、昔のその近辺の写真を見ることができる。今の風景と昔の風景を見比べながら、まちあるきを楽しむことができるようにした。



アプリ画面(左) リスト表示(中) コンテンツ画面(右)

(2) 主なターゲットとコンテンツ内容

① 高松兵庫町商店街

主な対象：高松兵庫町商店街を通行するビジネスマンや観光客

コンテンツ内容：商店街店舗情報や近隣のおすすめ観光スポット

② 丸亀通町商店街(丸亀城、丸亀港、丸亀駅)

主な対象：丸亀駅利用者や丸亀城・丸亀港を訪れる観光客

コンテンツ内容：丸亀通町商店街・丸亀駅・丸亀城・丸亀港の昔の写真及び商店街店舗情報

(3) 試行(情報発信)期間

平成28年3月4日(金)～3月31日(木)

(4) ビーコン(発信器)の設置数及び設置箇所

- ・「高松兵庫町商店街」：21個
- ・「亀山公園(丸亀城)」：8個
- ・「みなと公園(丸亀港)」：2個
- ・「新堀湛甫親水公園(丸亀港)」：3個
- ・「丸亀市観光協会(丸亀駅)」：2個
- ・「丸亀通町商店街」：25個

計61個



ビーコン(発信器)外観(左)と取付状況(右)

(5) 実施スケジュール

- 6月：プロジェクトガイダンス
- 7～8月：商店街フィールドワーク
- 9月～10月：コンセプトづくり、計画づくり
- 10月～12月：商店街取材、資料収集
- 1月～2月：コンテンツ制作
- 3月：アプリ試行(情報発信)

4. 学生アンケートの結果

学生からは、次のような感想が見られた。

- ・仕事以外の時間でのフィールドワークは時間の確保が困難であったが、仕事上ではできない経験であったと感じている。
- ・社会人同士がチームを組んだため、時間的に難しい部分もあった。



商店街内デジタルサイネージにおけるアプリのPR

5. フィールドワーク訪問先の関係者等からの評価

商店街や利用者からは、次のような感想が見られた。

- ・商店街だけでは思いつかないことができた。(商店街が高齢化しているため)スマートフォンの活用が商店街ではできない。(高松兵庫町商店街)
- ・おもしろかった。若い人を中心に多くの人に興味を持ってもらえるとよい。(丸亀通町商店街)
- ・セールなどタイムリーなお得情報があればよいと思います。(利用者)
- ・兵庫町だけでなく高松中央商店街全体が対応していたら良いと思います。(利用者)

6. 授業及びフィールドワークで得られた成果及び今後の課題

今回のFW型授業の機会を得て、学生は、商店街が置かれている現状を取材の中で把握できただけでなく、それらをふまえて情報発信のあり方(ターゲット、手段、視点、内容等)について考察を深め、実践を通じて学ぶことができた。さらに、スマートフォンの最新の技術についても学ぶことができた。

授業を通じて、まちなかに数十個単位でビーコン(発信器)を設置し、まちぐるみで新しい情報発信の試みに取り組むという、全国でも稀有な試みを行うことができた。アプリケーションを事前にダウンロードしておく作業が必要であるが、情報を相手に「プッシュ式」で送ることができる、身につけているスマートフォンを活用できる、といった点に特徴があり、今後、商店街だけでなく、美術や観光など多方面で応用できる可能性があると考えられる。

一方、利用についての事前周知やコンテンツ管理などが課題として挙げられる。

生涯学習計画論A

科目担当教員 山本 珠美 (生涯学習教育研究センター・准教授)

フィールドワーク実施状況 (概要)

	日 時	参加者数	訪 問 先
第1回	平成27年6月10日 (水)	学生23名	岡山県生涯学習センター
第2回	平成27年7月上旬～8月下旬 (個人で実施のため、日時は一定しない)	学生23名	高松市教育委員会事務局生涯学習課、栗林コミュニティセンター、築地コミュニティセンター、新塩屋町コミュニティセンター、丸亀市市民活動推進課、三豊市教育委員会事務局生涯学習課、その他(連携自治体以外に、坂出市教委、多度津町教委、倉敷市教委、松江市教委、鳥取県教委、徳島県教委、阿南市教委を訪問)
(第3回)	(平成27年7月28日 (火))	(学生23名)	四国地区社会教育主事講習の講習生との交流(講習会場である香川大学生涯学習教育研究センターにて実施)
参加者合計 (延べ人数)		学生46名 (学生69名)	※現地訪問のみカウントなら46名。

1. 授業の目的

本授業は社会教育主事資格取得に係る科目である。

社会教育法に基づく「社会教育主事」の資格は、①大学で必要単位を修得して取得する方法と、②行政職員や教員が大学等で実施される社会教育主事講習を受講して取得する方法、の二つがある。

平成27年度は7～8月に計19日間、生涯学習教育研究センターで四国地区社会教育主事講習(文部科学省委託事業)が実施され、県内各市町(一部他県)の生涯学習推進行政の担当者が香川大学に集結した。講習受講生と社会教育主事コースの学生は、ともに社会教育主事の資格取得を目的とする点で志を同じくしている。社会教育主事に関して、(資格は未取得ながら現場経験豊富な)現職の持つ現場の知と、学生たちとの交流を図りながら、生涯学習計画の在り方について検討すること、あわせて、学生の視点を活かした事業提案を行うことが本授業の目的である。

2. 授業の到達目標

- ①生涯学習計画の基本理念について、説明することができる。
- ②担当市町の生涯学習計画の実例を分析し、その課題について説明することができる。

3. 授業及びフィールドワークの取組内容

全15回の授業の前半7回を[理論編]、後半8回を[実践編]として行った。

[理論編]では、教科書(鈴木眞理・山本珠美・熊谷慎之輔編『社会教育計画の基礎[新版]』(学文社、2012年3月))を用いて、生涯学習計画策定の基本理念を学んだ。授業は講義形式で行った。

[実践編]では、まず近隣の先進的事例である岡山県の生涯学習推進体制について学ぶため、拠点である岡山県生涯学習センターを訪問した。その後6月に社会教育主事講習の受講者が確定した後、学生の担当自治体(出身自治体を優先)を決め、それぞれの自治体の生涯学習計画について事前学習および訪問学習を行った。授業は個人およびグループ学習で行った。その成果についてはレポートにまとめ(現状と課題、それらを踏まえた事業提案)、社会教育主事講習の昼食時間の一部を割いて自治体担当者との意見交換を実施した。

なお、学生の担当自治体決定にあたっては、COC事業の連携自治体と、社会教育主事講習受講生の勤務する自治体とは必ずしも一致しないため、連携自治体以外を担当した学生もいる。夏休みの帰省中に遠方にある自分の出身県の社会教育主事にインタビューし、生涯学習計画の分析・検討をすることも可としたため、県外の取組を調査した者もいる。

事例研究を行った自治体は、以下の通りである。

【COC連携自治体】

高松市教育委員会事務局生涯学習課、栗林コミュニティセンター、築地コミュニティセンター、新塩屋町コミュニティセンター、丸亀市市民活動推進課、三豊市教育委員会事務局生涯学習課

【連携自治体以外】

坂出市教委、多度津町教委、阿南市教委、徳島県教委（以上、社会教育主事講習受講生に取材）
倉敷市教委、松江市教委、鳥取県教委（以上、夏休み帰省中、出身自治体に取材）

4. 学生アンケートの結果

授業アンケートの結果は、①自学自習の促進度4.48、②授業への取組4.59、③到達目標の達成に向けた授業4.35、③到達目標の達成度と満足度4.33と、おおむね高評価である。

学生の最終レポートによると、個別のインタビュー訪問は大変緊張したが、自治体職員の方がとても親切に対応して下さり、社会教育主事の実際の仕事内容をよく理解することができた、また、自分の仕事に対する熱意・誇りを感じて公務員イメージが変わった、想像以上に大変、市民とのつながりが大事、等々の意見が見られた。

5. フィールドワーク訪問先の関係者から評価

公民館やコミュニティセンターなどの社会教育の現場では、大学生のような若い世代の利用が極めて限られるという問題を抱えている。しかし、学生たちが将来社会教育主事となるにせよ、一市民として生きていくにせよ、これらの施設は生活上の大きな助けとなるため、理解を深めることが重要である。施設の管理を行う教育委員会事務局、あるいは施設そのものの現状と課題を若い世代に直接伝えられたことは大いに意義あることであり、また大学生との意見交換は行政職員にとっても新たな気づきを促すものであった。

6. 授業及びフィールドワークで得られた成果及び今後の課題

以前より懸案とされていた社会教育主事講習受講者（行政職員等）と社会教育主事コース（大学生）との交流を、不十分ながらも実施できたことは、本事業の成果と言えよう。各自治体の生涯学習計画の

事例研究を、単に紙ベースで行うだけではなく、現地訪問によって担当者に直接インタビューしたことは学生にとって貴重な体験になったと思われる。ただし、学生視点での事業提案については、残念ながら実施に耐えられるレベルとは言い難かった。

なお、担当自治体を決める際、出身自治体を優先したため、本授業終了後に当該自治体の事業（成人式実行委員会等）に個別に関わることとなった学生が複数出現した。生涯学習に係る自治体現場では、子どもや高齢者とのつながりはあるものの、2～30代の若い世代とのつながりを持って苦勞している所が多い。このような副産物も、本事業の成果の一部としてあげて良いと思われる。



丸亀市生涯学習センター（市民活動推進課）でのヒアリング

希少糖

研究

新産業創出プログラム

科目担当教員 徳田 雅明 (副学長 医学部・教授)

連携自治体 三木町

1. 背景と目的

新産業の創出につながる取り組みを希少糖の研究シーズとして膨らませることにより展開する。香川県の新産業成長戦略とリンクすることで成果を挙げることが目指す。

2. 実施概要

(1) 希少糖のうちD-プシコースの地元企業などへ十分に供給できるネットワークを作る。

D-プシコースの血糖値上昇抑制効果の特定保健用食品の成立に協力するとともに、D-プシコースを用いて行う応用開発に対応する。またD-プシコースのみならずD-プシコース以外の希少糖を用い将来の応用化に繋がる基礎的な研究を展開する。以上を達成するため、以下のような活動を行った。

【実施内容】

・D-プシコースの特定保健用食品としての成立のために、安全性に関わる研究を展開し、データを整理して消費者庁において審査を何度か受けた。希少糖は新世代の糖としての位置付けをすべきと考えられることを強調し、特定保健用食品の成立に向かっている。

新世代の糖「希少糖」

世代	糖の例	性質 (□良い点、■悪い点)
第一世代	砂糖、異性化糖、D-グルコース、D-フラクトースなど	□カロリー源 □砂糖様の味質 ■過剰摂取により生活習慣病
第二世代	高甘味度甘味料類 アスパルテーム、スクラロース、サッカリンなど	□カロリーオフ ■砂糖の甘さと異質 ■糖尿病や肥満を招来する報告も。一部で発癌性の指摘も。
第三世代	糖アルコール類 キシリトール、エリスリトール、ソルビトールなど	□カロリーオフ ■後を引く甘さがある ■便が緩くなるなどの影響
第四世代	天然低カロリー糖質 希少糖	□カロリーオフ □砂糖様の味質 □機能性がある □安全で悪い影響がない

- ・D-プシコースの大量生産に関しては、地元企業などへの供給に向けて関連企業において国内外で進んだ。特にアメリカにおいてすでにアストレアという商品名で販売を開始した。
- ・D-プシコースを用いた応用開発として抗肥満効果につながる研究を動物試験により展開し論文を出

した。

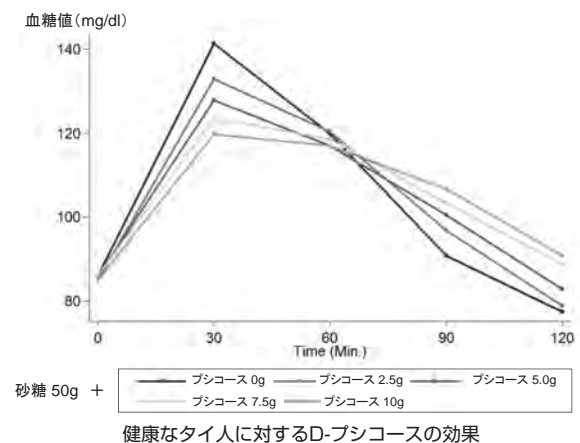
- ・D-プシコース以外の糖として、D-アロースの抗酸化作用や抗癌作用、D-タガトースの抗う蝕作用に関する研究が進んだ。

D-タガトースが虫歯菌に有効であることを証明し論文でできたことのみならず、D-タガトースを用いたガムを作成し、それをボランティアに噛んでもらうことにより、唾液中の虫歯菌を減少させることを示すこともできた。



- ・チェンマイ大学 (タイ王国)、ブルネイ・ダルサラーム大学 (ブルネイ国)、フロリダ大学 (アメリカ合衆国) との国際的な研究が進んだ。

その結果、D-プシコースは日本人のみならず、タイ人やブルネイ人においても有効であることを証明することができた。今後香川から世界へという展開を可能にする成果となった。



(2) 希少糖に関する啓発活動や正確な情報の地域住民や地元企業への提供を促進する。

香川県、希少糖普及協会やかがわ産業支援財団と協力して、D-プシコースおよび希少糖含有シロップの正確な情報発信を行っていく。セミナーや展示会などの開催に協力する。企業からの問い合わせや相談に対応する。また栄養士とタイアップして食への積極的活用を図る。

以上を達成するため、以下のような活動を行った。

【実施内容】

- ・香川県、希少糖普及協会やかがわ産業支援財団と協力し、数多くの講演や取材、本の出版、セミナーや展示会を実施し、D-プシコースおよび希少糖含有シロップの正確な情報発信に努めた。



香川短期大学のブース



試食風景



- ・地元企業の要請による相談を実施した。食品企業を中心に機能性に関する指導を実施した。平成28年1月30日には県下のロータリークラブの勉強会にも講師として出向き、希少糖の広い応用可能性について講義を行った。
- ・病院栄養士などと相談をして、希少糖含有シロップの病院食への応用を進めた。

(3) 地元企業等との共同研究を展開する。

希少糖の応用に関わる共同研究を積極的に行う。希少糖含有シロップの応用として、健康に優しい食品への応用やペットフードなどを引き続き展開する。

以上を達成するため、以下のような活動を行った。

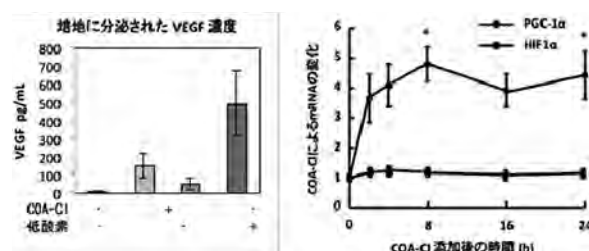
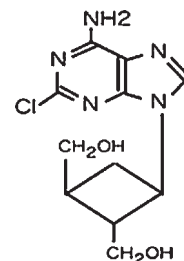
【実施内容】

- ・希少糖D-プシコースの持つ、保湿性やアンチエイジング効果を化粧品に活用する共同研究を企業と

行っている。

- ・D-プシコースのペットフードへの応用を目指しビーグル犬を用いて、副作用や機能性に関する研究を実施した。その結果、D-プシコースはキシリトールのように犬においてインスリン分泌を促進して低血糖を起こすことがないこと、また4g/kgという大量摂取においても目立った副作用を生じないことが明らかになった。

- ・創薬シーズであるコアクロルの、血管内皮細胞HUVECにおける作用点の解明のため、生体由来血管新生因子であるS1P (sphingosine 1-phosphate) に注目し、その受容体との関連性を検討した。S1P受容体のひとつS1P1の選択的阻害剤 W146やS1P1とS1P3の両者の阻害剤 VPC23019は、血管内皮細胞HUVECにおいてコアクロルによるERK1/2の活性化や管腔形成の亢進を阻害したのでS1P1受容体が重要であることが明らかとなった。血管の周辺細胞である線維芽細胞においては生体内の血管新生促進因子であるVEGFの分泌を促すことが明らかになった(下図左)。コアクロルによる血管新生促進作用は、血管細胞と周辺細胞の両方に対する効果によるものと考えられた。通常、VEGFは細胞が低酸素刺激を受けることにより、HIF1 α というタンパク質を介して増加する。しかし、コアクロルによるVEGFの増加はHIF1 α ではなくPGC1 α という別のタンパク質を介することが明らかになった(下図右)。PGC1 α の増加はミトコンドリアの活性化につながり、コアクロルは治療的血管新生だけでなく、ミトコンドリアが関与する疾病への応用も期待できることが明らかとなった。

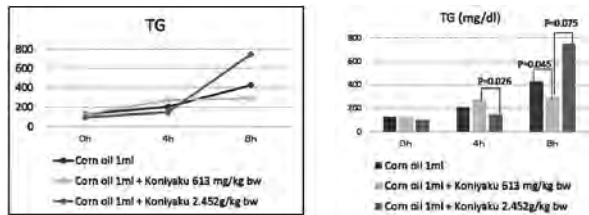


- ・コンニャク(グルコマンナン)と希少糖との組み合わせで、より効果を高める食品の開発研究を地元企業と実施した。また、脂質改善作用があるかについて検討を実施した。商品開発についても、数種類の希少糖含有商品の開発を手掛けた。

脂質の過剰摂取は、高脂血症を引き起こし、肥満や動脈硬化の原因となる。また糖尿病との関連もある。食事から過剰に摂取される脂質を抑え、適切な量を摂ることは重要である。D-プシコースおよび

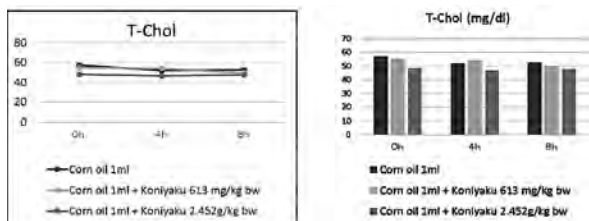
コンニャク成分（グルコマンナン）を食事と同時に摂取することにより、余分な脂肪摂取を抑えることができるかどうかを、ラットにおいて検証し以下の結果を得た。

- ① コーンオイルからの脂質の摂取はゆっくりと起こり、6～8時間まで緩やかに続くことが示された。
- ② 4時間値において、2.45g/kgを用いた際に有意に中性脂肪値の減少が認められた。8時間値においては、613mg/kgの方が中性脂肪値を減少させた。2.45g/kgでは却って高くなる傾向が認められた。



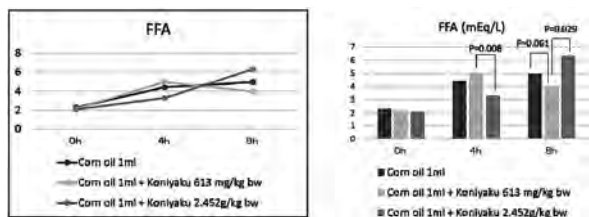
血中中性脂肪への影響

- ③ コレステロール値はコンニャク/D-プシコース飲料の影響では、全体を通じて、どの量においても大きな差は認められなかった。



血中コレステロールへの影響

- ④ 遊離脂肪酸値は、4時間値において、613mg/kgを用いた際に有意に減少が認められた。8時間値においては、613mg/kgの方が減少させた。2.45g/kgでは613mg/kgより却って高くなる傾向が認められた。



血中遊離脂肪酸への影響

- ⑤ これらの結果を総合すると、613mg/kgのコンニャク/D-プシコース飲料を用いることで、一定の脂質上昇を抑える働きが期待できると判断された。

3. 得られた成果

- (1) 希少糖のうちD-プシコースの地元企業などへ十分に供給できるネットワークを作る。
D-プシコースの血糖値上昇抑制効果の特定保健

用食品の成立に協力するとともに、D-プシコースを用いて行う応用開発に対応する。またD-プシコースのみならずD-プシコース以外の希少糖を用いた将来の応用化に繋がる基礎的な研究を展開する。

以上の観点において、次のような成果を挙げた。

- ・D-プシコースの特定保健用食品としての成立のために必要な安全性に関わる評価をほぼクリアできた。近い将来特定保健用食品として市場に出せる目途がたった。
- ・D-プシコースの供給体制がほぼ確立した。
- ・D-プシコースの抗肥満効果に関するエビデンスを得ることができ、応用につながる大きな可能性となった。
- ・学部学生や大学院生が希少糖の研究に従事することで、科学的な好奇心を高めることができた。
- ・D-プシコース以外の希少糖の応用につながる基礎研究が進んだ。
- ・D-プシコースの国際展開の基盤ができた。国際化において、学部学生や大学院生が参画し、交流を進めることができた。

(2) 希少糖に関する啓発活動や正確な情報の地域住民や地元企業への提供を促進する。

香川県、希少糖普及協会やかがわ産業支援財団と協力して、D-プシコースおよび希少糖含有シロップの正確な情報発信を行っていく。セミナーや展示会などの開催に協力する。企業からの問い合わせや相談に対応する。また栄養士とタイアップして食への積極的活用を図る。以上の観点において、次のような成果を挙げた。

- ・希少糖を用いた数多くの食品の開発に協力した。既に300社以上が希少糖含有シロップを用いて、1,500種類以上のスイーツやドリンクを開発している。
- ・地元の洋菓子や和菓子などの企業において、希少糖含有シロップの活用についての知識が深まった。学部学生が希少糖マップを作成し、県内への普及状況を把握できるようにした。
- ・幾つかの病院や施設において希少糖の活用が始まった。今後さらに多くの施設等での使用を勧める基礎作りとなった。

(3) 地元企業等との共同研究を展開する。

希少糖の応用に関わる共同研究を積極的に行う。希少糖含有シロップの応用として、健康に優しい食品への応用やペットフードなどを引き続き展開する。

以上の観点において、次のような成果を挙げた。

- ・ラットにおいて、コーンオイルと共にコンニャク飲料であるスムージーと希少糖D-プシコースを併用することにより、中性脂肪や遊離脂肪酸を下

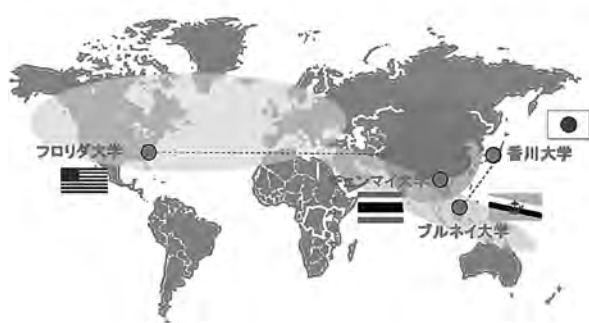
げる働きがあることを示すことができた。今後の脂質改善作用の証明に繋がるデータとなる。動物実験においては、学部学生や大学院生が関与し企業の開発研究のあり方を学ぶことができた。

- ・D-プシコースの皮膚への効果についての特許出願を実施した。また共同研究企業において、D-プシコースを成分として1%含む化粧品の開発が進んだ。
- ・D-プシコースのペットフードとして最も大切な副作用については問題がないことが判明し学術論文として受理されたので、実際の応用が可能であることが判った。また機能性においても、糖代謝や脂質代謝への効果が認められた。
- ・コアクロルの血管新生に関する作用点が解明された。再生医療分野への応用も考え得る成果となった。すでに特許を出しており実施を望む企業との交渉を始めている。今後は神経細胞における作用点も明らかにする必要がある。ラットやラットの細胞を用いて検討してきたが、これに加えてヒトの細胞でもその作用を明らかにしていく。

4. 今後の課題

(1) 希少糖のうちD-プシコースの地元企業などへ十分に供給できるネットワークを作る。

D-プシコースの血糖値上昇抑制効果の特定保健用食品の成立に協力するとともに、D-プシコースを用いて行う応用開発に対応する。応用展開については、日本国のみならず世界への展開を目指す。



D-プシコースの世界展開

またD-プシコースのみならずD-プシコース以外の希少糖を用い将来の応用化に繋がる基礎的な研究を展開する。特にD-アロースの抗酸化作用を利用した特定保健用食品の開発や、D-タガトースの抗う蝕作用の商品化への活用を目指す。

(2) 希少糖に関する啓発活動や正確な情報の地域住民や地元企業への提供を促進する。

香川県、希少糖普及協会やかがわ産業支援財団と協力して、D-プシコースおよび希少糖含有シロップの正確な情報発信を行っていく。セミナーや展示

会などの開催に協力する。企業からの問い合わせや相談に対応する。

また希少糖含有シロップの積極的な展開を目指すために、栄養士とタイアップして食への積極的活用を図る。県内の小中学校への普及を図り、給食への使用を促進する。

(3) 地元企業等との共同研究を展開する。

希少糖の応用に関わる共同研究を積極的に行う。希少糖含有シロップの応用として、健康に優しい食品への応用やペットフードなどを引き続き展開する。

コアクロルの応用研究を継続する。血管新生に関する作用点だけでなく、神経細胞における作用点も明らかにする必要がある。神経系への作用はラットやラットの細胞を用いて検討してきたが、これに加えてヒトの細胞でもその作用を明らかにしていくとともに、再生医療分野への応用も考える。

医療福祉関連事業推進希少糖関連事業

科目担当教員 徳田 雅明 (副学長 医学部・教授)

連携自治体 三木町

1. 背景と目的

三木町や香川県の支援を受けて、医療・福祉関連事業を実施し、町民・県民の生活改善を図る。特に児童の間で進みつつある糖尿や肥満の改善を図り、またこれに関連する事業展開を行う。

2. 実施概要

(1) 啓発活動や運動指導の展開を行う。

【計画】

毎年蓄積している糖尿病や肥満に関するサーベイを元にして住民の健康増進のためのプログラムを企画し、香川県、三木町と協力して啓発活動や運動指導を積極展開する。

幅広い年齢層の男女を対象にして、サテライトオフィスなどでの講演や運動実演、職場や地域での出前授業、長寿大学などでの講座開催、などを盛り込み、住民の生活習慣病予防への意識を高める。

小中学校へ出かけて行って積極的に指導する。

以上を達成するため、以下のような活動を行った。

【実施内容】

- ・香川長寿大学：平成27年5月12日（高松校192名、徳田）、6月11日（坂出校102名、徳田）
- ・香川大学サテライトオフィスセミナー（サンサン館みき）「高齢者の健康」（平成27年9月7日、宮武、倉藤、参加者24名）



- ・三木町立氷上小学校「生活習慣病と体を使った遊び」（平成27年9月10日、宮武、倉藤、参加者約70名）
- ・香川大学サテライトオフィスセミナー（サンサン館みき）「食事と健康」（平成27年9月14日、宮武、土海（大学院生）、倉藤、参加者27名）
- ・香川大学三木サテライトオフィスセミナー1周年記念イベント（サンサン館みき）「生活習慣病について」、「三木町での学童検診の意義」、「生活習慣病と希少糖」、「簡単健康体操」（平成27年9月27日、石田名誉教授、柴崎医師（松原病院）、徳田、宮武、倉藤、ぬいぐるみ病院医学部学生有志、参加者約100名）
- ・香川大学サテライトオフィスセミナー（サンサン館みき）「運動と健康」（平成27年9月28日、宮武、



倉藤、参加者26名)

- ・「糖尿病の話」（三木町農村環境改善センター）（平成28年2月1日、宮武、倉藤、参加者22名）



- ・「トイレで分かるあなたの健康」（三木町農村環境改善センター）（平成28年2月8日、宮武、倉藤、参加者28名）
- ・「トイレでわかるあなたの病気」（三木町長楽寺集会場）（平成28年3月3日、宮武、倉藤、参加者20名）
- ・「トイレで分かる健康～尿検査・便検査～」（三木



町農村環境改善センター) (平成28年3月18日、宮武、倉藤、参加者66名)

(2) 健康に優しい食品開発を行う。

【計画】

希少糖はもちろんのこと、それ以外で健康に優しい有効成分を用いて「生活習慣病に予防効果のある食品や献立の開発」を行う。例えば学校の栄養士との協力で小学校での給食のメニューを開発するほか、お勧めメニューなどの発信を積極的に展開する。以上を達成するため、以下のような活動を行った。

【実施内容】

- ・三木町内の小・中学校では、希少糖含有シロップを給食のメニューに定期的に取り入れている。三木町の保健師や栄養士との協力体制を作っている(宮武、徳田)。
- ・希少糖を産学官連携で実施している企業等と連携をして、希少糖含有シロップを用いた健康レシピを多数紹介した(徳田)。

<http://www.pref.kagawa.lg.jp/kisyoto/recipe/index.html>

<http://www.matsutani.co.jp/raesugar/index.html#page=11>

<http://raesugar.co.jp/recipe/>

- ・地元企業の健康食品への展開に協力した。例えば希少糖およびコンニャクが配合された食品やスイーツの開発などを指導した。

<http://www.haisky.co.jp/media/>



(3) 三木町の健康・福祉施策へ参加協力する。

【計画】

三木町の要請を受けて、地域資源を活用しながら医療・福祉の向上に資する方策についての提言や協力を、医学部や農学部学生もそうした活動に関与して行う。例えば百眼百考委員会への参加や、三木町まんで願への参加などを行う。

以上を達成するため、以下のような活動を行った。

【実施内容】

- ・三木町百眼百考会議に医学部生および農学部生各4名ずつが参加して、健康・福祉施策を含む三木町政に対して意見を述べた。
- ・獅子たちの里・三木まんで願秋大祭(平成27年10月24日)において、医学部生が希少糖の展示と紹介、およびぬいぐるみ病院の活動を行い、多数の町民への健康増進を訴えた。また農学部生も参加し展示等を行った。(医学部生・農学部生約25名参加)

<http://www.town.miki.lg.jp/life/dtl.php?hdnKey=2703>

- ・三木町総合戦略策定委員会委員として活動(徳田、宮武)
- ・まんで願いきいきタウン構想策定委員会委員とし

て活動(徳田、宮武)

- ・三木まんで願健康プロジェクト2016に参加(宮武)
- ・木田郡医師会の松原病院(松原奎一郎院長)との連携で、小学生4年生、中学2年生の採血を実施し、問題のある児童をピックアップするとともに、生活指導を行った。また特に中学2年生については、検査項目を増やして、解析を行い、より詳細な原因の解明を目指している。(徳田、宮武)部生各4名ずつが参加して、健康・福祉施策を含む三木町政に対して意見を述べた。
- ・獅子たちの里・三木まんで願秋大祭(平成27年10月24日)において、医学部生が希少糖の展示と紹介、およびぬいぐるみ病院の活動を行い、多数の町民への健康増進を訴えた。また農学部生も参加し展示等を行った。(医学部生・農学部生約25名参加)

<http://www.town.miki.lg.jp/life/dtl.php?hdnKey=2703>

- ・三木町総合戦略策定委員会委員として活動(徳田、宮武)



徳田および宮武は、三木町総合戦略の策定委員として参加した。

三木町の総合戦略作成に協力し、右のような「三木町まんで願大作戦」を完成した。

- ・まんで願いきいきタウン構想策定委員会委員として活動(徳田、宮武)を実施した。
- ・三木まんで願健康プロジェクト2016に参加(宮武)
- ・木田郡医師会の松原病院(松原奎一郎院長)との連携で、小学生4年生、中学2年生の採血を実施し、問題のある児童をピックアップするとともに、生活指導を行った。また特に中学2年生については、検査項目を増やして、解析を行い、より詳細な原因の解明を目指している。(徳田、宮武)



3. 得られた成果

(1) 啓発活動や運動指導の展開を行う。

【計画】

- ・毎年蓄積している糖尿病や肥満に関するサーベいを元にして住民の健康増進のためのプログラムを企画し、香川県、三木町と協力して啓発活動や運動指導を積極展開する。
 - ・幅広い年齢層の男女を対象にして、サテライトオフィスなどでの講演や運動実演、職場や地域での出前授業、長寿大学などでの講座開催、などを盛り込み、住民の生活習慣病予防への意識を高める。
 - ・小中学校へ出かけて行って積極的に指導する。
- 以上の観点において、次のような成果を挙げた。

【成果】

- ・左記の講演や講座などの活動により、三木町のみならず、香川県下の幅広い年齢の男女に対して、生活習慣病の予防や、健康な生活を送るための注意や工夫についての情報伝達ができた。
- ・香川大学サテライトオフィスセミナーとして計4回企画、実施し三木町民約200名弱の参加を得た。また、大学院生、ぬいぐるみ病院学生有志の参加も得た。
- ・三木町教育委員会、三木町内の学校の先生と協力して、平成27年度は三木町立氷上小学校体育館で、話と体を使った遊びを紹介し、生活習慣の大切さを伝えた。
- ・三木町農村環境改善センターで計3回、糖尿病や尿検査・便検査をテーマに講座を企画実施した。
- ・地域の集会場へ出向く講座として、長楽寺集会場で尿検査・便検査を企画実施した。
- ・現在、平成28年度はサンサン館みきでの講座を8回、地域の集会場へ出向いての講座、小学生対象の運動支援教室を企画している。

(2) 健康に優しい食品開発を行う。

【計画】

希少糖はもちろんのこと、それ以外で健康に優しい有効成分を用いて「生活習慣病に予防効果のある食品や献立の開発」を行う。例えば学校の栄養士との協力で小学校での給食のメニューを開発するほか、お勧めメニューなどの発信を積極的に展開する。

以上の観点において、次のような成果を挙げた。

【成果】

- ・三木町においては、小中学校において希少糖含有シロップをメニューに用いることが定着してきた。この実績を受けて、平成28年度には香川県全県下の小中学校に拡げる計画を立てている。
- ・希少糖のみならず他の有効成分を用いて生活習慣病の予防に役立つ食品や献立の開発に寄与することができた。医学部の



学生もメニューの考案などに関与した。

(3) 三木町の健康・福祉施策へ参加協力する。

【成果】

三木町の要請を受けて、地域資源を活用しながら医療・福祉の向上に資する方策についての提言や協力を、医学部や農学部の学生もそうした活動に関与して行う。例えば百眼百考委員会への参加や、三木町まんで願への参加などを行う。

以上の観点において、次のような成果を挙げた。

- ・地域創生の一環として三木町が取り組む計画策定において委員として参画し、積極的に意見を述べた。三木町総合戦略の策定に貢献し、提案の幾つかが取り込まれた。総合戦略は下記に掲載されている。

<http://www.town.miki.lg.jp/life/dtl.php?hdnKey=2698>

- ・三木町の健康計画の取りまとめに際し、基本的な統計、解析、解釈についての保健福祉担当者との協議、支援を行った。平成28年度以降の施策にも活かされる。
- ・農学部と医学部の学生が、三木町の施策（特に教育および健康・福祉）に対し、百眼百考会議において積極的に意見を言う機会を得た。その提言は、三木町総合戦略にも活かされた。また獅子たちの里 三木まんで願秋大祭においては、展示やぬいぐるみ病院の活動に参加し、町民との交流を行った。

ぬいぐるみ病院は香川大学夢プロジェクトの支援を受けて実施し、保育園、小児病棟、地域の祭りなど、子どもが集まる場で模擬診察や保健教育を実施することにより、子どもたちから医療に対する恐怖心や不安感を取り除き、積極的に治療、予防に取り組む気持ちを持ってもらい、子どもたちに体の仕組みについて興味を持ってもらうことを目的として実施している。

<http://www.kagawa-u.ac.jp/navi/dream/17310/>



- ・地域の病院との連携で、学童・児童における生活習慣病の問題を掘り起こし、予防するための取り組みを強化した。この解析に大学院生が関与した。検診のデータを松原病院の柴崎医師が分析した結果を、医学部の我々と検討した。またこれまでのCOC（平成25年度開始）事業での貢献の効果を比較検討するために、過去4年間のデータを分析した。

過去4年間ほぼ90%以上の小学4年生と中学1年生が検診に参加している。その中での有所見率は年次的な凹凸はあるものの、減少傾向にある。これまでの松原病院をはじめとする、木田郡医師会の指導の効果がでてきていると評価できる。また、COC事業の関与も効果の一端を担っていると考えてい

小学4年生	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
採血者数 (人)	252	270	250	268
受診率 (%)	97.7	95.7	100	98.5
有所見者数 (人)	110	85	103	83
有所見者率 (%)	43.7	31.5	41.2	31.0

中学1年生	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
採血者数 (人)	247	271	299	235
受診率 (%)	92.5	96.4	97.4	90.0
有所見者数 (人)	57	41	58	44
有所見者率 (%)	23.0	15.0	19.4	18.7

る。なお現在平成27年度の分析を行っている。

これまで実施している生活指導や必要に応じた治療については、松原病院を中心に実施している。

それを一歩深めるために、平成27年度採血をした中学一年生の健診時において、有所見学童の中で特に問題のある学童8名をピックアップし、家族の了承を得て、さらに採血を実施し、一般検査では行えない検査項目の測定を行なった。追加で測定するのは、Cペプチドとインスリンとした。そしてその結果によりCPIとHOMAを計算した。

学生	Insulin (mU/ml)	C-peptide (ng/ml)	血糖 (mg/dL)	CPI	HOMA-R
S.M.	2.2	0.8	95	0.84	0.52
T.N.	5.1	1.2	90	1.33	1.13
T.H.	8	1.7	96	1.77	1.89
M.T.	2.6	0.9	92	0.98	0.59
M.H.	2.5	0.8	85	0.94	0.52
K.T.	6.9	1	95	1.05	1.61
F.R.	1.1	0.7	80	0.88	0.22

参考1) CPI (Cペプチドインデックス)

空腹時CPR (ng/ml) × 100 / 空腹時血糖値 (mg/dl) により計算した。1.2以上は正常。0.8以下でインスリン分泌低下を示し、1.2以上の場合は食事や経口薬治療、0.8未満の場合はインスリン療法を選択すべきと言われている。

参考2) HOMA-R

インスリン抵抗性の簡単な指標が、HOMA-Rと考えられる。

HOMA-R = IRI空腹時インスリン値 (μU/ml) × 血糖値 ÷ 405 で求められ、1.6以下は正常、2.5以上の場合にはインスリン抵抗性があると考えられる。ただし、インスリン治療中の患者には用いない。HOMA-Rは、朝食抜きの空腹時の空腹時の血糖値が140以下の人が対象となる。

追加検査の結果を見ると、HOMAが高く(黄色)、CPIも高い(青い)1名は、まさに生活習慣の改善が今重要であると想定されます。ただし、HOMAも低く(青色)、CPIも低い(黄色)、つまり、インスリン抵抗性は現時点ではなく、CPIが低い生徒4名は、将来のDMのリスクが高いかもしれないと判断できるため、今後の指導が必要でと考えられた。

2項目の追加検査をすることで、生活習慣病のリスクが高いかどうかの可能性について判断の参考にできることが判った。来年度についてはさらに数を増やして解析を進めていくことを目的としている。

4. 今後の課題

(1) 啓発活動や運動指導の展開を行う。

基本的に次年度においても活動を継続する。

住民の健康増進のためのプログラムを企画し、香川県、三木町と協力して啓発活動や運動指導を積極

展開する。幅広い年齢層の男女を対象にして、サテライトオフィスなどでの講演や運動実演、職場や地域での出前授業、長寿大学などでの講座開催、などを盛り込み、住民の生活習慣病予防への意識を高める。

また小中学校へ出かけて行って積極的に指導する教室を設ける。

(2) 健康に優しい食品開発を行う。

希少糖はもちろんのこと、それ以外で健康に優し有効成分を用いて「生活習慣病に予防効果のある食品や献立の開発」を行う。学校の栄養士との協力で小学校での給食のメニュー開発や、希少糖普及協会と協力して、県内の全ての小中学校に普及を試みる予定である。また希少糖入りのお勧めメニューなどを考える。

(3) 三木町の健康・福祉施策へ参加協力する。

三木町の要請を受けて、地域資源を活用しながら医療・福祉の向上に資する方策についての提言や協力を、行う。三木町の総合戦略「三木町まんて願大作戦」に従って、徐々に支援策を展開する。

平成27年度に実施した有所見学童のピックアップと生活指導、さらにCペプチドとインスリンを測定してCPIとHOMA-Rを算定することを継続して実施する。

源内塾

研究

ものづくり人材創出拠点形成

科目担当教員 高尾 英邦 (工学部・教授)

連携自治体 香川県

1. 背景と目的

地域再生に向けた新産業の創設に向けて、その核となる技術開発支援と、学生・社会人が協働する発展型の「ものづくり人材創出拠点」を形成するための新しい取組について、その仕組みと組織的な整備を進める。特に、工業分野では先端的のものづくりに必要な専門知識の高度化が年々進んでおり、全国的な修士進学率が向上している。その理由として、大手企業では修士卒採用率が学部卒採用率を大きく上回る状況となっており、研究開発職を志向する学生にとっては、修士進学が不可欠との考え方が定着してきたためと考えられる。よって、工業（工学）分野においては大学院教育の重要性が年々高まる状況であり、本事業における「ものづくり人材創出拠点形成」についても、大学院工学研究科での教育と実践経験を重視し、大学の講義ベースとして正式なカリキュラムで実施するものである。

上記事業を体系的講義として学生教育に組み入れるために、工学研究科共通科目として「香川地域ものづくり概論」を設立し、大学と地域企業の交流と相互理解を深める。同時に、地域企業が大学の知識と研究能力を活用したより強い製品作りのための研究を実施する機会を設けることが本事業の目的である。

2. 実施概要

地域再生に向けた新産業の創設に向けて、長期的な基盤となるのは人材の育成である。地域企業の自助努力は当然であるが、地域が持つ強みやネットワークによる互助的な仕組みも活用することで、より迅速かつ強靱な地域の経済成長力・産業創出力が育てられる。香川大学では、その目標に向けた核となる事業として、大学・産業間連携による技術開発支援のしくみづくりと、学生・社会人が協働する発展型の「ものづくり人材創出拠点」を形成する仕組みと組織の整備を進めてきた。COC事業においては、この取り組みを具体的に実現すべく、地域もの

づくりへの理解を深めて実践的に参加する講義科目「香川地域ものづくり概論」を新規に開講した。これは工学研究科（修士課程）の共通科目である。学生の地元就職指向を強める目的で、上記科目と連動して、香川地域の製造業企業（ものづくり企業）と本学大学院生が相互に理解し、交流できる機会を創出する。

3. 得られた成果

平成27年度は「香川地域ものづくり概論」を正式に開講した初年度である。受講した学生は知能機械システム工学専攻から7名と、電子・情報工学専攻から4名の計11名であった。カリキュラムである座学と企業訪問、ならびに課題研究を実施し、それぞれミニレポートを提出して修了要件単位の2単位を正式に認定した。「香川地域ものづくり概論」の実施にあたり、本事業への参画企業を源内ものづくり塾への参加企業に協力を要請し、そのなかから対象となる4社を選出した。

本年度の参画企業は「アオイ電子（株）」・「高松帝酸（株）」・「四国計測工業（株）」・「東洋テックス（株）」の4社から協力が得られた。各企業からの企業紹介と学生募集の講演会を開催し、それぞれの学生の希望に基づいて企業訪問先と課題研究の実施先を決定した。企業業務に関わる内容もあるため具体的な課題研究の内容については割愛するが、本講義の受講を通じて地域ものづくり企業に対して理解と



アオイ電子（株） 本社・高松工場



東洋テックス（株）高松本社



高松帝酸（株）本社



四国計測工業（株）多度津本社

創出につながっており、相応のメリットを感じられている。大学にとっても、地域企業との技術的な結びつきだけでなく、双方を理解した上での人的交流が図られたことのメリットは非常に大きい。地域に貢献する大学として、継続的な関係として維持するとともに、さらに多くの地元企業との結びつきを拡げて、より広く強固な地域産業・人材ネットワークを構築することが重要な課題となっている。

興味を深められたとの意見を持つ学生が多かった。また、この講義を通じて、源内塾への派遣企業が取り組む課題研究に学生参加型チームを組み入れ、地域企業と大学が協働する課題解決体制を構築する上でのノウハウも得られたといえる。

これら企業と学生（ならびに指導教員）との課題解決型共同研究を実施することで、一定の成果を得ることができた。また、これにより、教員と地域のものづくり企業だけでなく、学生と地元企業間の結びつきを一層強めることができた。

4. 今後の課題や展開

本事業で得られた大変重要な成果として、大学と企業間の人的ネットワークが地域に根付き、より広く強固に構築されたことがある。本事業は企業側にとっても学生に就職先として考慮される新たな機会

サテライトオフィスにおける地域貢献活動

代表者 清國 祐二（生涯学習教育研究センター長・教授）

1. サテライトオフィスの意義

現在、サテライトオフィス（以下、サテライト）は県内5か所（東かがわ市、三木町、高松市、坂出市、三豊市）において活動を展開している。日本一狭い香川県において、香川大学がサテライト活動を推進する意義について確認しておきたい。

第一に、地域の方々に香川大学の存在を身近に感じてもらうことである。総合大学の特性を生かした多彩なセミナーは、地域の方々のニーズを掘り起こし、高等教育へのアクセスを容易にするのに役立つと考えられる。

第二に、世代間の教育格差の是正を実現することである。情報環境が整ってきつつあるが、情報格差もまた世代間で生まれてきている。セミナー参加者の多くは高齢者であり、高等教育への進学率が低かった時代に青少年期を過ごしている。「すべての人に高等教育を！」というスローガンを掲げることは地域の実態に即したものである。

第三に、芸術文化活動の地域間格差の是正を実現することである。高松市では恩恵に浴せる芸術文化活動への敷居が高いという声が地方にはある。コンサートや創作活動等、第一線の指導者による芸術文化活動へのニーズが高いことから、アウトリーチ（届ける）活動への期待は大きい。

第四に、香川大学の信頼性を高めると共に、県内高校生の本学受験率と入学者数を増やすことである。地域に優秀な人材を確保するためには戦略的に取り組む必要がある。そのことがCOCやCOC+事業の成果にも繋がっていくと考えられる。

第五に、香川県内の自治体連携をより強固なものとするのである。サテライトオフィスの自治体窓口は政策及び企画の担当課となっている。一方で、現状としてはセミナーを中心に展開しているため、教育部門との連携も欠かせない。つまり、一般行政と教育行政とふたつにまたがった協力体制となり、行政のみならず住民のニーズも把握しやすい仕組みとなっている。

これらの意義を掲げつつ、香川県内の地域ニーズに敏感で、それに応え続けようとする香川大学の姿勢を大切にしたいと考えている。サテライトオフィスにおける地域貢献活動はその中心的な役割を果たしていきたい。

2. サテライトオフィスの波及効果

サテライトオフィスを通じた自治体連携、地域住民への学習機会の提供、行政課題解決への支援、等進めながら、大学の在り方を見直す契機にもなっている。平成27年度に進んだふたつの取組を報告する。

①開催日時の見直しとコンテンツの拡充

サテライトセミナーの定期開講については、平成

26年度までで定着してきたところであったが、コンテンツによっては参加者数に大きな偏りが見られるようになってきた。原因のひとつに、ターゲットとなる地域住民の生活時間が関係していることが突き止められた。そこで、コンテンツによっては、平日や土曜日の日中に開講できるよう、また自治体と予め調整して日時の設定が出来るよう、改善を施した。例えば、坂出市で平日午前中に開催した金融セミナー（3回講座）では、当初の予想を上回る約40名の参加者を得た。金融資産と時間的ゆとりを持つ高齢者がターゲットになることを見越して設定したからであろう。

また、多様な地域ニーズに応えるためには、これまで以上に多彩なコンテンツのラインナップが必要となる。そこで、第3期中期目標・計画に、本学教員の半数以上がコンテンツを提供することを目標に掲げ、平成28年度から取り組むことにしている。（一部、27年度から前倒しで取り組んでいる。）

②かがわ里海大学協議会の設置

かねてより懸案であった「かがわ里海大学」が平成28年度より開学するにあたり、27年度末に「かがわ里海大学協議会」を香川県と香川大学とで組織した。その下部組織として、「かがわ里海大学運営委員会」を位置づけた。前者には吉田秀典副学長と清國祐二教授が、後者には原直行経済学部長と山本珠美准教授が、香川大学を代表して参画している。

これは市町との協定に基づくサテライトオフィスとは若干趣旨を異にするが、サテライトと限りなく親和性の高い取組であると理解できる。市町に開設しているサテライトオフィスは、原則としてそこに在住及び通勤する住民を対象としているが、「かがわ里海大学」は香川県との連携のため県民を対象としている。（受講は他県からの参加も妨げない。）そこで提供されるコンテンツの多くを香川大学教員が担当していることもある。まさに、香川県を連携自治体とする第6番目のサテライトオフィスと位置づけである。

取組の詳細については平成28年度事業となるため、ここでは触れないが、その内容が確認できるよう、URLも紹介しておく。

<http://www.pref.kagawa.lg.jp/kankyō/mizukankyō/satoumi/>



サテライトコンサート



小学生向け工作教室

サテライトセミナー 実施一覧

日付	曜日	開始時間	終了時間	対象	形態	題目	学部	役職	担当講師	募集人員	参加者数
三豊市サテライトオフィス（豊中町農村環境改善センター（三豊市豊中町本山甲192-1））											
2015/4/30	木	18:30	20:00	一般	講義	メタボの話	医	准教授	宮武 伸行	50	27
2015/5/21	木	18:30	20:00	一般	講義	熱中症の話	医	准教授	宮武 伸行	50	26
2015/6/11	木	18:30	20:00	一般	講義	高齢者の健康	医	准教授	宮武 伸行	50	32
2015/7/9	木	18:30	20:00	一般	講義	トイレでわかるあなたの健康	医	准教授	宮武 伸行	50	35
2015/7/22	水	10:00	16:00	小学生等	イベント	夏休み特別企画「夏休み自由研究応援隊」	工	准教授	石原 秀則	-	130
2015/9/26	土	13:30	14:30	小学生等	イベント	どきどきコンサート	教	教授	青山 夕夏	300	200
2015/10/22	木	18:30	20:00	一般	講義	花の形と色の話	農	教授	高村武二郎	50	27
2015/11/12	木	18:30	20:00	一般	講義	三豊の古代史貝塚編	-	名誉教授	丹羽 佑一	50	24
2015/12/10	木	18:30	20:00	一般	講義	三豊の古代史古墳編	-	名誉教授	丹羽 佑一	50	41
2016/1/21	木	18:30	20:00	一般	講義	食事と健康	医	准教授	宮武 伸行	50	40
2016/2/18	木	18:30	20:00	一般	講義	こころと健康	医	准教授	宮武 伸行	30	31
2016/3/17	木	18:30	20:00	一般	講義	運動と健康	医	准教授	宮武 伸行	50	31
東かがわ市サテライトオフィス（東かがわ市交流プラザ（東かがわ市湊1806-2））											
2015/4/20	月	14:00	15:30	一般	講義	糖尿病の話	医	准教授	宮武 伸行	40	18
2015/5/11	月	19:00	20:30	一般	講義	日本から見た東かがわ市の自然環境の特徴	工	教授	長谷川修一	60	28
2015/6/8	月	19:00	20:30	一般	講義	東かがわ市のジオサイトの魅力	工	教授	長谷川修一	60	40
2015/7/13	月	19:00	20:30	一般	講義	東かがわジオサイトの活かし方	経済	教授	原 直行	60	35
2015/8/6	木	10:00	16:00	小学生等	イベント	夏休み特別企画「夏休み自由研究応援隊」	工	准教授	石原 秀則	-	80
2015/11/20	金	19:00	20:30	一般	講義	アンチエイジング化粧品を考える	工	教授	掛川 寿夫	40	18
2016/1/18	月	13:30	15:00	一般	講義	メタボの話	医	教授	宮武 伸行	40	10
2016/2/15	月	13:30	15:00	一般	講義	高齢者の健康	医	教授	宮武 伸行	40	27
2016/3/14	月	13:30	15:00	一般	講義	食事と健康	医	教授	宮武 伸行	40	32
坂出市サテライトオフィス（坂出市民ふれあい会館（坂出市本町1-2-1））											
2015/5/14	木	10:00	11:30	一般	講義	メタボの話	医	准教授	宮武 伸行	40	12
2015/6/3	水	10:00	11:30	一般	講義	糖尿病の話	医	准教授	宮武 伸行	40	6
2015/6/10	水	10:00	11:30	一般	講義	熱中症の話	医	准教授	宮武 伸行	40	14
2015/7/8	水	10:00	11:30	一般	講義	高齢者の健康	医	准教授	宮武 伸行	40	16
2015/8/7	金	10:00	16:00	小学生等	イベント	夏休み特別企画「夏休み自由研究応援隊」	工	准教授	石原 秀則	-	110
2015/10/7	水	10:00	11:30	一般	講義	坂出の歴史①	教育	名誉教授	田中 健二	40	4
2015/11/11	水	10:00	11:30	一般	講義	坂出の歴史②	教育	名誉教授	田中 健二	40	26
2015/12/2	水	10:00	11:30	一般	講義	消費者問題について経済学で考える	地マネ	准教授	三好 祐輔	40	9
2016/1/19	火	10:30	12:00	一般	講義	基礎から学ぶマネー講座①	生涯学習	教授	清國 祐二	40	15
2016/2/16	火	10:30	12:00	一般	講義	基礎から学ぶマネー講座②	生涯学習	教授	清國 祐二	40	32
2016/3/15	火	10:30	12:00	一般	講義	基礎から学ぶマネー講座③	生涯学習	教授	清國 祐二	40	20
三木町サテライトオフィス（サンサン館みき（香川県木田郡三木町大字氷上2940番地1））											
2015/5/1	金	13:30	15:00	一般	講義	讃岐国絵図を読むー高松平野東部を中心にー	教育	特命教授	田中 健二	50	39

序文

概要

教育

研究

社会貢献

シンポジウム開催

日付	曜日	開始時間	終了時間	対象	形態	題 目	学部	役職	担当講師	募集人員	参加者数
2015/5/29	金	13:30	15:00	一般	講義	国際社会学入門	教育	教授	平 篤志	50	14
2015/6/3	水	10:30	12:00	一般	講義	基礎から学ぶマネー講座～1～	生涯学習	教授	清國 祐二	50	11
2015/6/17	水	10:30	12:00	一般	講義	基礎から学ぶマネー講座～2～	生涯学習	教授	清國 祐二	50	15
2015/7/1	水	10:30	12:00	一般	講義	基礎から学ぶマネー講座～3～	生涯学習	教授	清國 祐二	50	8
2015/7/2	木	14:00	15:30	一般	講義	持続可能な社会と社会科学教育	教育	教授	伊藤 裕康	50	6
2015/7/4	土	9:00	16:45	小学生	イベント	子ども科学体験教室	農	-	ASUS (学生)	60	60
2015/7/17	金	19:30	21:00	一般	講義	家庭用テレビゲームの裏側を知る①	地マネ	准教授	大北 健一	50	2
2015/8/9	日	10:00	16:00	小学生等	イベント	夏休み特別企画「夏休み自由研究応援隊」	工	准教授	石原 秀則	-	130
2015/8/21	金	19:30	21:00	一般	講義	家庭用テレビゲームの裏側を知る②	地マネ	准教授	大北 健一	50	4
2015/9/7	月	9:30	11:00	一般	講義	高齢者の健康	医	准教授	宮武 伸行	50	24
2015/9/14	月	9:30	11:00	一般	講義	食事と健康	医	准教授	宮武 伸行	50	27
2015/9/27	日	12:00	16:00	一般	イベント	三木サテライトセミナー1周年記念イベント～生活習慣病と希少糖～	医	教授 准教授	徳田 雅明 宮武 伸行	-	100
2015/9/27	日	13:00	16:00	幼児	イベント	ぬいぐるみ病院の企画実施	医	-	かがわぬいぐるみ病院プロジェクト	-	20
2015/9/28	月	9:30	11:00	一般	講義	運動と健康	医	准教授	宮武 伸行	50	26
2015/10/8	木	13:30	15:00	一般	講義	「讃岐国絵図」を読む② —高松平野中西部を中心に—	教育	名誉教授	田中 健二	50	31
2015/11/12	木	13:30	15:00	一般	講義	「讃岐国絵図」を読む③ —高松城下町の形成と発展—	教育	名誉教授	田中 健二	50	32
2015/12/11	金	13:00	14:30	一般	講義	アンチエイジング化粧品を考える	工	教授	掛川 寿夫	50	24
2015/12/23	水	13:00	16:00	小学生等	イベント	クリスマスイベント	工	准教授	石原 秀則	-	60
2015/12/23	水	13:00	16:00	幼児	イベント	クリスマスイベント ぬいぐるみ病院の企画実施	医	-	かがわぬいぐるみ病院プロジェクト	-	60
2016/1/14	木	19:00	20:30	一般	講義	オリーブの栽培方法	農	教授	望岡 亮介	50	36
2016/1/21	木	19:00	20:30	一般	講義	オリーブオイルの成分とテイスティング	農	教授	田村 啓敏	30	27
2016/1/28	木	19:00	20:30	一般	講義	オリーブの葉の利用	農	教授	小川 雅廣	50	22
2016/2/4	木	19:00	20:30	一般	講義	オリーブの化粧品利用	農	教授	岡崎勝一郎	50	24
イキイキさぬき健康塾（高松市・丸亀町レッツホール 高松丸亀町壱番街東館4階（高松市丸亀町1番地1））											
2015/4/26	日	11:00	12:00	一般	講義	C型肝炎の最新治療	附属病院	助教	米山 弘人	50	31
2015/5/24	日	11:00	12:00	一般	講義	糖尿病と上手につき合しましょう!	附属病院	教授	村尾 孝児	50	37
2015/6/28	日	11:00	12:00	一般	講義	動脈硬化を防ぐかしこい食事	附属病院	病院教授	大森 浩二	50	60
2015/7/19	日	11:00	12:00	一般	講義	認知症の基礎知識と予防法	附属病院	病院助教	森 崇洋	50	68
2015/9/6	日	11:00	12:00	一般	講義	よくわかる食物アレルギーの基礎知識	附属病院	助教	西庄 佐恵	50	33

日付	曜日	開始時間	終了時間	対象	形態	題 目	学部	役職	担当講師	募集人員	参加者数
2015/10/4	日	11:00	12:00	一般	講義	よくわかるパーキンソン病講座	附属病院	准教授	出口 一志	50	37
2015/11/1	日	11:00	12:00	一般	講義	正しいスキンケアで皮膚がん予防	附属病院	助教	森上 純子	50	24
2015/12/6	日	11:00	12:00	一般	講義	ここまでできる脳卒中の最新治療	附属病院	講師	川西 正彦	50	35
2016/1/24	日	11:00	12:00	一般	講義	大腸がんに対する最新治療	附属病院	助教	赤本伸太郎	50	36
2016/2/21	日	11:00	12:00	一般	講義	慢性痛の最新治療—その痛み、がまんしていませんか？—	附属病院	准教授	中條 浩介	50	43

モバイルミュージアムによるさぬき自然史研究 リーダーの養成

科目担当教員 寺林 優 (博物館長・工学部教授)

1. 背景と目的

香川県は、狭い面積に対し、古くから人口が多く、徹底的に開発されてきた。そのため、希少な自然環境があまり残されていない印象があるためか、香川県において、児童生徒ならびに一般市民の自然史に対する興味や関心は、必ずしも高いとはいえない。しかし、注目すべき様々な地質構造が各地に残存している。さらに、香川県に特有の動植物相がみられる。

博物館が所蔵する標本資料と香川大学の人的資源を活用したモバイルミュージアムを通して、児童生徒や一般市民の自然史に対する理解を深める。さらに、高等学校の理系クラスや自然科学部の生徒を対象に、講義、野外実習ならびにその報告会を行う。これらの活動を通じて、将来地元の自然に関する活動に携わる人材を養成する。

2. 実施概要

【自然史標本資料の調査研究】

香川県内および周辺地域の地質、植物、動物などの自然史標本資料の調査ならびに採集をする。さらに、香川県内の学校等に保管されている標本資料の調査とデータベース化を実施し、さらに博物館ホームページでそれらの公開を行う。

【さぬき自然史研究リーダーの養成】

高等学校の理系クラスや自然科学部を対象として、香川県の自然史についての講義、野外実習およびその報告会を行う。それらを通じて、地元の自然史に対する理解を深め、高等学校間の連携を橋渡しし、将来、地域の自然に関する活動に携わる人材を養成する。

【モバイルミュージアムの展開】

博物館の所蔵標本をいくつかのテーマごとにパッケージ化し、サテライトオフィスや小中学校の空き教室や廃校舎を活用して巡回展示をする。合わせて、レクチャーや体験教室を開催する



調査研究によるデータ収集と情報発信と活用

3. 得られた成果

博物館の所蔵標本資料、新たに収集した標本資料について、順次データベース化を進めている。サーバーの所有および管理が不要となり、コストを軽減することができるクラウド型収蔵品管理システムを採用した。写真も含めたデータを平成28年3月末現在、約650件について登録した。



クラウド型データベース管理画面

モバイルミュージアムとして、財田町自然観察同好会の協力で、三豊市財田町公民館で「アリの世界」を平成27年6月1日～8月31日、「カメの世界」を平成27年12月11日～平成28年3月31日に展示した。

また、博物館の所蔵標本資料をトランクキットとして持ち出すことで、児童や生徒が授業で学んだことを標本資料で確かめることが可能になる。平成27年4月28日～5月まで、香川大学農学部遺跡出土の弥生時代土器（つぼ）1点、石器（石包丁）1点を高松市立新番丁小学校に貸し出し、6年生の学習で活用された。



貸出用の土器・石器と説明パネル

4. 今後の課題

今後も地域および学校と協力して、モバイルミュージアムを展開する。しかし、廃校舎および市町村合併によって廃止された庁舎をモバイルミュージアムの場として活用することは、各自治体の長期的活用あるいは民間等施設としての活用方針と相容れず、解決すべき課題が残されている。

自治体連携による瀬戸内地域の活性化と地(知)の拠点整備 —地域志向人材の育成と大学の役割

日時 平成28年1月20日(水) 13:30~16:30
会場 かがわ国際会議場

本シンポジウムは、平成25年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」として採択され、当該事業の支援のもと、香川大学を核とした地域連携事業を継続的に実施できるシステムの構築を目指し、情報提供および意見交換の場として開催し、県内外から約80名が参加した。

はじめに、長尾学長より開会挨拶があり、次に東北芸術工科大学戦略企画担当常務理事である五十嵐眞二氏から「人口が減るのなら人材を増やす」をテーマとした特別講演をいただいた。五十嵐氏は、2018年を境に18歳以下の人口が減少することを挙げ、「地方活性化のカギとなるのは大学での高度な人材育成」であるとして、講演ではデザインを通じた人材育成など東北芸術工科大学での成功例が示され、参加者らは熱心に耳を傾けた。続いて、本学のCOC事業について教育・研究・社会貢献の各分野における今年度取組と各プロジェクトの進捗状況および今年度の成果報告を担当教員より行った。また、本事業開始後、新たに開設された地域志向科目を履修した学生による報告を行った。全学共通科目「地域インターンシップ」については、経済学部2年大野あゆみさん、宮谷亜香里さんが行き、農学部専門科目「オーブ学」については、農学部4年木村汐里さんが授業を通じて自らが何を感じ、学びを得たかそれぞれ発表した。また、本事業の連携自治体の一つである東かがわ市総務部政策課政策・財政グループの竹田誠一氏より、これまでの域学連携

事業について報告いただいた。

香川県では、人口減少や高齢化が進み、定住促進、観光振興、商店街振興、離島振興、コミュニティ活性化など様々な地域課題がある中、活発な意見交換がなされ、本事業を進めるにあたり大変有意義なシンポジウムとなった。



シンポジウム開催の様子

文部科学省平成25年度採択「地（知）の拠点整備事業」
『自治体連携による瀬戸内地域の活性化と地（知）の拠点整備』

平成27年度香川大学地（知）の拠点整備事業活動報告書

〈発行日〉

平成28年9月

〈編集・発行〉

香川大学地域連携戦略室

〈連絡先〉

〒760-8521 香川県高松市幸町1番1号

TEL：087-832-1359 FAX：087-832-1357

E-mail：chiikisen1@cc.kagawa-u.ac.jp

URL：http://www.kagawa-u.ac.jp/coc/

平成27年度

香川大学 地(知)の拠点整備事業 活動報告

